
Eternal Songs

まあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

E t e r n a l S o n g s

【Nコード】

N 6 3 7 0 M

【作者名】

まあ

【あらすじ】

音楽の才能に恵まれ、幼くその才能を開花した少年『響 律』。しかし、幼かった彼は自分の音楽を守るためにその才能に深いキズを刻み込み音楽を捨ててしまう。全てを捨てた律は桜舞う初音島で……

自サイト『悠久に舞う桜』でも連載しています。

prologue

prologue

(……これはあの日の夢だな)

少年とその両親と思われる男女が何か言い合いをしている。

「もう嫌だ!!」

「何を言っているの。律？」

「こんなの僕の好きな音楽じゃない!!」

「お前には才能があるんだ。それを多くの人が認めている」

少年は両親に何かを改めて貰いたいようだが、彼の両親は少年の言葉聞き入れようとはしない。

「才能を認めている？ そんな訳無い!! あいつ等は僕の音楽なんて聴いて無い!! ただ自分の力を見せつける為に僕の音を利用してただけだ!!」

「それでもいいじゃないの。貴方は選ばれた一握りの人間なのよ。父さんと母さんの自慢の息子」

「僕は嫌だ!! 父さんも母さんも変わったよ!! 昔はそんな事、絶対に言わなかった!!」

少年はそう言うと隠し持っていたナイフを取り出し、

「律、お前は何をやる気だ!?!」

「バカな真似は止めて!! 貴方の音楽には価値があるんだから!
!」

(この人達はもう僕の事なんて見てない。あの頃の僕に音楽の楽しさを教えてくれた2人はもう……いないんだ)

自分を止めようとする両親を冷めた目で見て思う。

「今の言葉で分かったよ。あの頃の父さんと母さんはもういない!
!」

少年はそう言うと両親を見て自虐的に笑い。

持っていたナイフを……

利き手である左手に突き立てた。

設定

オリキャラデータ

響^{ヒビキ}
律^{リツ}

性格

クールで無愛想だが実はお人好し。いつの間にかいろいろ背負い込んでいるタイプ。

容姿

黒髪の短髪。瞳の色は翡翠色。美形の部類だが釣り目で眼光は鋭い。利き手である左手の甲に大きな傷がある。

備考

両親が有名な音楽家で律自身も10歳でプロのピアニスト（楽器はどれもプロレベル）をしていたがプロに求められる音楽と自分が求める音楽の差に絶望して利き手の左手を自分で傷つけ音楽界から去る。（現在はリハビリも終えて怪我をする前と変わらず楽器が弾ける）

この時に両親に勘当されて初音島で1人暮らしを始める。

絶対音感を持っている。

花より団子の調理場でバイトをしている。

舞台設定

律、純一達は付属の3年生ですが今回、付属を高校生とさせて頂き
ます。

季節は秋で学園祭が近い。

D・Cのキャラで律の友人は朝倉兄妹、杉並の3人。（音夢がバ

イト仲間だった為、純一と知り合い。その後、杉並に目を付けられる。
ことりは朝倉兄妹と仲が良い。

story・1

律は目を覚ますとあの日、自ら傷つけた左手を見て思う。

（つたく、いつまであの日の夢を見るんだよ？ どっかに捨てたものに未練でも…）

律が捨てたものは両親。

何よりも大切にしていた幼い頃に両親より教わった音楽。

そして多くのものを捨てた代わりに手に入れたものが……

『自由と名の律自身の音』

（……考えても仕方ないな。さてと、今日はバイトも無いし、散歩でもしてくるか？）

律は今日の予定を考えながら朝食の準備を始めるためにキッチンに移動するが、

（……最近はバイトの賄いばかり食ってたからな。何も無いな。夕飯の材料買ってこないと）

簡単な朝食を食べ終えて、律は家を出て行く。

枯れない桜

(ここの桜が一番綺麗だよな)

律は初音島に来た時に見つけたお気に入り場所まで歩く。

(誰もいないな)

この場所は島民の中でもお気に入りになっている人も多く他の人がいる事があるがその時には暗黙のルールがある。

後から来た人間が引くと言うルールが……

(あの夢のせいかな？ 眠てえ……天気もいいし、少し寝るかな)

律は欠伸をすると桜に寄りかかり、昼寝を始める。

……

……

…

(……結構、寝たかな。ん？ 誰か歌ってる？)

目を覚まし、頭を掻いていると桜の裏側から歌が聞こえる。

（人がいるなあ。こんなところで歌ってるって事はあまり聴かれたくないだろうし、ばれないで帰れるか？）

「そんな所で何をしているんですか？」

律がどうするか考えていると歌が止み、少女が律に声をかけてくる。

「……寝てた」

「起こしてしまいましたか？」

「いや、自然に目が覚めたから気にしないで良い。それより、悪かったな。邪魔したみたいで」

律は立ち上がると体を大きく伸ばし、

「まあ、ここのルールは守って欲しかったけどな」

「ゴメンナサイ」

少女に向かいイタズラな笑みを浮かべると、少女は律に頭を下げて謝る。

「こつちも見えない場所で寝てたし、気にするな」

「わかりました」

「俺はそろそろ帰るから好きなだけ歌ってて……」

律は少女の邪魔になると思ったようにここを後にしようとする。

「おーい、律」

律の名前を呼ぶ声がある。

story・2

「純一か。何かようか？」

声のした方を見ると友人の朝倉純一がこっちに向かってきている。

「別にないな」

「なら呼ぶな。しかも、この場所で」

「それもそうだな」

「朝倉君はこの人と知り合い何ですか？」

律は純一の答えにため息を吐いていると少女は純一の知り合いのよう
うで声をかけてくる。

「自己紹介してないのか？」

「……必要無いだろ」

「私、白河ことりっす。あなたは？」

(白河？ ことり？ ……こいつが噂の学園のアイドルか？ 関
わると面倒だな)

少女は自分の名前を名乗ると律に名前を聞くが、律はことりと関わ
るのが面倒だと思ったように、

「……名乗るほどの者じゃ無いです」

「同じネタは面白く無いっすよ」

名乗らずに歩き出そうとするが、ことりは律の腕をつかみ笑顔で言う。

「……同じネタ？」

「前に俺がやった」

「なら待ってくれ。違つのを考えるから」

律の疑問に純一が答えると律は何かを考えようとするが、

「教えてくれないんですか？」

ことりは律の顔を覗き込む。

「……律。響律だ」

「響くん、よろしくっす　私の事はことりって呼んで下さいね」

「分かった。白河」

「ことりです。こ・と・り」

「……しつこいぞ」

ことりは親指を上げて律に言うが、律はことりとあまり関わる気が

ないため、彼女の意見を却下する。

「2人とも呼び方なんてどうでもいいだろ。かつたるいし」

「うーん。仕方ないっすねえ。今回は私が引きますよ」

律の様子にこどりは苦笑いを浮かべる。

「俺はそろそろ帰るぞ。昼食って無いから腹減ったし」

「どうして食べて無いんですか？」

「寝てただろ」

「そう言われればそうですね……でも、もうすぐ夕食の時間ですよ。変な時間に食べたらお母さんに悪いですよ」

律は腹が減ってきたようで帰ると言うことよりは首を傾げるが、律はため息を吐きながら言うとな彼女は納得するが、彼女は律の母親に悪いと言う。

「……俺は1人暮らしだから関係ない」

「ゴメンナサイ。変な事を言ったみたいで」

「……別に」

その言葉に律は冷たく答えることよりは律の態度に何かを感じたように頭を下げる。

「それなら買い物か？」

「ああ。最近、バイトの賄いばかりだったから何も無くてな」

純一は話を変えようとしたのか、律に聞くと律は冷蔵庫の中が空だと答える。

「商店街か。俺も行くかな」

「どうしてだ？」

「音夢も今日はバイト無いんだよ。だから何か買って帰らないと」

「毒物を食わないといけなくなるか？」

（毒物！？）

純一は苦笑いを浮かべながら、律に同行する理由を言つと律は純一の義妹の朝倉音夢の料理の腕をバカにし、ことりは苦笑いを浮かべている。

「そう言う事だな」

「……うちに来るか？」

「いいのか？」

「1人分も2人分も変わらん」

純一が苦笑いを浮かべていると律は純一を家に誘うと、

「音夢は無視っすか」

ことりが苦笑いを浮かべながら、突っ込む。

「忘れてたな」

「ああ」

「酷いっすね」

「まあ。冗談はこれ位にして、どうする？」

「食べる」

「なぜ、白河まで返事をする？」

「何か仲間外れみたいだから一緒にしようかと」

律は改めて純一に聞くとなぜかことりも返事をする。

「……まあ、いいか。純一、音夢に連絡入れとけよ」

「後でよればいいだろ」

「料理始めてたらどうする？」

「音夢だけ置いて来るに決まってるだろ」

「……俺としては音夢の料理は食材やそれを作った人への冒瀆だと思うから極力止めたいんだが」

（そこまで酷いんですか？）

「電話するか」

純一が音夢に電話をかけた後、商店街へ向かう。

story 3

商店街

「響君って料理上手なんですか？」

「困らない位に」

律が八百屋で大根を手にしているのを見て、ことりはその絵が妙にしっくりときていると感じたようで苦笑いを浮かべながら聞くと律は愛想もなく返事をする。

「まあ。音夢よりは確実だな」

「……あの劇物と一緒にするな」

（あつ！？ さらに酷くなった）

純一はことりの疑問に横から口を出すと律は音夢と比べられる事が不満なようで不機嫌そうに答えた後、

「で、何が食いたい？」

「店屋物や弁当じゃ無いもの」

夕飯のメニューを聞くが、純一は何も考えていなかったようで苦笑いを浮かべる。

「カレーなら純一も作れるし……鍋はまだ早いしなあ」

「人数も多いしいんじやないですか？」

「俺もいいぞ。多少早いがいいだろ」

「なら何鍋がいい？」

律は純一の返事に困ったように首を傾げると純一とことりは鍋で良
いと答え、律は何鍋にするかを聞くと、

「キムチ鍋はどうだ？」

「キムチ鍋っすか？」

純一はキムチ鍋にしようと言うが、ことりは辛いものが苦手なの
苦笑いを浮かべる。

「白河は辛いのがダメか？」

「は、はい。辛いものはちょっと……」

「なら、水炊きか何かにするか」

「まあ、商店街に行ってからだな」

「申し訳ないっす」

律はことりの様子に声をかけるとことりは申し訳なさそうに答え、
律と純一は特にキムチ鍋にする必要もないためメニューを変えると
言うところ人は材料を買い響家へ向かう。

story・4

響家

「おじゃまします」

「誰もいないんだ。言う必要はない」

純一が音夢を呼びに家まで戻ったため、律はことりを連れて家に帰る。

「結構、綺麗にしていますね」

「意外か？」

「それでも無いですね……割としっかりしてそう」

「……それはどうも」

「手伝う事ありますか？」

律はことりを居間にあげると自分はキッチンに立ち準備を始めるが、ことりは男の1人暮らしの家が珍しいのかキョロキョロと居間を見渡した後、律の後ろから声をかける。

「食材切るだけだし……手伝いたいのか？」

「流石に何もしないのは暇っすから」

「そうだな……ん!? 白河は家に連絡しなくていいのか?」

「あっ!? 忘れてました。電話を借りてもいいですか?」

「携帯持って無いのか?」

「……あんまり電話って好きじゃないんですよね」

律はことりが律達と夕飯を食べると言う事を家族に言わなくて良いのかと聞くと、ことりは苦笑いを浮かべる。

「……そうか。ほら」

「……気にしないで下さいね。さっき、私も同じ様な事を言っただしお互い様っす」

「ああ」

律はことりの様子に何かを感じたようで少し沈黙した後、ポケットから携帯を取り出し、ことりに渡すと彼女は律に気にしないで欲しいと笑顔を見せて言う。

(しかし、どうしてこんな事になったんだ?俺のキャラじゃないよな)

「ありがとうございました」

ことりが家に電話をかけている中、律は準備をしながら、不意にそんな事を考えているとことりが電話が終わったようで律に携帯を返す。

「親に何も言われなかったか？」

「別にやましい事する訳じゃないんですから」

「それもそうだな」

2人で顔を合わせて苦笑いを浮かべた後、準備を続ける。

story・5

「こんなもんだな」

「そうですね」

準備が終わったところで、家のインターホンがなる。

「タイミング良いですね」

「音夢が手伝うって言わないように純一が時間を見計らったんだろ」

「えーと、あはは」

ことりは律の言葉に苦笑いを浮かべると、

「おじやまします」

「律、来たぞ」

「いらっしやい。朝倉君、音夢」

純一と音夢はこの家に良くきているようで当たり前のように居間にあがってくると家主の律を差し置いてことりが2人を出迎える。

「……何故、白河が言う？」

「何か新婚さんみたいですね」

「何でそうなる？」

「気にしたらダメっす」

「そうか……（この女、苦手だ）」

律はことりの様子にため息を吐くがことりは笑顔で冗談を言うと律は彼女に何を言っても彼女のペースに持って行かれると思ったように、鍋に火を入れる。

「今日のご招待ありがとうございます」

「……音夢が料理すると食材が可哀想だからな」

「響君！！」

音夢は律が夕飯に誘ってくれた事に礼を言うが、律は音夢に料理をさせたくないと思っっているようで真剣な表情を見ると、音夢は律の返事が気に入らなかつたのか声をあげる。

「えーと、2人って知り合い何ですか？」

「バイト先が一緒なんだ」

ことりは2人の様子に苦笑いを浮かべながら聞くと、律は素っ気なく答えて音夢は頷くが、

「……音夢とバイト先が一緒って事は花より団子ですよ？ 私、よく行くけど響君が働いてるの見た事無いよ」

ことりは律と音夢のバイト先には良く行くが律を見たことがないた

め、首を傾げる。

「俺は調理場担当だからな」

「無愛想だから接客に向いて無いんだ」

「兄さん！失礼ですよ！！」

「音夢。その通りだし怒るな。それにお前が調理場に入れないんだから多くなるんだろ」

ことりの疑問に律が答えると純一が補足をし、音夢は失礼だと言っが、律は気にする事なく音夢の料理の腕をバカにする。

story・6

「そこまで言わなくても」

「そんなに酷く無いでしょ」

音夢が口を尖らせるのを見てことりは音夢のフォローに回ろうとするが、

「前に店長がメニューの料理を教えたんだが……危なく営業停止になるところだった」

「うー」

律はその時の事を思い出しているようで音夢に冷たい視線を送ると音夢は小さくなり、純一とことりは苦笑いを浮かべる。

「先に聞いとくか。締めはうどんか？ 雑炊か？」

「そこまでいくか？」

「確かに多いかも知れないですね」

鍋が煮えたのを見て、律は締めを何にするか聞くとそこまでいかないと言う結論になり、

「それなら、俺の明日の夕飯だな」

「明日も休みか？」

「ああ」

律は残りを明日の夕飯にしようと言っていると純一が律がバイトとのシフトではない事に驚いたような表情をする。

「久しぶりですよ。こんなにシフトがスカスカなの」

「そうだな……と言うか。この間が忙し過ぎたんだ」

「どうしてですか？」

「調理スタッフが怪我したから穴埋め」

律は忙しかった理由を話すと、

「バイトの割に頼りにされてるよな」

「今のバイトの面子で一番長いから」

「実際、兄さんと違って響君はしっかりしてますから」

「……何が目的だ？」

音夢が律を誉めるため、律は音夢が何か企んでいると感じたのか疑いの視線を向ける。

「どうして疑うんです？」

「……何となく」

「実際はどうなんですか？ 朝倉くと仲いい割には響くんの噂って聞かないですけど」

「俺と仲いいとどうして噂になるんだ？」

音夢は律の態度に頬を膨らませるが律に謝る気はなく、ことりは音夢の言葉で律も要注意人物だと思ったように律に聞くと、純一は不満そうに言っが、

「ブラックリストにのってるからだろ」

律は純一に言葉をすぐに却下する。

「……あれは杉並の仕業だ！！ 俺は巻き込まれてるだけだ！！」

「その割には兄妹揃って楽しそうだけだな。追いかけてこ」

純一は自分は被害者だと言いたいようだが、律は聞き入れる気はなく、純一と音夢の追いかけてこの事を言っつと、

「好きでやってる訳じゃない！！」

「そうですよ」

「そうだな……音夢は追いかけるんじゃなく、純一に追いかけて貰いたいんだよな」

純一と音夢は律の言葉を否定しようとするが、律は考えを変える気はない。

「どっしりしてそうなるんですか？」

「……言っているのか？」

「止めて下さい！？」

話をしながら夕飯は続いていく。

story 7

「美味かった。やっぱり飯はこうで無いとな」

「唯の鍋だ。誰でも……」

夕飯を終えると純一は鍋がよほど美味しかったように満足気に言う
と、律はこんなものは誰でもできると言いかけるが、

「俺が悪かった」

音夢を見た後、純一に心からわびる。

「どうして、そこで私を見て謝るんですか？」

「流石に酷いと思うっすよ」

音夢は律の態度に不機嫌になり、ことりは苦笑いを浮かべながら音
夢のフォローに回るが、

「なら、食ってみる」

「……ゴメンナサイ」

「うー」

律の一言にそれは勘弁して欲しいと思ったように頭を下げると音夢
は納得がいかないように小さく唸り声をあげている。

「で、でも、音夢って料理できそうなんですけどね」

「何が悪いのかなあ」

ことりは音夢の様子に慌ててフォローに戻ると音夢は自分の料理の腕が上がらない事を悩んではいるようであまりため息を吐くと、

「味見しないところ、基本も出来てないのに勝手にオリジナリティを求めるとこ」

律は何度か見た音夢の調理している姿を思い出し言う。

「そこまで分かってるならできそうじゃないですか？ きっともう少しだよ」

「そうかな？」

ことりは律の言葉に音夢に頑張れと言うと音夢は笑顔を見せるが、

「それが出来れば苦労しない」

「作ってる途中で必ず暴走する。そうになると周りの声は聞こえ無い。それが例え目上の人でも」

「それは何て言ったらいいのか」

律と純一は無理だと言い切り、ことりは苦笑いを浮かべる。

「……なあ。律。音夢に料理を教えやってくれないか？」

聞いた相手が悪く、音夢は落ち込んで行く。

「なあ、どうして料理しようと思ったんだ？」

「……別に、1人暮らし始めた時に何となくだな」

純一は音夢の様子を見て苦笑いを浮かべながら、律が料理を覚えた経緯を聞くと律は自分の左手に視線を移しながら言つと、

「……音夢。本気で基礎からやるなら考えてやる」

何か考える事があつたようで音夢の名前を呼ぶと料理を教えてやつても良いと言つ。

story・8

「本当ですか!?!」

「材料費はお前持ちで失敗してもお前が必ず食つと言つ条件でならな」

「……あれをか!?!」

「失敗を噛み締め無いと上達しないだろ」

音夢は律の提案に食いつくが律は条件を出すと純一は律のあまりに厳しい条件に顔をひきつらせる。

「やります!?!」

「本気か!?!」

「兄さんも響君も私の事をバカにしていますから絶対に美味しいって言わせませす!?!」

音夢は律と純一に小バカにされているため、『やる』と言っているが、

「……こつやって直ぐに熱くなるから失敗するし、杉並にも逃げられるんだ」

「なるほど」

「響くん、割と酷いっすね」

「状況を理解してると言ってくれ」

律は状況を冷静に眺めている。

「でも楽しそうですね ……私もきても良いですか？」

「好きにしる。材料費は音夢持ちだし」

「来る時くらい自分でだしますよ」

ことりは燃えている音夢を見て、自分も参加したいと言つと、律は愛想もなく答え、ことりはそんな律を見て苦笑いを浮かべる。

「ことりは料理出来るだろ。律に習う必要ないだろ」

「みんなで何かするって楽しいじゃないですか」

純一はことりの料理の腕を知っているのか首を傾げるとことりは笑顔で言うが、

「……そうか？」

「そうっす」

律はことりの言いたい事が理解できないように首を傾げると、

「まあ、やる日は俺と音夢がバイト無い日だけど前日にも言えば

いいか？」

「うん」

「私もいいです」

簡単に音夢に料理を教える日を決めると音夢とことりは問題ないと頷く。

「なら、音夢。料理を教えてやるから、1つ約束しろ」

「何ですか？」

律は音夢にもう1つ約束しろと言つと、

「誰か付いて無い時は料理をしない事を」

「……わかりました」

1人で料理をするなど言い、音夢はその言葉に律から視線を逸らしながら頷くが、

「純一じゃダメだからな」

「うっ！？」

律は音夢の考えを読んでいて、再度、釘を刺し、

「……読まれてますね」

「……ああ
」

純「とことりは苦笑いを浮かべる。

story・9

「ん。結構長居したな。そろそろ帰るぞ」

「そうですね」

しばらく、ゆっくりしていると純一が時間を確認して帰ると立ち上がる。

「白河、家はどこだ？」

「近いですよ」

「……遠いんだな」

「はい」

律はことりに家の場所を聞くと彼女は何か遠慮をしているようで笑顔で近いと言うが、律はそれを嘘だと見破り、ことりは苦笑いを浮かべる。

「送る」

「良いんですか？」

「一人で帰すわけにもいかないだろ」

律とことりは純一と音夢と別れ、ことりの家に向かう。

「響くんって優しいですよね」

「……普通だろ。当たり前的事をしてるだけだ」

「それが出来るから優しいんですよ」

ことりは何も話さないで隣を歩く律の顔を覗き込み笑顔で言つと、律はことりから視線を逸らす。

「照れてますね」

「……少し。それより、白河は音夢が料理を覚えてもいいのか？」

「どうしてですか？」

「ライバルの株が上がるだろ」

「何かお見通しっすね」

律はことりにとって音夢の料理の腕があがる事は良い事ではないと気づいているようでことりに聞くと、彼女は苦笑いを浮かべる。

「……わかりやすいぞ」

「これでも、ばれて無いつもりなんですけど……それになわなない気がしますし」

「……純一が自分の気持ちを認める勇氣を持てれば直ぐにうまくいくんだけどな」

「兄妹ですからね……」

「……血は繋がってなくてもな」

律とことりは純一と音夢が義理の兄妹だと気づいているようである、
言いつつ、

「響くんは音夢が好き何ですか？」

ことりは律の言葉に律は音夢が好きだと思ったようである、律に聞くが、

「どうかな？ よくわからないな。友人としては好きだと思うが恋愛と言つのは良くわからない」

「そうですか」

「ああ」

律とことりが話をしながら歩いていると、

「遅いぞ」

ことりの家の近くまでできていたようである、ことりの姉の白河 暦が2人を見つけて声をかくてくる。

「ただいま。お姉ちゃん」

「こんばんは。白河先生」

「ん！？ 響。どうしてお前がここにいるんだ？」

「響くんの家で夕食をご馳走になったからだよ」

ことりは律の名前までは出していかなかったように暦は首を傾げるとことりは律の家に行ったと言つと、

「……ことりに変な事してないだろうね」

「してないです。それじゃあ、俺は帰ります」

暦の視線は鋭くなるが、律は気にする声なく、頭を下げて自分の家に戻るうとする。

「響。世話をかけたな」

「……別に何もしてないですよ。それでは失礼します」

「また、明日ね」

「ああ」

律は2人にもう1度、頭を下げた家に向かい歩き出す。

通学路

(眠いなあ……やっぱり、早めに切り上げて寝れば良かった)

「響君、おはようっす」

「……おはよう」

律は欠伸をしながら風見学園に向かっていている途中で、律の姿を見つけたことりが律の元に駆け寄ってくる。

「昨日はご馳走様でした」

「……ああ」

ことりは昨日の夕飯の礼を言うが、律は眠たいようで反応は薄い。

「ずいぶんと眠そうですね？」

「ああ。ちよつとな(……遊びだったつもりなんだけど、予想以上に良い曲になったからな)」

ことりは律の反応の薄さに苦笑いを浮かべるが、律は昨日の夜に新しい曲を思いついたようでそのせいで睡眠時間が足りなく、欠伸をする。

「夜更かしですか？」

「まあ、そんなとこだ」

ことりと律の様子に何か疑問を思ったのか首を傾げるが、律は何をしていたかなど話さずに2人で学園に向かい歩いて行く。

「ことり、おはよう」「」

「みっくん、ともちゃん、おはよう」

しばらく、歩いているとことりの2人の少女が彼女を見つけて挨拶をし、ことりは笑顔で挨拶を返す。

(……森川か)

律は2人うち1人が去年、クラスメイトだった『森川 知子』だと気づき、小さく頭を下げると知子も律に気づき、笑顔を見せた後、

「響君、ことりと知り合い？」

「……ちよつとな」

「あれ？ ともちゃんは響さんと友達さんですか？」

少女は律にことりとの関係を聞くとことりは頭を傾げる。

「去年、同じクラスだったんだ……それより、1人置いてかれてる」

「ゴメン。みっくん」

律はもう1人の少女が律を警戒しているのか、距離をとっている事に気づきことに声をかけると彼女は少女に謝り、

「響君、この子は佐伯加奈子」

知子は律にもう1人の少女を紹介する。

「響律だ。よろしく、佐伯」

「……よろしくお願ひします」

律は加奈子に向かい軽く頭を下げるが彼女は目つきの悪い律を怖がっているように見える。

(怖がられてるな……いつもの事だな)

律は自分の目付きの悪はを自覚しているせいか彼女に何も言わずにいると、ことりと知子は律の様子に苦笑いを浮かべると、

「みつくん、大丈夫だって 見た目は人の1人や2人殺してそうだけど、割と人畜無害だから」

知子はあまりフォローになってはいないが律をフォローし、ことりは苦笑いを浮かべたまま頷く。

「……らしいぞ」

「スイマセン。怖かった訳じゃ」

「気にするな。いつもの事だ」

加奈子は律の様子に慌てて頭を下げるが、律はいつもの事のため、気にした様子はないが、

「響君、すねたらダメっすよ」

「…ああ」

「そこは何かボケなきゃ」

「それは悪かった」

ことりと知子は律をからかいたいようで悪戯な笑みを浮かべると加奈子はその様子に少し警戒を解いたようで笑顔を見せる。

「……これはケンカ売られてるのか？」

「う、う、ごめんなさい！？ そんなつもりじゃ」

律は自分の事を見て、クスクスと笑う加奈子を睨みつけると彼女は律の目つきがよほど怖かったようで半泣きになりながら謝り、

「悪い。冗談だ。泣かないでくれ」

律はその姿に若干、傷つきながらも驚かせた事を加奈子に謝る。

「君の目つきじゃ冗談にならないって」

「みつくん、響くんは優しいから怖がらなくて大丈夫っすよ」

ことりと知子は2人の様子を見て苦笑いを浮かべながら律をフォロ―するが、

「目つきが極悪だけど」

「……悪かったな。俺だって、好きで目つきが悪いわけじゃない」

律は目つきの悪さだけはどうにもならないと言い、その姿を見て加奈子は少し律への警戒を緩めたように笑う。

「それじゃあ、誤解も解けたようだし、行きましょう」

「そうだね」

ことりは加奈子の様子を見て登校しようと言い、再び、学園に向かい歩き出すと、

「……杉並、お前は何がしたいんだ？」

「流石は同志響だな」

律は何かの気配を感じたようであまりため息を吐きながら、律の数少ない友人の名前を呼ぶと律に名前を呼ばれた男子生徒は笑顔でカメラを向けており、

「……杉並君!?!?!」

ことり、加奈子、知子の3人は杉並の登場に驚きの声をあげる。

「……何の用だ？」

「何、同志響が美少女を3人も引き連れて登校してると言うからな」

「また、変な新聞を作る気か？」

「変なとは何だ!?! 我ら非公式新聞部ををバカにつもりか？」

律は杉並の様子におかしな事に巻き込まれるのはごめんだと言い切るが杉並は企んだように笑う。

「……正直、俺に関わらなければどうでもいいが、今回はこの3人に迷惑がかかりそうだから、くだらない事するなら潰すぞ」

「この記事を書かない代わりに学園祭に……」

律の目つきは一層鋭くなるが、杉並は律の言葉を聞き入れようとないたため、

「……人の話を聞かない男だ」

律は杉並の言葉を遮って彼の腹に1撃を加え、カメラからフィルムを抜き取る。

「っ、強いですね」

「あの杉並君を一発で」

律の突然の行動にことりと知子は苦笑いを浮かべ、加奈子は少し引きつった笑みを浮かべる。

「……浅かったか」

「写真での説得は失敗か。今は退くことしよう」

律は杉並を殴った感触に疑問を感じると杉並はニヤリと笑った時、一陣の風が吹き、杉並は姿を消す。

「……あいつは人間か、時々わからなくなる」

「君もその点じゃ負けて無いって」

「……それはどうも」

「杉並くんは相変わらずっすね」

杉並の行動で微妙な空気が流れるなか、

「人間、変わる時は簡単に変わるがあいつは変わらないだろうな」

律はそうつぶやくと少し悲しそうに笑う。

(……あれ？ 今、響くんにか何かあった？)

「どうした？」

加奈子は律の様子に何かを感じたのか律を見ると、律はその視線に気づき、加奈子に声をかけると彼女の顔を覗き込む。

「な、何でも無いよ!？」

加奈子は律の行動に顔を赤くして慌てる。

「顔が赤いぞ。風邪か？」

「だ、大丈夫だよ」

「熱は無いな」

律は加奈子の額に手を当てると彼女の顔はより一層、赤く染まり、そのやりとりを見てことりと知子は、

「響君はどこか天然だよな」

「そうっすね。普通にしているとモテそう」

「確か、隠れファンも多いと思ったけど」

「それは初耳ですね」

苦笑いを浮かべながら、律の学園での評価を話し始める。

「1人、教室の隅で本を読んでる美少年」

「友達いなさそうですからね」

「クールで運動神経よくて顔も頭もいい……同性から嫌われる要素満開ね」

「そうっすっねえ。自分で弁明何か絶対にしないタイプですし」

「……確かにねえ」

2人が律のイメージが自分達の考えと合致したようであんぐんと頷いていると、

「白河、森川、そろそろ行かないと遅刻するぞ」

「ことり、ともちゃん、行こうよ」

律と加奈子は学園に行くと言つと、

「2人でいい雰囲気だしてたくせに」

「私とことりはあの空気に入れなかったただけなのに」

「そんな事無いよお」

ことりと知子は加奈子をからかい、加奈子は慌てて否定するが、

「……何がだ？」

律は何を言われているかわからないように首を傾げる。

「な、何でも無いよ。響君も行こうよ」

「……ああ」

加奈子は律に気にするなと言つと律は頷き、4人は学園に向けて再度、歩き始める。

律は教室に入ると誰にも挨拶をする事なく、窓際が一番後ろの自分の席に座る。

このクラスには律に親しい友人と呼べるような人間はいない。

(……うるせえ。白河達と登校した事がもう噂になってるのか？面倒だな)

律を遠巻きに朝の事を噂してる声が聞こえる。

(……まったく、暇な奴らだな。人に難癖付ける位なら、自分で行動しろよ……まあ、本当の白河を見ようとしないうじゃ、舞台にも上げれ無いだろうけどな)

律自身、自分が学園の多くの男子から嫌われているのを理解している。

無愛想であり人と関わろうとしない律自身にも問題があるが……

それでも、自分の事を棚に上げて人を悪く言う人間を律は好きになることはできなかった。

そんな中、律を友人と言ってくれる。

純一や音夢、杉並のような存在がありがたかった。

(……だから俺はまだここに居るのかもしれない)

幼い頃にプロのピアニストをしていた為、律の少年時代は世界中を飛び回っていた。

そんな環境の中にいたせいもあったのだろう。

律は人付き合いと言うものが理解できていない。

(実際、1人でなら一生遊んで暮らせる蓄え位あるんだけどなあ)

律は幼い頃から両親に音楽を習い、才能もあった為にずっとその道

で生きて行くと決めていた。

あの日、すべてを捨てるまでは……

あの日、事を後悔してる訳ではない……

それ以上に手にしたものは大きいと思っている。

学園やこの初音島の風景。

今までに見た事も感じた事も無い。

新鮮な空気。

それらに触れる事で律自身の音を……

好きになれた。

ただ、両親に習っていただけの個人の無い音とは違う。

新しい律自身の音を……

（まったく、捨てた後の方が、いい曲が書けるようになるなんて皮肉なもんだけどな）

昨日、思い描いた曲を頭の中で奏でる。

(……まあ、趣味は楽しいもんでないとな)

だからこそ、新しい道を探そうと思った。

自分は音楽しか知らなかったから……

新しい道を探す為に……

ここにいるのだらう。

新たな可能性を自分自身に見出す為に……

(……やっぱり、俺は空っぽだった訳だ)

今は、すべてが輝いて見える。

幼い頃に律自身が望んで両親に教わっていた日々のように……

（それがわかっただけでも成長出来てるって事か？）

そんな事を思いながら律は1人微笑む。

(相変わらず、戦場だったなあ。さてとどこに行くかな?)

「響くん、1人でご飯ですか?」

昼休みになり律は購買で勝ち取ったパンを手に昼食の場所を探していると、小さなお弁当箱を手にしたことりが律を見つけて駆け寄ってくる。

「……白河。まあな」

「寂しいっすね」

「……別に」

律はことりの言葉に興味がなさそうに返事をする。ことりはそんな律の様子に苦笑いを浮かべるが、

「じゃあ、私達と一緒にしましょう」

まるで良い事を思いついたと言いたげに律を昼食に誘う。

「遠慮する」

「まあまあ、遠慮しないでください。みっくんとともちゃんも一緒ですから」

律はことりの誘いをすぐに断るがことりは律の腕をつかむと律を引

っ張る。

「……離せ」

「まあまあ気にしない」

律はことりと一緒だと今朝の杉並や噂話のように面倒な事に巻き込まれると思い、ことりを振り払おうとするが、女の子相手に本気で振り払うわけにも行かないため、ことりを振り払う事ができず、中庭で知子と加奈子の2人と合流する。

「ゴメンね。ことりが無理やり誘ったんでしょ？」

「……ああ」

「……酷いですね。そこは否定するべきですよ」

知子はことりに引きずられてきた律を見て苦笑いを浮かべながら言う、律は不機嫌そうに頷き、ことりは律の表情に苦笑いを浮かべるが、

「事実だろ」

「まあ、そうですね」

「まあまあ。2人とも落ち着いてよ。お昼の時間なくなっちゃうよ」
律は表情を変える事もなく言うと、ことりは少し頬を膨らまし、2人の様子に加奈子は苦笑いを浮かべながら、2人をいさめる。

「響くん、お昼パン何ですか？ 料理出来ますよね」

「まあ、朝から作る気にはならないな」

ことりは律がパンの袋を開けるのを見て首を傾げると律は面倒そうに答える。

「響君って、一人暮らしなの？」

「そうですよ」

律とことりのやりとりを聞いて加奈子が首を傾げるとなぜかことりが答える。

「大変じゃない？」

「……別に」

律は決別したはずの両親の話につながるためか、不機嫌そうな表情をしたまま答えると知子と加奈子は律の表情を見て気まずい表情をするが、

「男の子の1人暮らしの割に凄く綺麗にしてるんですよ」

ことりは気にする事なく、昨日の律の家の印象を話す。

「ことり、行った事あるの？」

「夕食をご馳走になりました」

「……昨日、純一と音夢と一緒にな」

知子はことりの言葉に苦笑いを浮かべながら聞き返すと、ことりは笑顔で答え、律はため息混じりでことりの言葉を補足する。

「どうしてそうなったの？」

「それはですね……」

加奈子が当然の疑問を口にするとことりは楽しそうに昨日の事を説明する。

「……それはうちのことりが迷惑をかけて」

「……出来れば、きちんと手綱を引いていてくれると助かる」

「うん。気をつけるよ」

ことりの説明に知子は大きなため息を吐くと、

「流石にそれは酷いんじゃない」

「みつくんだけだよ。私に優しくしてくれるのは」

加奈子は苦笑いを浮かべながら、ことりをフォローしようとして、「
とりは喜びを体で表現したいようで加奈子に抱き付き、

「ちょっと!?!? ことり、離してよ」

「みつくんまで私を捨てるの?」

「何でそうなるのよお!?!?」

加奈子はことりの当然の行動に驚いたようだが、嫌がっているようには見えない。

「……ほつといていいのか?」

「いいんじゃない。それより」

「……何だ?」

律はことりと加奈子の様子を見て呆れたような表情をして言うと、知子はそんな律の様子が珍しいようで苦笑いを浮かべ、律は知子の様子に何かを感じたようでも聞き返す。

「イヤね。去年の君はこんな風に誰かと一緒にいるって事が無かったから、なんか、変な感じ」

「……そうだな」

知子の言葉に律は何か感じる事があったのか、微かに表情をゆるませると、

「そう思うなら、学園祭に協力しろ　MY同志響よ」

「……人の心を読むな」

律の考えている事が何かわかっていいのか、杉並が律の背後から声をかけ、律は杉並の登場に特に驚いたような表情をするわけでもなく、ただ疲れたようでもため息を吐く。

「杉並君、君はいつもどこから出て来るの？」

「秘密だ」

知子は杉並の登場に表情をひきつらせながら言うが、杉並は知子の表情を見て楽しそうに笑う。

「……非公式新聞部には秘密の抜け道があるからな」

「秘密の抜け道？」

「そんなものがあるんですか？」

「何でそう思うの？」

律は杉並の様子にため息を吐きながら言うと、律の口から出た『抜け道』と言う言葉に3人は首を傾げる。

「あゝ、言いたい事はわかるが、事実だ。この学園には所々に音の響き方の違う箇所がある……そこに抜け道がある」

「何故！？ 知っている」

「……別にいいだろ」

律は3人の表情に苦笑いを浮かべながら、説明をすると杉並は一瞬だけ驚いたような表情をするが、

「それで学園祭の話だが」

すぐにいつもの表情に戻り、自分優位に話を進めようとする。

「……勝手に協力する方向に持っていくな」

「いいのか？ 俺にはこの状況を幾らでも改ざんして新聞を作れるんだぞ」

律はため息を吐きながら、杉並に手伝わないと云うが、杉並はニヤリと笑い、律を脅迫しようとするが、

「……なら、俺にも考えがある」

律が脅迫にのる事はない。

「何をするの？」

「……手始めに抜け道のルートと部室の位置でも音夢に教えるぞ」

加奈子は律の様子を見て苦笑いを浮かべながら聞くと、律は表情を変え、変える事なく、抜け道を風紀委員に話すと云う。

「……この俺を脅迫か？ 流石はM Y同志響だ」

「……誉められてる気がしないな」

杉並はわざとらしく驚いたような表情をすると彼なりの最高の誉め言葉を言うが、律はため息を吐く。

「きつと、杉並君なりの最高の誉め言葉だと思つ」

加奈子は律と杉並の様子に苦笑いを浮かべながら言うと、「ことりと知子も同じ意見のようで苦笑いを浮かべながら頷いている。

「よくわかつてるじゃないか」

「……………そろそろ帰っていいか？ 授業始まるし」

「今更、優等生のふりするなよ」

杉並は笑顔を見せると律は面倒になったようにパンの袋をゴミ箱に投げると立ち上がり、教室に戻ろうとするが杉並は爽やかな笑みで律の行動を否定する。

「その意見には賛成だが……………その笑顔は何だ？」

「賛成しちゃうんだ」

「まあ。響君だしね。サボリの常習犯だし」

律がため息を吐くのを見て、知子と加奈子は苦笑いを浮かべる。

「あれっ!?! 響くんって成績いいですよね」

ことりは定期考査後に廊下に張り出される学年順位に律の名前がある事を思い出したようで驚いたように言うと、

「文系だけなら杉並君よりいいんじゃない?」

「……………まあな」

知子は苦笑いを浮かべたまま言うと、律は興味があまりなさそうに頷きながらも、

(一応、昔はとうさんとかあさんと一緒に世界中を飛んでたからなあれだな。習うより慣れろって奴だな)

以前、両親とともに暮らしていた時の事を思い出している。

(世界中を飛び回ってた? 響くんは何をしてたんですかね?)

ことりは律の考えている事を正確に読み取っているのか、首を傾げていると、

「羨ましいなあ……………」

「……………佐伯は文系ダメか?」

加奈子は律が文系の教科が得意だと言うと、うらやましいのかため

息を吐き、律はそんな彼女の様子を見て声をかける。

「あんまり良くないかな」

「なら、響君に教えて貰ったら」

「えっ!? な、な、何を言ってるの? ともちゃん、そんな事頼んだら悪いでしょ」

加奈子は苦笑いを浮かべながら答えると知子は律に加奈子の勉強を見て欲しいと言うが、彼女は顔を赤くして遠慮する。

「大丈夫だろ。これで結構お人好しだから」

「そうだね」

「そうですね」

加奈子が遠慮をしているのを見て、杉並が楽しそうに言つと、ことりと知子はニヤニヤ笑いながら杉並の言葉に同意する。

「……………うるせえよ」

「いっ、いっ、ごめんなさい!？」

「……………佐伯は悪く無いから謝るな。悪いのはこいつらだ」

律は照れくさいのか不機嫌そうに言い、加奈子は律を怒らせたと思つたよう慌てて謝ると、律は呆れたように加奈子に言つ。

「杉並くんと同列扱いつすか!？」

「それはちよつと酷いね」

「光荣だろ」

ことりと知子は律の言葉に心外だと言いたげに言うが、杉並は楽しそうに笑っている。

「……お前は少し人の話を聞いたらどうだ？」

「無理だな」

「……聞いた俺が悪かった。それより、そろそろ戻らないと本気で不味いぞ。俺や杉並はいいとしても3人は不味いだろ」

律は杉並の様子にため息を吐くが、杉並が態度を改める事はなく、律は肩を落としながら、3人に教室に戻るように言う。

「いや、2人も戻らないと不味いでしょ」

ことりは律の言葉を聞いて苦笑いを浮かべながら言うが、

「……そうか？」

「べつに構わないであろう」

律と杉並は授業をサボる事をなんとも思っていないようで首を傾げる。

「バカな事を言っ
て無いで戻ろつよ」

知子は苦笑いを浮かべた後、教室に戻ろつと言つと、律は面倒くさそうに頷き、5人は教室に戻る。

(……終わった。今日はバイトもないし、杉並に巻き込まれる前に帰るか)

「響、今週掃除当番だから帰るなよ」

SHRが終わり、律は席から立ち上がると、クラスメートから掃除をサボらないように釘を刺される。

「……場所は？」

「音楽室」

「わかった。先に行く」

内心、面倒だと思いつつも掃除の場所を確認し、音楽室に向かい教室を出ようとすると、

「待て、待て。1人で行くな」

「そうそう」

普段は律に声をかけないクラスメート達が律に追いつき一緒に歩き始める。

(……何かあるな)

律はクラスメート達の様子に裏があると感じながらも何も言わずに

先を進んでいると、

「響君、今日、ことり達と一緒にだったよね？ どうしたの？」

「……白河は昨日、純一に紹介された。森川は元から知り合いだ。佐伯は朝に2人から紹介された」

「朝倉に？」

クラスメートの1人が目を輝かせながら律に質問をし、律は面倒そうに答えるが、それでも合点がいかないようでクラスメート達は首を傾げている。

「……昨日、朝倉兄妹がうちで飯食う事になったんだ。それに白河が付いて来た」

「それで、昨日の夜にことりと一緒に歩いてたんだ」

律は表情を変える事なく言つと昨日、ことりを送って行く姿を目撃していたよう女子生徒がニヤニヤと笑いながら言う。

「何？」

「……流石に白河1人で夜道を帰す訳にもいかないからな」

男子生徒からの嫉妬の視線に律はため息を吐きながらも間違った事はしていないと言つと、

「結構、噂になってるよ」

「……そんなんじゃないねえ」

「まあ。君じゃあね」

女子生徒達は律をからかうように言う。

「……こんな時間からなんだ？」

律がクラスメイト達からからかわれながらも音楽室に向かっていると音楽室の前には人だかりができています。

「学園祭の準備期間に入ったからバンドの練習組じゃないか？」

「そう言えば、ことり達がバンド組むんだよね」

「マジ！？ 絶対見に行こう」

「……あれ、邪魔だな……森川に佐伯？」

律は人だかりを覗くと知子と加奈子が練習を見ようとしている男子生徒達と揉めているのが目に映る。

「すみません。練習の邪魔になるから下がってください」

「うるせえ。邪魔するな」

知子と加奈子は野次馬を追い返そうとしているようだが、野次馬は2人の言う事を聞かずには加奈子を転ばせてしまう。

「おいおい。やりすぎだろ」

(…………あのバカ男)

野次馬のなかから加奈子を転ばせた男子生徒に非難が飛ぶが誰も加奈子に手を差し伸べる事はなく、

「えっ！？ 響君」

律はクラスメートをおいて人だかりをかき分けると加奈子を倒した男子生徒の襟首を掴み転がす。

「何すんだよ!?!」

男子生徒達はいきなり現れた律に文句を言うが、

「…………掃除だ」

律はその鋭すぎる目つきで男子生徒を睨みつけると、

「…………俺は掃除当番だからな。掃除しないと帰れないんだよ。邪魔するなら…………邪魔なゴミは捨てないとな」

律は加奈子を倒した男子生徒の胸倉を掴み言つと、

「お、俺がゴミだって!?!」

律に胸倉をつかまれた男子生徒は声を震わせる。

「森川と佐伯が話をしてるのに聞こえて無いみたいだからな。人の言葉がわからないんだから……………人じゃないよな」

律は徐々に腕に力を込めていき、

「……………意味わかるか？」

睨みつけながら言うと、男子生徒は涙目で頷いているが、

「……………悪かった。人の言葉はわからないんだよな」

律は男子生徒を許す気はない。

「響君止めて!?! 私は大丈夫だから、そこまでやる必要無いよ」

「……ああ。佐伯に感謝するんだな」

律の様子に加奈子は律を止めに入ると、律は力を込めていた腕の力をゆるめながらも、

「……いいか、世の中にはルールってもんがあるんだ。ここまで言えば俺の言いたい事の意味わかるよな?」

鋭い視線で睨みつけたまま、男子生徒に向かい言つと男子生徒は涙目のまま頷き、

「……お前らもだ」

その様子を見ていた野次馬を睨みつけて言つと律の視線に威圧されたのか野次馬達は解散しはじめる。

「……ったく。佐伯、ケガは無いか?」

「う、うん。大丈夫。ありがとう」

「「響君、カッコい」」

律は野次馬が解散していく様子を見て、ため息を吐きながら、加奈子に手を貸し、彼女は律の手をつかみ立ち上がると、その一部始終を見ていたクラスメート達は律を冷やかすように言い、

「……………茶化すな」

律はクラスメート達の様子に呆れたようなため息を吐く。

「響君」

「何だ？」

「助けて貰って言うのも何だけど、やりすぎ」

「……………それは悪かった」

知子は律を呼び、礼を言いながらも苦笑いを浮かべる。

「響くん、ありがとうございます」

「白河……………お前、大丈夫か？」

「何がですか？」

知子と加奈子と一緒にことりもいたようで、2人に遅れて律に礼を言うが、律はそんなことりの様子に何か感じるものがあったようで彼女に声をかけると、ことりは少し無理をしているような笑顔を見せる。

「……………無理するな」

「なんか昨日からバレバレっすねえ」

律は一言だけ言うと、ことりは苦笑いを浮かべ、

「……気のせいだろ」

律はことりの言葉を否定しつつも、

(……今の白河が昔の俺と重なるからか?)

野次馬に囲まれていたことりの姿が自分の過去に重なり、表情が少しだけ歪む。

「……どう言う事ですか？」

「……何がだ？」

ことりは律の様子を見てぽつりとつぶやくと、その言葉は律の耳に入り、聞き返す。

「あつ！？ なんでも無いです。気にしないで下さい」

「……わかった」

ことりは律の言葉に聞かれてはいけない事だったのか聞かなかった事にして欲しいと言い、律は彼女と深く付き合うつもりもないため頷くと、

「響、そこでいちゃついて無いで掃除」

「……わかってる」

クラスメートから、律とことりをからかうような野次が飛び、律は掃除を始める。

(……ずいぶんと音が外れているな)

律は掃除をしながら、耳に入ってくることり達の演奏を聞いてそんな事を思っていると、

「こんなもんだな。終わりにしよう」

「……ああ」

掃除が終わったようで、律が掃除用具をロッカーに片付けに行くと、

「響君」

クラスメートの女子生徒達が律に声をかけてくる。

「……何だ？」

「ことり達、全然、音合って無いよね？」

「……そうだな。あんな事の後だしな」

女子生徒達は律と同じように掃除中に聞こえていた3人の練習が上手く行っていないように感じたらしく、律に向かい言っていると律も同じ意見のため、表情を変える事なく頷く。

「意味ありげに言うな。お前が原因だろ」

「……俺が？ 何もしてないだろ」

律の言葉に男子生徒が原因が律にあると言つが律は意味がわからずに首を傾げる。

「あれは、怖かったしね。普通はびっくりするって」

「俺達としてはお前の意外な一面が見れて驚いたけどな」

「確かにね。優しかったし」

クラスメート達は律がことり達を助けた時の事を思い出すように言う、

「変わらない印象もあるけどな」

「確かに」

「見た目、人殺してそうだし」

「……それは悪かった」

律の目つきの悪さをからかい、律は不機嫌そうに返事をする。

「怒んなよ。それより」

「……何だ？」

これからは仲良くやるつって事」

「そう言う事」

「……ああ」

律がことりを助けた姿を見て、クラスメート達は律に持っていた印象が変わったようで笑顔で律に言うと、律は照れくさそうに頷く。

「こいつ照れてるぜ」

「可愛い」

「……うるせえよ。それより、終わったんだから帰るぞ」

律が照れている姿を見てクラスメート達は追い討ちをかけはじめ、からかわれなれていない律は逃げ出そうとするが、

「ねえ。ことり達はほっといていいの？」

「……俺にどうしろと」

女子生徒がことり達をほっとくのかと聞くと律はため息を吐く。

「そこは自分で考えなよ」

「……ったく、めんどくせえな」

律はめんどくさそうに頭を掻いた後、ことり達に向かい歩き出し、クラスメート達はそんな律の姿に苦笑いを浮かべる。

「……そんな状態でやるだけ無駄だぞ」

律はことり達に声をかけるが、

「響君、でも時間無いし」

「わかってるけど、色々ありすぎたしね」

3人は練習時間がないため、それでも練習しないといけないと言つと、律に何か言いたい事があるのか律をじつと見つめる。

「……俺のせいだよ」

「そんな事無いっすよ」

律はクラスメートから自分が原因だと言われていたため、ため息を吐くと、ことりは親指を「ビシッ」と立てて否定するが、

「響君は悪くないよ。私達を助けてくれたんだし」

加奈子はまだ律の顔を直視できないようであっつむきながら言つと、

「これだからねえ」

(確かにカツコ良かったですからね)

知子は加奈子の様子を見て苦笑いを浮かべ、ことりは先ほどの律の

姿を思い出したようでわすかに頬を赤く染める。

「……意味が分からない。何で、俺のせいにされなきゃいけないんだ？」

「それが君らしいよ。それで君は何しに着たの？」

「ともちゃん、その言い方は少し酷いんじゃない」

律は使い物にならなそうな加奈子を見てため息を吐くと、知子は苦笑いを浮かべたまま、律が声をかけてきた理由を聞く。

「別に……後ろが何かやって来いとうるせえからな。なんか、俺のせいらしいし」

律はそう言うとピアノの前に座り、

「……何より、『音』を楽しめて無いみたいだからな」

鍵盤に指を滑らせて行くとピアノは律の動きに合わせて綺麗な音色を奏で始める。

(あれ？ 響くん、凄く楽しそう)

ことりは律がピアノを演奏している姿に一瞬、目を奪われながらも律の奏でる音色に聴き入り始め、ことり以外の音楽室にいた生徒も彼女と同様に律のピアノに魅せられている。

「……これで少しは落ち着けたか？」

律は演奏を終えてピアノの前から立ち上がると、

「凄いじゃないっすか!？」

「ピアノなんか弾けたんだ!？ どこで覚えたのよ？」

「……どこでもいいだろ」

ことりと知子は律につかみかかるように聞き、周りの生徒からはアンコールを求める歓声があがるが、律はこれ以上、ピアノを弾くつもりはないようで不機嫌そうに短く答える。

(どうして？ 響君の心の声が聞こえない)

ことりは律の不機嫌そうな表情を見て、『律の心の声に耳を傾けるが律の心の声は聞こえない』。

「それで、どうしてピアノなの？」

「……月並みだけだな。音楽は音を楽しむって書くんだ。楽しめて無いみたいだから……これで、少しは毒気抜けただろ？」

知子は律がなぜ、ピアノを弾いたのかを聞くと律は一瞬だけ、優しいな笑みを浮かべて言う。

「それは確かに抜けたんですけど」

「だけどねえ」

ことりは律の笑顔を見て、慌てて律から視線を逸らし、知子はこと

りの姿に苦笑いを浮かべるが、

(ピアノまで弾けるんだあ。指も長くて細いなあ)

慌てることり以上に初めて律にあった時、最悪の印象を持っていた加奈子は律が奏でる音に心を奪われたようで顔を真っ赤にして呆けている。

「……さっきから佐伯はどうしたんだ？」

「そこは響君が自分で考えないとダメだよ」

知子はことりと加奈子の顔を見比べて苦笑いを浮かべるとクラスメイト達を彼女の意見に賛成のようで大きく頷く。

「そうなのか？ …… まあ、良くわからないから、後は俺には関係ないだろうし、帰るぞ」

「帰っちゃうんですか？」

律はことりと加奈子の事は自分には関係ないと言いたげに音楽室を出て行くこととするのを見てことりが律を呼び止めるが、

「……別に俺がいる必要はない」

律は自分には関係ないと言い切る。

「そうだけど。少し無いかなあ。せっかく、女の子が引き止めてるのに」

「無いな」

「言い切ったよ。ねえ、ことり、みつくん、響君に練習見て貰いたいよね？」

知子は律に練習を見て欲しいとことりと加奈子に同意を求め、

「うん。あれだけピアノ弾けるんだから私達の演奏にアドバイス貰えそうだし」

「そうですね」

ことりと加奈子は頷くが、

「…………断る」

律は不機嫌そうな表情で3人の願いを切り捨てる。

(さっきのは仕方なくだ。俺は人前では弾かないと決めだし、人の音に関わらないと決めただんだ)

(どういう事？ あれだけ弾けるのに)

律の不機嫌そうな表情に音楽室にいるメンバーは言葉を失い、

「…………もういいか？」

律の問いかけに誰も答えなないため、律は音楽室を出て行く。

「何だ！？ 良い奴かと思ったのに」

「勘違いだったのかな？」

律が音楽室から出て行ったのも見て、ポツポツと律の態度への不満が出てきた時、

「そんな事無いぞ」

杉並がいつの間にか混じっており、律をフォローする。

「どこから出て来るんですか？」

「秘密だ」

「響君が言ってた抜け道があるの？」

「……まあ、その話は置いて」

杉並の登場に場が少し柔らかくなり、

「それでどういう事だ？」

律のクラスメートの1人が杉並に向かい聞くと、

「誰にだって触れて欲しくないものはあるだろ？」

杉並は先ほどまでとは異なり、真剣な表情で言う。

「響君はそれが音楽？」

「そういう事だな」

「でも、あれだけ弾けるのに」

「あれだけ弾けるからだろう」

杉並の律へのフォローに沈黙が起きる。

「……それなら、本当は弾きたく無かったんですよね」

「私達のせいだよ」

「うん」

沈黙を破るようにことりがつぶやくと知子と加奈子も律に悪い事をしたとうつむいてしまう。

「……あの時に弾くと決めたのはあいつだ。お前達が気にする事じゃない」

「それでも……」

「あいつは無愛想だが、お人好しだ。そうやって変に気を使うと余計な心配をかけるぞ」

杉並は3人を励ますつもりなのか笑顔を見せる。

「……そうだね。でも、杉並君らしく無いんじゃない？」

「どつという意味だ？」

「お前が、響を心配してるから」

「俺だつて友人を気にかける位はするぞ」

「それが意外」

「むう」

杉並が困ったようになると杉並を中心に笑いが起きる。

(……何故、俺はあいつ等の前で弾く気になった?)

律は風紀委員でことり達の警備を出来ないかを音夢に聞くためにバイト先の花より団子に向かいながら考える。

(もう嫌なはずなのに自分の音が利用される事が……それなのに)

律には自分の行動がわからなかった。

答えは自分で言っていたのに

……音楽は音を楽しむと

彼女達の為にピアノを弾いていた時は、昔のしがらみを捨て彼女達に音楽を楽しませてやりたいと言つ気持ち律自身の意識していない所であつたから……

……昔、律の音を利用していた奴らとは違って

彼女達は本当に音楽が好きだったから

それが、音楽を捨ててくる事が出来ない律を動かしたのであろう。

(……ただの気の迷いだな)

律は考える事を止めて花より団子に急ぐ。

花より団子

(ん？ 何か様子がおかしいな)

律が花より団子に着くと接客をしている人間が音夢しか居らず、音夢は忙しそうに働いているが明らかに人手が不足している。

「どっしたんだ？」

「響君、それが……」

律は音夢にこの状況を聞くと他のバイトのメンバーが風邪をひいたらしく、今日は休むと連絡があったようで人手が足りていない。

「……手伝うか」

「いいの？」

律は流石にほっておくわけにも行かず、バイトに入ると言うが音夢は悪いと思っているようで聞き返す。

「このままにしてたら、お前がぶっ倒れる。そうだったら純一が心配するだろ」

「でも接客だよ」

「……そこまで、俺の接客は不安か？」

「……大丈夫。だよな？」

音夢はめったに接客にでない律を心配するように笑うと、

「……やれるだけはやるから、着替えて来るまで頑張れ」

「お願い」

律は店長に手伝う事を報告し、めったに着ない接客用の制服に着替える。

(……あまり着ないから、落ち着かないな)

「ゴメンね。今日の分、割増するから」

「俺より、1人で頑張ってた音夢にやって下さい」

「そっちもわかってるから。それじゃ、お願いね」

「はい」

律は急いで着替えると音夢を手伝う。

……

……

…

忙しい時間が過ぎたようで少し余裕が出て来る。

「助かったよ。1人だったら絶対に無理だったよ」

「……連絡よこせよ」

「そんな暇無かったし、それに……」

「……俺の接客はそこまで不安か？」

「それもあるけど」

音夢は律の接客をよほど心配していたようで苦笑いを浮かべると律はため息を吐く。

「それにね。最近、ずっとバイトだったから疲れてるんじゃないかな？ って」

「昨日休みだったし問題ない。それに俺は音夢みたく学園で猫被る必要ないから寝てればいい」

「そう言う事を言いますか？」

「……それより、俺は音夢に頼みたい事があつたんだ」

「何ですか？」

律は風紀委員でシフトを組んでことり達を含めたバンドの練習組が演奏に集中出来るように野次馬を排除してくれるように頼むと、

「そんなに酷かったの？」

「ああ」

「わかったよ。明日の打ち合わせに提案してみます」

「頼む」

音夢は律の願いに快く頷く。

「でも、響君。やっぱり優しいよね」

「……今週、掃除何だ。毎日、あれを蹴散らすのは面倒だ」

「そう言う事にしとくね」

「……ったく、めんどくせえ」

音夢は律が照れくさそうにしているのを見て笑うと、

「あれ！？ 響君。そんな格好でどうしたんですか？」

ことり、知子、加奈子の3人が律のバイト姿を見て声をかけてくる。

「……見てわからないか？」

「……コスプレ？」

「……バイトに決まってるだろ」

知子は律の姿をマジマジと見た後、なぜかコスプレだと言うと律はため息を吐く。

「今日は休みだったはずじゃ」

「他の子が風邪でね」

ことりは律と知子の様子に苦笑いを浮かべながら言つと音夢は律がバイトをしている経緯を話す。

「珍しいね」

「いつもは中だからな」

「レアな響くんだ」

「そうですね。私もバイト始めて2、3回しか見たこと無いし」

律の様子に4人は律をからかうように言つと、

「……うるせえよ」

律は不機嫌そうな表情をする。

「レアなら記念に」

「そうですね。私も」

しかし、音夢と知子は律をからかうだけでは飽きたらず、携帯電話を取り出すと律を写す。

「……何をする？」

「記念に」

「君のクラスの子に回そうかな？ って」

「……止めてくれ」

律がため息を吐きながら言うと、

「なら、今日は君の奢りで」

知子は頭にのるが、

「わかった」

律は先ほど3人に当たったのを悪いと思っていたようで素直に頷く。

「いいの？」

「本当ですか？」

「ああ」

ことりと加奈子は律に聞き返すと律は頷き、

「私は何して貰いましょう」

「……材料費、俺も出す」

「それで手を打ちます」

音夢まで調子にのるが律は素直に頷くと、

「俺は仕事に戻るからな」

これ以上、からかわれるのはごめんだと逃げるように仕事に戻る。

結局、律は閉店時間まで店を手伝い音夢と2人並んで家まで歩く。

「ホントに今日はありがとう」

「音夢に言われる事じゃないな。それにあのままにしてお前に調子崩されたら、俺の接客の日が増えるだろ」

「せっかく、お礼を言ってるのにどうしてそう言うかな」

「……そう言う風に来てるんだ」

音夢は律が手伝いに入ってくれたおかげで楽になったため、律にお礼を言うが律はぶっきらぼうに言う。

「誉められるの苦手ですよね」

「……つたく、お前もそうだが白河や森川といい、俺をからかって何が楽しいんだよ」

音夢はそんな律の姿に苦笑いを浮かべて言うと律はため息を吐く。

「2人はわからないけど私の場合はいつもからかわれてるからお返しです」

「……それは悪かった。それなら少し優しくするか？」

「また、そう言う風にからかう。それに響くんは別に優しくしない

といけない相手がいるんじゃないですか？」

「いないな」

音夢は照れているのか不機嫌そうに言う律とことりの間をからかうとするが律はきっぱりと否定する。

「そうなんですか？」

「ああ、それより、音夢の方は純一とどうなんだ？」

「な、何の事です？」

律は表情を変える事なく、音夢に聞き返すと彼女は慌ててとぼけるが、

「……………どうしてばれて無いと思うかが俺は不思議だ」

律は表情を変える事なく言い切る。

「うー、逆にどうして気づくんですか？」

「……………声が違う」

「声？」

律の言葉は音夢には意味がわからなかったようで首を傾げると、

「ああ、純一と話す時は少し楽しそうな声だ」

「……よくわかりません」

「まあ、気にするな。俺もよくわからんから」

律は少しだけ柔らかな笑みを浮かべ、

「何ですか？ それは？」

音夢は首を傾げたまま聞き返す。

「……さあな。だけどな。伝えたい事は早めに言っ
といた方がいいぞ」

「どうしてですか？」

「時間が解決してくれるとも言いが……逆にこじれる場合だってある。迷って時間を無駄にするかはお前次第だ」

「どうしてそんな事を言えるんですか？」

「……経験談」

「響くん？」

律は何かを思い出しているようで寂しげに笑い、音夢はあまり見た事のない律の表情に心配そうに彼の顔を覗き込む。

「……悪い。変な事を言った」

「それでも無いですよ……少し前に進めそうな気もしましたから」

「……そうか」

律は自分でもガラでもない事を言ったと自覚があるためか音夢に謝ると彼女は笑顔を見せるが、

「響くんはもういないんですか？ 思いを伝えたい相手は？」

急に真面目な表情をして律に聞き返す。

「……いないな。音夢に言っという言うのもあれだが……俺は向き合う事から逃げて時間を無駄にした人間だから……伝える人間なんかいないさ」

「……それでいいんですか？」

律は寂しげな表情をすると音夢は心配そうに声をかける。

「ああ……そうだな。もう1つ言うなら逃げても良いが」

「逃げてもいいんですか？」

「……逃げた事を後悔するな。逃げた事が卑怯だつて言う奴もいるが、それだつて自分が出した答えだ。そのおかげで手に入るものだつてある」

「響くんは手に入れたんですか？」

律は音夢の言葉に応えず、ただ穏やかな笑みを浮かべると、

「……手に入ったんですね」

音夢は安心したようで笑顔を見せる。

「そうだな。手に入ったと思う」

「強いですね」

「逃げた人間が強い訳ないだろ……まあ、自分で考えて後悔だけはするなよ」

「……頑張ってみます」

「……そうか」

律と音夢の会話はそこでしばらく途切れるが、

「興味本位で聞いていいですか？」

「ん!?!」

「響くんは何から逃げたんですか？」

音夢はまっすぐと律の瞳から視線を逸らす事なく聞く。

「……全てから」

「全てからですか？」

「……全てだ。もの、人、夢。そして……」

律は音夢の質問に無表情なまま言うが、最後の言葉だけは捨て切れていないようで言葉にならない。

「そしてなんですか？」

「……昔、一番大事にしてたものだ」

「それは聞かない方がいいですよね？」

音夢は律の様子にそれ以上聞くのをためらう。

「……出来ればそうしてくれ」

「……わかりました。でも、いつか教えて下さいね」

「……気が向いたらな」

「待ってますね」

音夢はあまり自分の事を語らない律が見せてくれたため、律に向かい微笑む。

「……好きにしな」

「好きにします」

「音夢、律」

話がちょうど切れた時、道の先から2人を呼ぶ声が聞こえ、

「ん。純一が迎えに来たみたいだな」

「ホントだ　兄さん」

「何で律がいるんだ？」

純一は2人に合流すると本来いるはずのない律がいる事に首を傾げる。

「休みが出て、手伝い」

「響くんが接客したんですよ」

「そりゃ、珍しいな」

「自分でもそう思う」

純一の疑問に律は苦笑いを浮かべると、

「俺も見たかったなあ。音夢も連絡くれれば良かったのに」

「写真ありますよ」

純一と音夢は律をからかおうとするが、

「見せろ」

「……音夢」

「何です?」

「誰かに見せたら……料理を教える時わかるよな?」

律は不機嫌そうな表情で音夢を脅し、

「……兄さん、今回は諦めて下さい」

音夢は律の脅しに屈服する。

響家

「本当に綺麗にしてるね」

「ともちゃん、そんなに見回したら失礼だよ」

音夢に料理を教える予定だったため、律はことりに連絡を入れていたのだが、なぜか、知子と加奈子が付いてきて律の家を興味深そうに覗いている。

「……………どういう事だ？」

「気にしたらダメっす」

律は2人がついてきた理由をことりに聞くと彼女は満面の笑顔で親指をビシッと立てて言い、純一と音夢は苦笑いを浮かべている。

「どうするんだ？」

「……………俺に聞くな。白河、お前は どうするつもりだったんだ？」

純一は今日の予定を律に聞くと律は知子と加奈子を連れてきたことに聞く。

「響くんが音夢に料理を教える間に他のおかずを作ろうと思ってたんですけど……………」

「食つもの無いと困るからな」

「そうだな……音夢、睨むな」

純一の言葉に律が同意すると音夢は律を睨みつける。

「睨んで無いですよ」

音夢は睨んでいないと笑顔で言うがその視線は逸れる事はない。

「私達は待つてるから気にせず始めてよ」

「わかったが……他の部屋を漁るなよ」

知子は自分達を気にせず始めてくれと言うと律は知子に釘を刺すと、

「漁らないって」

「……純一、佐伯、見張りを頼む」

知子は良い返事をするが、律はその返事を信じずに純一と加奈子の2人に知子の見張りを頼む。

「そこまで信じられない？」

「……信じる要素が見つからない」

知子は不満げな表情をするが律は考えを変える気はない。

「……かつたるい」

「……音夢。純一のように何か自由に作るか？」

純一はかつたるそうに言っていると律は音夢の毒物を純一に食べさせようとする。

「見張りでも何でもするから、それだけは勘弁してくれ!？」

「……どういう意味ですか？」

「そのままの意味だ……そろそろ始めるぞ」

純一は律の言葉に慌てると音夢は顔をひきつらせて律に聞くが律は表情を変える事なく、料理を始めると言いキッチンに向かい歩き出し、

「うん　音夢も行こう」

「わかりました」

ことりと音夢は律の後を追いかける。

「朝倉君」

「ん？」

律が居間からいなくなるのを確認すると純一を呼ぶと、

「君はこの家に何度か来てるの？」

純一に律の家の事を聞く。

「飯食いに来たりしてるけど」

「どこかの部屋にピアノって無い？」

知子は純一に律のピアノの事を聞く。

「ともちゃん、やめなよ」

加奈子は知子を止めようとする。

「いつも、居間にいるから見た事が無いな」

「興味無い？」

「かつたるいから無い。それにあいつが隠してるなら無理に聞きたく無い」

純一は興味なさそうに言う。

「失敗か。杉並君なら何か知ってるかな？」

「あいつも本当に誰かが傷つく事は言わないぞ」

知子は苦笑いを浮かべると純一は杉並は何も言わないと言う。

「流石ね。親友の事をわかってる」

「あれを親友とは言わない」

知子は杉並が純一の親友だと言うと純一はきっぱりと言い切り、純一の様子に知子と加奈子は苦笑いを浮かべる。

……

……

……

…

「それで、何を作るんですか？」

キッチンに移動することりは今日は何を作るか律に聞く。

「音夢から弁当が作れるようになりたいって事だな。メインでも弁当にも入るハンバーグでいいかなと」

「お弁当？」

「私も兄さんも料理出来ないから食費がバカにならなくて、それでお弁当作れるようになれば食費を抑えられると思って」

「で、定番だと思ってな」

律は音夢からの要望で弁当のおかずになるものから教えると言う。

「確かにそうですね。それなら私は何を作ろうかな？」

「俺は音夢に教えながら味噌汁は作るから……」

「なら、ポテトサラダでも作ろうかな？」

「それも教えて欲しいなあ」

律とことりはメニューを決め始めると音夢は他にも習いたいと言っ
が、

「まずは一つずつだ」

律は音夢の意見をあっさりと却下し、音夢は不満そうな表情をする。

「そうですね。それでは始めましょう」

「っと、その前に使わない調味料を片付けるか」

ことりは音夢の表情に苦笑いを浮かべながら始めようと言つと律は
先にやる事があると言つと

「どづしてですか？」

「……変に使われたら毒物になるからだ」

「どづいう意味ですか？」

「そのままの意味だ」

音夢は律を睨みつけるが律の表情が変わる事はなく、使用しない調味料を片付け始める。

「怒りますよ」

「……俺は店で状況を見てるんだが」

「うっ！？」

音夢の額には青筋が浮かぶが律は音夢の言葉を聞き入れるつもりはなく、律が絶対に音夢に料理をさせてはいけないと決めた日の事を言う。

「その時、何があつたんですか？」

ことりは律に話を聞こうとするが、音夢の視線は人でも殺せそうな目つきで背後には黒いものが漂い始め、

「……止めとくか？」

「そっすね」

律とことりは話を切ると使用しない調味料を片付ける。

「……夢か？」

「俺も初めて奇跡ってやつに遭遇したな」

音夢への料理指導が終わり、ことりと音夢が出来上がった料理をテーブルに並べるのを見て、純一がこんな事はありえないと言つと律は表情を変える事なく、奇跡が起きたと言つと、

「どういう意味ですか？」

音夢は当然、不服そうに2人を睨みつけるが、

「……待て、律。音夢の料理はいつも見た目は美味そうなんだ」

「食つまでわからないのか？」

「……ああ」

律と純一は音夢を無視して話を続けている。

「兄さん、響くん」

「流石に言い過ぎじゃないかな？」

音夢の額に青筋が浮かぶのを見て、加奈子が苦笑いを浮かべながら2人を止めると、

「……まあ。変な調味料も使わせなかったし、これで不味いものを作ったら」

「天才だな」

律と純一は止める気はない。

「嘘だろ！？ 美味しいぞ」

「メインに手をつけてから言え」

音夢いじりにも飽きて全員が食卓に座るが誰もハンバーグに手をつけないため、

「どうして、みんなして疑ってるんです？」

音夢は不機嫌な様子で聞くと、

「まだ、死にたく無いからだ。それに失敗したら音夢が責任を取る約束だからな。お前がまず食え」

「わかりました。私が最初に食べますよ」

律は音夢に最初に食うように言うと彼女は頬を尖らせながらハンバ―グを口に運ぶ。

「……逝ったか？」

「惜しい奴を亡くしたな」

「違います！！ 美味しくて感動してたんです」

何も言わずにハンバーグを噛んでいる音夢の様子に純一が言うと音夢は美味しくできたと言うが、

「目を覚ませ、幻覚だ」

「幻覚まで見せるのかよ」

律と純一が信じるはずもない。

「信じようよ」

「それなら、先に食べ」

「……次は先生が食べないと」

「冷めちゃうし、食べようよ」

「そうつすね」

知子は苦笑いを浮かべて言うと全員で試食する流れになり、全員がハンバーグに手を伸ばす。

「……夢か？」

「それはもう良いからさっさと食べ。お前と音夢は近いから良いが、3人はそうもいかないだから」

「そうだな」

音夢の作ったハンバーグは成功だったようで純一がつぶやくと律は夕飯を作るのに時間がかかったため、早く食えと言う。

「まだ、そんな時間でも無いでしょ」

「それでもだ」

「大丈夫ですよ」

知子は慌てる時間でもないと言うが、律が頷かないのを見て、ことは大丈夫だと言う。

「……何がだ？」

「響くんが送ってくれるから」

「ことり、何を言ってるの！？ そんなの悪いよ」

ことりは先日の律の行動から、律が家まで送ってくれると言うと加奈子は申し訳ないと言うが、

「送るのは構わない。もともと、佐伯と森川がこなければ、白河を送るつもりだったしな。けどな。今日は3人だろ。佐伯と森川も白河と同じ方向なのか？」

「違いますね」

律は送って行くのに知子と加奈子の家を確認することりは考えが甘かったためか苦笑いを浮かべる。

「それならさ。明日は休みだし、私とみっくんは今日、こどりの家に泊まるっよ」

「そっつすね。響君、電話借りますね」

「……ああ」

知子は良い案が浮かんだと言つとこどりは確認のために家に電話をかけ、

「大丈夫っすよ」

「という事で、もう暫く居ても大丈夫だね」

「ごめんなさい」

知子と加奈子がこどりの家に泊まる事に決まる。

「居るのは良いが何をやる気だ？ 家には何も無いぞ」

「いつもは何してるの？」

「バイト」

「無い日は？」

「飯食つて寝る。後は本読む位……」

律はため息を吐きながらこの家には何も無いと言つと知子は律から

ピアノの事を聞き出したいようで律に質問するが律がへたを打つわけがないが、

(……)

ことりは律の言葉に何かを感じたようで真剣な表情をする。

「学園でもよく本を読んてたよね」

「数少ない趣味だからな」

「友達居ないからな」

「兄さん!？」

知子は律の趣味を聞いて去年、1人で本を読んていた律を思い出して苦笑いを浮かべると純一は律に友人がいないと言つと音夢は慌てて声をあげるが、

「音夢、本当の事だし、青筋をたてるな」

「自分で言わなくても」

律自身が気にしていないため、加奈子は苦笑いを浮かべる。

「朝倉君と音夢はここでいつも何してるんですか？」

「テレビを見えます」

「他に無いからな。何かゲームでも買えば？」

「興味無いな」

ことりは律の様子に苦笑いを浮かべながら、純一と音夢はいつも律の家では何をしているか確認する。

「ゲームは買わないで下さいね。兄さんを甘やかす事になりますから」

「わかってる。買うと今まで以上に純一が入り浸りそうだからな」

「仲良いですね」

「ホントにねえ」

「ホントに朝倉君はよく来てるんだね」

純一はかなり律の家にきているようで知子と加奈子は苦笑いを浮かべると、

「律がバイト無い日はだいたい来てるな」

「そんなに来てたんですか!？」

純一は自分がどれだけ律の家に入り浸っているかを言うと音夢が驚きの声をあげるなか、

「他にも気がついたら杉並と一緒にお茶を飲んでた事もあったな」

「それって不法侵入じゃ!？」

律の口からは衝撃的な一言が発せられ、こどりは驚きの声をあげる。

「杉並がいたし仕方ないだろ。あいつは何故かよく家に泊まってい
く」

「何で？」

「……俺にあいつの考えてる事がわかると思うか？」

律はすでに杉並の行動を諦めているようで気にしていないと言つと
全員は苦笑いを浮かべる。

「合い鍵とか作ってそうだよな」

「……あいつは針金で大抵の鍵を開けるぞ」

「2秒あれば十分だな」

純一は杉並の行動にため息を吐いていると噂のご本人が登場し、律
以外は呆然とする。

「……相変わらず、どこから湧いてくる」

「仕方ないだろ。こっちは色々忙しいんだ」

「……で、何の用だ？」

「身を隠す場所が欲しくてな」

「今度は何だ？」

「国家機密級の秘密だ!!!」

「また、ろくでもない事だろ」

律と杉並の会話は当たり前のように進んで行くと、

「それより、同志達よ。そろそろ、時間が不味いんじゃないか？」

「そうだな。白河の家までで良いんだよな？」

「はい。お願いします」

杉並はそろそろ帰宅した方が良いと言う。

「音夢、俺達も帰るぞ」

「後片付けはどうするんですか？」

「……杉並にやらせるから良い」

「仕方ないか」

音夢は後片付けを律1人にやらせるのは不味いと言うと律は杉並にやらせると言い、空気が凍りつくが、

「ほら、行くぞ。杉並」

「戸締まりだろ。任せておけ」

律と杉並が気にする事はない。

「杉並君に留守番任せて大丈夫？」

「……ああ。大丈夫だ」

律が3人と歩いていると知子は杉並を残してきた事が心配なように律に聞くと律は何も心配していないように頷くとことりと加奈子は苦笑いを浮かべる。

「それより、今回みたいな事は止めてくれ」

「ごめんなさい」

「ごとういうのも楽しいでしょ　それに朝倉君と杉並君はよく行ってるんだから、私達が行っても問題ないでしょ」

律は今日の知子と加奈子の行動は困ると言うと加奈子は謝るが知子は笑う。

「……男がくるのとお前たちがくるのは違うだろ」

律は知子の言葉にため息を吐くと3人はその言葉を聞いて笑うと、

「……俺はおかしな事を言ったか？」

律は意味がわからずに聞き返す。

「そうじゃないですよ　響くんはホントに見た目と中身が違うな

あつて思つたんですよ」

「見た目は極悪人なのにね」

「ともちゃん、言いすぎだよ!？」

「佐伯、森川は前からこんな感じだから気にするな」

こつりと知子は苦笑いを浮かべながら律が見た目と違つと言つと加奈子は慌てるが律本人は気にしていない。

「でも、たまに優しい目をするから人をひきつけるんですよ」

「その極悪な目つきを治せばもつと友達増えるのにね」

「……うるせえ」

こつりと知子は律が優しい人だとわかつてるとフォローすると律はなれていないせいか不機嫌そうに言う。

「大丈夫ですよ　　見てる人はちゃんと見てますから」

「この間からクラスメートとも上手くやってるみたいだしね」

「色々と噂を聞いてるっすよ」

「朝倉さんの話だとバイト先でも頼りにされてるみたいだしね」

3人は律の反応が面白いようでクスクスと笑いながら、律をからかうように言つと

「……………お前たちは俺をからかって何が楽しい」

律は不機嫌そうに言う。

「そんなんじゃないけど、せつかく友達になっただから楽しくいきたいでしょ？」

「……………俺は楽しくない」

「充分楽しそうですよ。音夢と朝倉くんが言っていましたよ。『最近表情が柔らかくなった』って」

「それは私も思ったよ。初めて会った時よりずっと話しやすい」

「私は去年の君を知ってるから一番実感してるけどね」

知子は律が変わってきていると言うと、

「そんなに話しづらかったの？」

「……………杉並と白河だけだな。いきなり、普通に話しかけてきたのは」

ことりは律に話しかけづらいと感じなかったよつで言うが、律は「とりは特殊だと言う。」

「それだと私に変な人みたいじゃないですか」

「……………違うのか？」

「酷いですねえ」

ことりは律の言葉に不満そうな表情をすると知子と加奈子は苦笑いを浮かべる。

(……本当に俺は変わってきてるのか？ 純一、音夢、杉並……そして、こいつらに出会って)

(響くん、何か考えてますね)

律は3人が話をしながら歩いているなか、3人から1歩後ろに下がって、『自分が変わった』と言う言葉の意味を考えるとことりは律の心の声を聞き、何かを思ったのか真面目な表情をする。

(……今なら何かわかるかな？ とうさんとかあさんが変わってしまった訳も……違う。わかってたまるか、あんな奴らの事を)

(ご両親をあんな奴らって、響くんに何があったんだらう?)

(……考え……な。俺は……たんだ。あ……2人を……そして……を)

律の心の声を耳を傾けていたことりの耳に律の言葉はところどころ聞こえなくなり始め、

(どうして？ 響くんの心の声は時々聞こえなくなるんだらう?)

律の心の声が聞こえなくなるのは初めてじゃないようで、ことりは怪訝そうな顔をする。

「……白河。どうした?」

「何がです?」

「こつちを睨んでるからな」

「そんな顔してました?」

律はことりの表情に気づいて彼女に聞くがことりは苦笑いを浮かべて何も無いと言う。

「……惚れた?」

「……下らない事を言うな)……俺のように何も無い。人間にひかれる人間はいない)」

知子はことりをからかうように言うが、律はくだらないとため息を吐く。

「……なんで?」

ことりは律の心の声につぶやくと、

「じつり、どつしたの?」

「えっ!?!? ゴメン。何でも無いよ」

加奈子は心配そうにことりの顔を覗き込み、ことりは慌てて否定する。

「変なことり」

「白河が変なのはいつもの事だろ」

「それは、ちょっと酷いっすよ」

知子は苦笑いを浮かべながら言つと律は頷き、ことりが不満そうに言うが

「そうか？」

「そうでもないね」

「そうだね」

「3人とも酷いっすねえ」

3人はことりの怒りを軽く無視するとことりの家まで3人を送り届ける。

律は3人を送った後、桜公園に足を運ぶと、

(……相変わらず、綺麗だな)

桜並木を見上げながら思う。

(ここは不思議なところだな。1年中咲き続ける桜。この桜は凄く優しい感じがする。いつも誰かが見守ってくれてるようだな……純一や音夢、白河。あいつらが良い奴らなのはこの島の影響もあるのかな?)

最近、律は頭の片隅で思っている事がある。

(……俺はいつまでここに居て良いのかな?)

初音島は枯れない桜の影響か観光地としても有名な島であり、多くの人がこの島を訪れ、

そして……

去って行く。

来訪者はそれぞれに悩みなどを抱えて……

現在の生活に疲れ、癒やしを求めた者。

傷つき生きる術を忘れた者。

全ての事から逃げ出した者。

理由は人で様々あるのだろう。

(……多分、俺もその1人なんだ)

だから、大切にしたいと想うのだろうか？

……あいつらとの繋がり。

音楽を捨てた今、自分には何も無いから

(ここに初めて来た時には考えられなかった事だな)

律は自分の考えている事が可笑しくて自然に笑みがこぼれる。

(……でも、悪く無いか?)

全てを捨て去った後の律は荒れていた。

何かある度に左手の傷が疼いた。

リハビリの時も少しでも何かが出来なくなると、自分で傷つけた傷が痛んだ。

(……別に、ナイフを突き立てる事も無かったのにな)

律は左手の傷を見つめる。

(それでも……これが俺か?)

あの日、捨てたもの、

そして……

この場所で手に入れたもの。

かたちは違えど2つの大切なもの。

(また、この手に掴む事も出来るのかな?)

あの日の夢を

そして……

『想い』を

（最近はピアノに向かう時間も増えてきたしな）

律自身、理解している。ここで生活する事で捨てたと言っている音楽に触れる時間が増えている事を趣味と言って自分を誤魔化しているが、

仲間と触れている時間が増える度に律の中で『新しい音』が生まれている事を。

（それでも俺はまだ、あの場所に戻る勇氣は無い……か？）

律の昔の関係者は律の腕がリハビリを終えて、あの頃と同じく演奏出来る事を知っている。

そして……

いまだに復活を望む声も多い。

関係者の中では律が音楽界から去った理由を知らない者も多くいるが、普通なら逃げ出した人間を追う事など無い筈なのに律を連れ戻そうと言う声は高い。

天才、神童と言われた律の演奏を望む声は多い。

(……………だけど)

律を話題の神童と言って見せ物にする者も多くいた。

(それが耐えられ無かったんだよな)

中には本当に律の演奏が好きで目にかけてくれた人も大勢いたが、

(……俺は、音楽を捨てた時にあの人達を裏切ったんだ)

だからこそ……

(……戻れる訳が無い)

「ズキッ」

その時、左手の古傷が痛む。

(……ちっ、またかよ)

この傷は随分前に完治しているがそれなのに痛む。

理由はわからない。医者には精神的なストレスが原因だろうと言われている。

(……わかってるよ。音夢には逃げても良いとは言ったけど、逃げて続ける人間が言うべきでは無いって事だろ。逃げても良い奴は1度でも前に進んだ事がある人間だって事も……あの言葉は俺に言う資格が無かったって事も……)

この痛みは律への戒め、自分自身と向き合ったための……

……

……

……

……

響家

律は左手の痛みを押さえながら家に着き、鍵を開けようとするが鍵が開いている。

「杉並。まだ居るのか？」

「帰ってきたか。MY同志響よ」

律は杉並の名を呼びながら居間に戻ると予想通り、杉並はソファーに腰掛けている。

「……お前はいつまで居るつもりだ？」

「つれない事を言うなよ」

「……人の質問に答えろ」

「……大勢居たのに帰ってきた後に1人だと寂しいと思ったんでな。お前が帰ってくるまでは居ようと思ったただけだが……いらん、気遣いだったか？」

律は杉並に早く帰れと言うが、杉並は彼なりに律を心配していたのかクスリと笑う。

「……」

「そんなに見つめるな。照れるでは無いか」

律は杉並の言葉の真意を探ろうとするが杉並は誤魔化すように笑う。

「……ったく、何が目的だよ」

「別に、今、言った事が本心だが……お前はどこか脆いからな。時々、心配になる」

「……お人好しが」

律がため息混じりで杉並に聞くと杉並は本心だと言い、律は照れているのか不機嫌そうな表情をすると、

「友人を心配して何が悪い」

杉並は真面目な表情をして言い、

「……ガラにも無い事を言うな」

律はため息を吐く。

「それは悪かった。さてと、目的も達したしそろそろ帰るかな」

「……待て。ピアノを弾きたくなかったから、時間があるなら、聴いてけ」

帰ろうとする杉並を律は呼び止める。

「珍しいな。人前じゃ弾きたく無いんだろ？」

「……何となくだ。それにお前は俺が弾かない理由を知ってるだろ

「？」

律の言葉に杉並は何も言わずに頷くと、

「少なくともお前はあんな奴らとは違うからな」

「わかった。遠慮無く聴かせて貰おう」

律は口には出さなかったが、杉並の心遣いが嬉しく、そのお礼の意味を込めて、友人のためだけに律の音を奏でる。

「相変わらず、素晴らしい演奏だ」

「……そうか」

「響よ。これもいらん心配かもしれんが朝倉達にも……」

「……わかってる。そのうち話す」

律は杉並の言葉を遮って、自分に言い聞かせるように言うと杉並は満足げに笑い。

「それが良い。それでは俺は失礼する」

律の言葉を聞く事なく、響家を出て行く。

文化祭になり律のクラスは喫茶店をやっており、割と忙しいようで律は忙しく働いていると、

「いらっしやいませ……なんだ、白河か」

「なんだって、態度の悪い店員さんですね」

ことりが教室を訪れ、律の言葉に不満そうな表情をする。

『ことり。いらっしやい。響君、突っ立ってないで接客』

「わかってる……こちらがメニューになります」

クラスメートの1人が愛想良く笑いながら律に指示を出すと律はことりを席まで案内し、ことりにメニューを渡す。

「ありがとうございます ……それより、響くん」

「何だ？」

「似合ってはいますけど、そのメガネは何ですか？」

ことりはマジマジと律の顔を見た後、律がメガネをかけているため、首を傾げると、

「知るか。あいつ等がかけるって言うから」

『響君の目つきじゃ、接客出来ないでしょ』

律は不機嫌そうに言うがクラスメート達は律が目つきが悪いせいだと言っ。

「……俺が接客に出る必要ないだろ」

『経験者には中心になって貰わないとな』

「……俺は調理場担当だ」

『朝倉さんから滅多に接客に出ないけど普通に……むしろ完璧になすって聞いているしね』

クラスメート達は経験者の律に中心になれと言うが律は人前に出たくないと言うが、クラスメート達は律が接客を完璧にこなすことを音夢から聞いているようで律の意見を却下する。

（……音夢、覚えてるよ）

（音夢に何も起きなければいいっすね）

律は音夢の名前が出てきたため、音夢に恨み言を1つでも言おうと考えていることりは苦笑いを浮かべる。

『で、律に接客をして貰うのに考えた結果だ』

「でも、よくかける気になりましたね？」

クラスメート達はメガネは律を接客させる苦肉の策だと言うとこと

りは苦笑いを浮かべながら聞き、

『最初は嫌がってたけど……子供に泣かれちゃってね』

「……………うるせえ」

クラスメート達は笑いをこらえながら律が子供に泣かれたと言い、律は不機嫌そうに言い、

「そう言う事ですか」

ことりは律の様子を見てクスクスと笑う。

『でね。このメガネをかけてからの集客率が良いのよね』

『律の目つきの悪さを和らげるからな』

「もとは良いですからね」

『そうなの。ことり、聞いてよ さつきから響君、デートに誘われてるのよ』

「それは良かったですね」

律のメガネは好評らしく、律に声をかけてくる女子生徒まで現れており、ことりはにっこりと笑いながら律に言うが、

(……………何か、白河に睨まれてる気がする)

律はことりの様子に首を傾げる。

「……別にどうでも良いだろ。それより、1人みたいだが、佐伯と森川はどうした？」

「残念ながら、みつくんももちやんとも時間があわなかったんですよ」

律はことりが1人できた理由を聞くとことりは苦笑いを浮かべる。

「……誰か誘えば良かっただろ。お前なら誰でもついてくるだろ」

「なら、響くん。一緒にませんか？」

「……断る。お前と一緒にはめんどくせえ」

「口に出して言いますか？」

律はことりに適当な人間を誘えと言い、ことりは律を誘うが律は直ぐに断り、ことりは不機嫌そうに頬を膨らませるが、

「俺はそこら辺の男と違って、お前に尻尾振ったり、気を使ったりする必要がないからな」

律はことりに付き合うとは絶対に言う事はなく、

(……何か、女の子扱いされてない気がする)

ことりは残念そうな表情をする。

『これで良いなら、持ってって良いよ』

「わかりました」

ことりが残念そうにするのを見て、クラスメートの1人が律を連れて行けと言つとことりは笑顔を見せるが、

「……俺の意思は無視か？」

『はい。響君、休憩入ります。ことり、飽きたら返してね』

律は納得していないのに話しを決められて行く。

「了解つす」

「……おい」

「それでは、借りてきますね」

「……引つ張るな。それより何か頼めよ。うちは喫茶店だぞ」

『いいから行く』

ことりは律の手を引つ張つて教室を出て行くと、

『やっぱり、響君って鈍いよね？』

『まったくだ。それより、律って、あの目つきを治せば工藤と同じ位の人気が出るんじゃないか？』

『あれで、優しいし、素直だしね』

『それより、あの2人どうなると思う?』

『まあ、白河には間違いなく尻に敷かれるだろうな』

『『『確かに』』』

クラスメートは律とことりの話で盛り上がる。

「……ったく、めんどくせえ」

「まあまあ、そんな事を言わないで下さいよ」

ことりに教室から連れ出された律は不機嫌そうな表情で言うこと
りは苦笑いを浮かべる。

「それで、どこに行く気だ？」

「普通は男の子がエスコートしてくれませんか？」

「……無理やり引っ張ってきて言う言葉がそれか？」

「わかりましたよ。私が決めますよ」

ことりはどこを見るかなどを考えてくれない律にため息を吐いた後、
律を引きずって歩き出す。

「体育館で何かあるんですかね？」

「………知るか」

2人が文化祭を見て回っていると体育館前に多くの人だかりができて
いる。

「覗いて見ます？」

「……わざわざ、人混みに入りたくねえよ。それより、そろそろ戻るぞ」

「私が飽きるまで借りてて良いって話ですから、まだ帰りませんよ」

「……ちっ」

「MY同志響、白河嬢。参加か？」

律は十分に付き合ったと言っがことりは律を帰すつもりはなく、律は不機嫌そうな表情で舌打ちをした時、背後から杉並の声が聞こえる。

「……杉並。何をやってるんだ？」

「ちょっとしたイベントだ」

「どんなイベントですか？」

「『ベストカップル』を決めるイベントだ」

「……他に行くぞ」

杉並はこのイベントに関わっているようで2人にイベント内容を話すと律は他に行くと言っが、

「面白そうですからやってみましょう」

「……ふざけるなよ」

「良いじゃないですか ほら、メガネかけて下さい」

「……またこれかよ」

「行きますよ」

「お2人様、ごあんない」

ことりは何かを思ったのか参加すると言つと律にメガネをかけさせ、杉並の2人の姿を見てニヤニヤと笑う。

『な、なんと、飛び入りで大変な方が参加して頂ける事になりました……白河ことりさんと響律君です』

「どうもです」

「……」

司会者が2人の名前を呼ぶとことりは彼女にしては珍しく愛想を振りまくように舞台の上から手を振るが、律はことりの隣で不機嫌そうにしている。

『まずは、この会場にいる多くの野郎どもが気になっている事だと思いますが……』

司会者は大きく一呼吸した後、

『お2人のご関係は?』

ことりにマイクを向け、

「恋人です」

『白河さんはこう言ってますが？』

ことりは冗談を言うと会場全体から律にブーイングが向けられ、司会者もことりのファンなのか律に嫉妬の視線を向けて律にマイクを向ける。

「……………違う」

「『ベストカップルコンテスト』なんですから、嘘でも恋人って言うべきですよ？ 司会さん」

『そ、そうかもしれないですね……………それで、恋人ではないと言う事はご友人で合ってますね？』

「……………ああ」

「残念ながら」

律はこの場にいたくないため早めに切り上げたいのだが、ことりは律の様子を見てくすくすと笑いながら冗談を続ける。

『こ、これは問題発言です！？ 白河さんの一方的な恋心なのでしょうか？ それなのに響君のこの態度は何なんでしょう？ 響君は白河さんの事をあなたはどう思ってますか？』

「人をこう言うめんどくせえ事に巻き込む迷惑な女」

司会者は再び、律にマイクを向けると、律の一言に会場全体が静まり返る。

『そ、そうですか。逆に白河さんに質問です　貴女にとって響君とはどんな人ですか?』

「口と目つきは極端に悪いけど優しい人っすね」

司会者は律からはあまり面白い事は聞けないと思ったようでことりに質問をすると彼女は少し考えて律の印象を話す。

『確かに口は悪いですね。でも、目つきって?』

「それはですね　ほら、目つき悪いでしょ」

ことりは律の顔からメガネを外すと司会者に言う。

『た、確かに人の1人や2人殺してそんな目つきですね』

「でも、たまに凄く優しい目をするんですよ。『……ったく、しょうがねえな』みたいな事を言って、助けてくれたりするんです」

『目つきに似合わず、お人好しって事ですね?』

「そっす」

「……うるせえ」

ことりと司会者は律をからかうように話していると律はイライラし

ているように見えるが、

『確かに良い人みたいですね』

「ですよね」

司会者と観客からは律が照れているようにしか見えない。

「……」

「ちよつと、響くん。帰ったらダメですよ。まだ、終わってないんですから」

律はこの場の空気に逃げ出そうとするがことりは律の腕をつかむ。

『響君の機嫌と目つきが悪くなってきたので、最後に白河さん何か一言お願いします』

「それじゃあ。明日、友達とバンドやりますから見にきて下さいっす」

『響君、白河さんありがとうございました』

司会者が2人に向かい礼を言うと律は足早に舞台から降りて行き、ことりは慌てて律の後を追いかけて舞台から降りる。

「なかなかの反応だな」

「そうですね。杉並くんが言った通り、響くんが照れる姿も見れませんでした」

「貴重なものがみれただろう」

「写真は撮れてます?」

「当然だ」

舞台から降りると杉並が2人を待ち構えており、ことりと話し始め、

「……お前ら、俺をはめたな」

「何を言ってるんだ。お前のクラスメートにも手をまわしてある」

「……あいつら」

律はその時、杉並にはめられていた事を知り、不機嫌そうな表情をする。

「こうでもしないとお前は、学園祭を見て回ろうとしないからな」

「せつかくのお祭り何ですから、楽しまないとダメっすよ」

しかし、律をはめた2人は律が不満そうにしているのを見て笑う。

「……」

「お前は少しこういう事を経験した方が良いだろ。何事も経験だろ。何かの足しになるぞ」

「……ちっ」

不満そうな律に杉並は耳打ちをすると律は舌打ちをして一人で歩き出そうとするが、

「それじゃあ、響くん。次に行きますよ」

ことりは律をまだ帰すつもりはないようで律の手をつかむ。

「俺はいつまで、お前に引っ張り回されるんだ？」

「私が飽きるまでです」

「……杉並」

律は今回の原因であろう杉並を睨みつけるが、

「悪いな。ここから先は、俺には関係ない。お前のクラスメイトと白河嬢が決めた事だ」

杉並はニヤニヤと笑いながら、自分は関係ないと言い、

「……ふざけるな」

「いいから行きますよ」

律は杉並に文句の1つでも言おうとするが、ことりに引きずられて行き、

「2人ともベストカップルの発表は明日の午後一だから遅れるなよ」

「了解つす」

杉並はニヤニヤと2人の背中を見送る。

「……なんの騒ぎだ？」

「何かあつたんですかね？」

ことりに引きずり回されながら学園祭を見ていると音楽室の前で騒ぎ声が聞こえる。

「……知るか」

「覗いて見ましょう」

「……どうして、首を突っ込もうとするんだ？」

「気にしたらダメつすよ」

ことりが音楽室のドアを開けると本校生と付属生が揉めている姿が見える。

「何があつたんですか？」

ことりは野次馬の1人に話しかけると本校生がバンドの練習時間が終わっているのに場所を譲らないと言う事らしく、

「……くだらねえ」

「そうかも知れないっすね」

律はあまりにくだらない内容にため息を吐き、ことりは苦笑いを浮かべる。

「……他に行くぞ」

「それで……」

律は勝手にやってくれと言いたげに音楽室を出て行くとした時、

『うるせえよ。だいたい、お前らみたいなへたくそが練習したって意味が無いだろ！！ その無駄を俺達が練習する事で有意義に使ってやるうって言うんだ。才能が無い奴がやるより才能がある俺達がやった方が良く決まってるだろ！！』

(……)

本校生の言葉に律は立ち止まる。

(ひょっとして、響くん、怒ってる?)

ことりは律の様子に何か違和感を感じていると、

「……どけ」

「ち、ちよっと、待って下さい!？」

律は振り返り、何を思ったのか揉めている場所に歩き出し、ことりは慌てて律の後を追いかける。

「……先輩、音楽の才能があるって本当ですか？」

律は騒ぎの中心に着くと本校生に向かい言つと本校生は自分達が初音島のラジオ局で行われている音楽番組に出場が決まったと言つ自慢話を始め出す。

(……くだらないな)

(……絶対に怒ってる)

本校生の自慢話のくだらなさに律の眉間のシワがより始める。

「……俺も少し音楽をかじってるんですが、才能のある先輩方に少し教えて頂けたらなと」

律は不機嫌そうだが、本校生に向けて言つと本校生は律に誉められたのが嬉しかったらしく、律に『何か弾いてみる』と言い、

(……響くんのピアノが聴ける?)

ことりがもう一度、律のピアノが聴けると思った時、

「……白河。お前らがやるって言つてた曲を弾くから、歌え。悪い

ようにはしないから、ギターを貸してくれ」

「えっ!?!」

『あ、ああ』

律はことりに歌えと言い付属生の1人からギターを借りると演奏を始める。

(うそ!?! 凄く上手い。ピアノだけじゃないの?)

律の演奏は素晴らしく、ことりの歌の魅力を引き出していきおり、2人の演奏に揉めていた生徒、野次馬は黙り込む。

.....

.....

.....

...

「.....どうですか？ 俺の音は？」

律は演奏を終えると本校生に向かい言うが本校生からの答えはなく、

「.....さっき、才能の無い奴は練習する意味が無いような事を言うてましたけど、俺に才能はありますか？」

明らかな格の違いを見せつけられた本校生は何も言えずに黙り込ん

でいる。

「……1つだけ教えてやる。音楽に才能なんて必要無いんだ。自分がどれだけ『自分の音と向き合ったか、他人の奏でる音をどれだけ感じとれるか』だ。才能の有る無しじゃない……」

律は本校生に向かい言うが、途中で律の顔が歪み言葉が止まる。

(……ちっ。またかよ)

(また?)

(……治まれ)

律の左手はまた痛みだし律はその痛みを抑えつけるように左手を押さえる。

「……響くん？」

「……何でも無い」

ことりは律の様子に慌てて、律に駆け寄ろうとするが、律はことを制止し、本校生を睨みつけ、

「……他人の音を聴こうともしない人間に……音楽をやる資格は無いと思う」

「ちよつと、響くん。大丈夫ですか？ 顔色が……」

律の顔には脂汗が浮かび、必死に痛みを抑えているのがわかるが律

は真っ直ぐと本校生を睨みつけたまま言い、ことりは心配そうに話しかけるが、

「……俺の話は終わりです……後は好きにして下さい。ギター貸してくれて助かった」

律は付属生にギターを返して音楽室を出て行き、

「待って下さい!」

ことりは尋常ではない律の姿に律を追いかける。

(……ちっ、治まらねえ)

「待って下さいよ。響くん、何があつたんですか？」

律は音楽室を出ると左手を押さえながら1人で歩いて行くところりは律に追いついて心配そうに声をかけるが、

「……何もない」

「響くん」

「……うるせえ」

律は治まらない痛みに苛立っており、ことりの相手をする余裕はない。

「……でも」

「お前には関係ない!!」

「関係あります。響君はお友達です。話して下さい。私にだって何か手伝えるし……」

「……そんなもんは無い」

ことりは律の額に浮かぶ脂汗に律を心配して言うが、律はことりには関係ないと言うと1人で歩いて行き、

「…………響くん」

ことりには律の後ろ姿を見送る事しか出来なかった。

(…………治まらねえ)

律は左手の痛みが治まるのを一人で屋上で待っていると、

「こんな所で何してるんだ？」

「純一か…………何でも無い」

サボりにきたのか純一が律の姿を見つけて声をかけるが律の対応は悪い。

「何でも無いって顔じゃないけど……………何があった？」

「…………別に」

「律」

何も言おうとしない律を見て、純一は呆れたような表情をした後、律の名を呼び、

「何でも……………」

「騒ぐなよ。かったるいから、それやるから、少し静かにしてる」

律は苛立ちを隠せずに純一を怒鳴りつけようとするが、純一は律の

言葉を遮り、律の口の中に饅頭を押し込む。

「……すまない」

「気にするな。どうせ、杉並に何かされて頭にきてるとかだろ？」

「……それもあつたな」

「あいつは少し静かに出来ないのかねえ？」

「無理だろ」

「確かにな」

純一は律に何も聞く事なく、2人で何もしないで空を眺めていると律の左手の痛みが和らいでいく。

(……だいぶ良くなってきたな)

「俺はもう行くけど、律はどうする？」

純一は律の表情がいつものように戻ったのを見て言うと、

「……俺は残る」

「そうか。またな」

律はもう少しだけ、屋上に残ると言うと純一は欠伸をしながら屋上を後にしようとし、

「ああ。気をつけるよ」

「何をだよ？」

「杉並とか、音夢とか、風紀委員とか……後は杉並とか」

「そうだな。杉並には気をつける」

律は落ち着いてきた事もあるのか、純一に杉並に気をつけると言い、純一は苦笑いを浮かべると、校内放送を知らせるチャイムが響いた後、

「わっはっはっは。良く聞け！！ 放送室は我々、非公式新聞部が占拠した。返して欲しくは同志朝倉と同志響が持っている……を手に入れる事だ」

「……巻き込まれたな」

「しつかりとな。あいつはわざと放送切っただろうから何を言っても風紀は信用しないだろうしな」

校内放送からは杉並の高笑いが響き、律と純一は巻き込まれる。

「何か受け取ったか？」

「心当たりはない……そっちは？」

「俺もないな」

律と純一は2人のため息を吐きながらもお互いに杉並から預かって

いるものを確認していると、再度、校内放送がかかり、

「因みに同志響は、あの学園のアイドル『白河ことり』とベストカップルコンテストに出場した男だ」

あまり、知られていない律を杉並が大々的に発表する。

「……………」

「律。お前、狙われるぞ」

「どういう事だ？」

「知ってると思うが、ことりは男どもに人気が高い。そのことりとお前はベストカップルコンテストに出たって事は過激派のことりファンに殺られる」

純一は律がことりと『ベストカップルコンテスト』に出た事で集中的に狙われると言つと、

「……………恐ろしい事を言うな……………杉並、殺す」

律は純一の言葉にため息を吐いた後、ぼそりと言だけ言い、屋上を後にする。

「……………かつたるい」

純一は律の様子と自分がこれから、風紀委員に追われる事を考えてため息を吐く。

(……杉並はどこだ?)

律は屋上を出た後、杉並を探して歩いており、その途中で、ことりのファンや風紀委員と出くわすが、逃走、撃退を繰り返し、律を捕縛に至った生徒はいない。

(抜け道を探索するにしても……1人じゃキツいが襲撃が無い分マシか?)

律は以前話していた非公式新聞部の抜け道を探索しようと考えて始めた時、

「見つけました。響君、杉並君から預かったものを渡して下さい」

男子風紀委員2名を引き連れた音夢が律に駆け寄ってくる。

「……音夢か。悪いが俺も純一も何も受け取って無い」

『嘘を吐くな!』

「……あいつに付く理由は無い」

風紀委員の1人が律につかみかかるが律はその手を軽く払いながら言う。

「本当ですか?」

『いたぞ。あいつが響だ』

『ことりちゃんと仲が良いだけでも万死にあたいする』

音夢は律が本心から言っているか確かめようとした時、殺気立ったことりのファンに見つかり、律に向かい男子生徒が向かってくる。

「……またかよ。おい、そっちの2人、手伝え」

律はため息を吐き、音夢を後ろに下げると向かってくることりファンを蹴散らし、

「さてと、杉並を……」

「逃がしませんよ」

杉並を探しに行こうとするが、音夢ががちりと律の腕を捕む。

「……何だ？」

「響君は、今、私達の前でケンカをしといてただですむと思ってるんですか？」

「……今のは正当防衛だろ」

音夢は律を引つ張る理由を得たと言うが律は無実だのため息を吐く。

「そういう訳にもいきません。それに響君は重要参考人ですから」

「だから、俺は杉並とは関係ないって言ってるだろ。俺と杉並に風

紀の目を向けて、時間稼ぎと人員の分断するための作戦だろ」

「……あつ!?!?」

音夢は律を杉並の協力者だと言うが、律は音夢達風紀委員が杉並の謀略にのせられてると言うのと、音夢は言われて気づいたよつで驚きの声をあげる。

「……気づいてなかったのかよ」

「あはは」

その様子に律はもう1度、ため息を吐き、音夢は律から目を逸らし
て笑う。

「……離せ。俺は杉並に言わないといけない事がある」

(……ひょっとして、響君、怒ってる?)

「……離せ」

律の言葉使いはいつも通りで淡々と話しているが、杉並に巻き込まれた事に腹を立てているよつで律の背中には明らかな怒りオーラが見え、音夢は苦笑いを浮かべる。

「杉並君に協力してないなら風紀委員に手を貸して下さい」

「……役立たずは足手まといだ」

『なつ、なんだと!?!?』

「杉並の簡単な誘導や錯乱につられる奴は邪魔なだけだ……俺は俺で好きにやる」

音夢は律に協力要請をするが律は杉並に騙された風紀委員は足手まといだと言う律は音夢の言葉に少し考えるが、すぐに要請を拒否して歩き出す。

「……流石に今回は仕方ないか。風紀委員全員に告ぐ。朝倉純一、響律を追うのは中止。これは杉並君の時間稼ぎと人員の分断するための作戦です。至急、両名への探索を止めて杉並君を追って下さい。それと、響君へ危害を与えようとする人間も何か知っている可能性もありますので、響君の警護もお願いします」

音夢は風紀委員の本部に連絡を入れると、

「さてと、杉並君も心配ですが、響君も心配ですね。誰もケガしなければ良いんですけど」

音夢は周りに転がっている男子生徒を見てため息を吐く。

(……あいつはどこにいるんだ?)

「いた」

「響君」

律が杉並の探索を続けていると、知子と加奈子が律を見つけて駆け寄ってくる。

「……今度はお前らかよ」

「今度?」

「こつちの話だ」

律は2人の登場にめんどくさそうにため息を吐くと加奈子は首を傾げるが、

「響君、ちょっと時間良い?」

知子は律に言いたい事があるようで不機嫌そうに律に聞く。

「……悪いな。俺は杉並を探すのに忙しい」

「暇だね」

「そうだね」

律は2人に構う暇まどないと言うが、知子と加奈子は律を暇だと決めつける。

「……人の話を聞いてるか？」

「杉並君の事なんていつでも良いでしょ。こっちの方が重要なもの」

律は不機嫌そうに言うが、知子は律の用は後回しで良いと言う。

「お前らの都合を押しつけるな」

「……それは響君に言う資格は無いね」

律は2人に構ってられないと言うが2人は怒っているようで律の腕をつかむ。

「……つたく、何なんだよ」

「それで」

「……用があるならさっさと見え」

律は諦めたようであめ息を吐く。

「……そう。ここじゃ何だから、どこか場所移そうか？」

「そうだね。どこ行こうか？」

「他に聞かれたく無い話か？」

知子と加奈子は場所を移そうとすると律は2人の様子に重要な話だ
と思ったように聞く。

「少しね」

「……ついて来い」

律は2人を背に歩き出すと2人は慌てて律の後をついてしばらく歩
くと、

(……確か、この辺だったよな)

律は壁を叩き出す。

「えーと、響君」

「……少し黙ってる」

律は壁に違和感を発見したようで立ち止まり、壁の1部分を押すと
壁から通路が現れる。

「……ホントにあっただね」

「ねえ。響君……これが抜け道？」

「ああ。この先に部屋があったはずだ」

流石にあり得ない状況に知子と加奈子は引きつった笑みを浮かべる
が、

「行くぞ」

律は気にする事なく通路に入ると2人は慌てて律の後を追いかけて歩くと通路の先に明かりが漏れている。

(……………杉並か?)

律は杉並がそこにいると判断して2人を置いて駆け出し、

「なぜ!? お前が……………」

「死ね!!!」

部屋に入るなり、律の姿を見て驚く杉並の言葉を遮り、杉並の左の脇腹を殴りつける。

「……………水越に劣らない拳だ。流石はM Y同志響だ」

「……………杉並。あれは何の嫌がらせだ?」

杉並は脇腹を押さえながらも律に向かい言いと律は杉並が何のために自分を巻き込んだかを聞く。

「……………別に、最初は巻き込むのは同志朝倉だけだったのだが、お前が白河嬢を傷つけたようだからな」

「……………何を言ってるんだ?」

杉並は律がこたりを傷つけたと言うがその言葉に律は全く身に覚え

が無いような顔をする。

「……相変わらず、自分の事がいっぱいいっぱいになると周りが見えなくな……」

「それより、響君、ことりに何をしたのよ？」

律の反応に杉並はため息を吐いた後、何か言おうとするが律の後を追いかけてきた知子が杉並の言葉を遮る。

「だから、知らねえよ」

「ホントに心当たり無いの？ 思い出してよ」

「……だいたい」

律がまったく身に覚えがないと言う加奈子は律に改めて聞くと律は少し考え込むと、

「えっ!?!」

「ちょっと、響君!?!」

もう一発、杉並を殴りつける。

「何をする!?!」

「……そう言えば、俺はお前と白河にはめられて見せ物にされたんだよな」

杉並は律の行動に驚きの声をあげるが律は杉並とことりに見せ物にされた事を思い出したようで律の背後には静かに黒いオーラが漂い始める。

「……死ぬ前に、言い残す事は無いか？」

「今はその話じゃないだろ？」

律は杉並の胸倉を掴むが、杉並はため息を吐きながら、律の手を払う。

「俺にとつては重要だ。それに仮に俺が白河に何かしてても、あいつに巻き込まれてる俺としては、借りを返したただけだろ」

「響君、それはどう言う事よ？」

律はことりに謝る気はないと言うと知子は律につかみかかるが、

「……そのままだ。いつも、人を厄介事に巻き込むのはあいつだろ」

「それは確かにそうなんだけど」

律は知子の手を軽く払い言うと、加奈子は苦笑いを浮かべ。

「だいたい、あいつに連れ回されなけ……」

「何か思い出したようだな」

「何があったのよ？」

律は何か引つかかり首を傾げると、知子が律に詰め寄るが、

「…………お前らに関係ないだろ」

律は関係ないと言だけ告げる。

「関係なくないよ。ことりも響君も大切な友達だよ…………それに、ことり、泣きそうな顔してた。いつもは自分に何があってもそんな顔は絶対にしないのに」

「…………それがどうして俺のせいになる？」

加奈子は律の様子にことりが傷ついていると言うが、律は自分のせいにされる意味がわからないため、知子と加奈子に向かい聞くと、

「そこは響君が自分で考えないといけない事」

知子は律が1人で考えるべきだと言うが、

(…………訳がわからん)

律は首を傾げ、律の反応に3人はため息を吐く。

「…………とことりに謝ってきなさい」

「…………断る」

「…………とことり」

知子は律に原因があったと言うが、律は自分は悪くないと突っぱね、加奈子は律にどうしてかと聞く。

「元々、こいつと白河が俺をはめなければ起きなかった事だ。俺が謝る事じゃない」

「響君!？」

「待ってよ!？」

「うるせえ!!」

知子と加奈子は律を説得しようとするが、律はこの部屋から出て行く。

「……急ぎ過ぎたか？」

「杉並君、君は何か知ってるんだよね？」

「話してくれるよね？」

杉並は律の背中を見て、ぽつりと言うと知子と加奈子は杉並の肩をつかむ。

「悪いな。これは言えんな。だが、こうなったのは俺のせいだ。白河のフォローはしておこう」

「大丈夫なの？」

「無論だ」

しかし、杉並は自分からは何も言わないと言い、こどりを元気づける事を約束する。

『戻ってきたな』

「空けて悪かったな」

律が教室に戻ると、律を見つけたクラスメイトが声をかけ、律は店を空けた事を謝るが、

『気にするな』

『ことりとのデートは楽しかった？』

クラスメイト達はニヤニヤと笑いながら律に聞き返す。

「……お前らに聞きたい事がある。杉並に丸め込まれて、俺をはめたな？」

律はそんなクラスメイト達の様子に静かに怒りのオーラを背後に出し、言うど、

『はめたぞ。それがどうかしたか？』

『ああでもしないと響君は学園祭を見て回らないでしょ』

クラスメイト達は悪いと思ってないようであっさりと認める。

「……別に、俺は見て回る事も」

『せつかくの学園祭だしな。去年はサボってたと森川から聞いたし』

『響君が今まで何があって人を避けてたか、私達は知らないしね』

『今更、聞く気も無いしな』

クラスメート達は律が周りと距離を取っている事を気にかけていたようで、律のためにやった行動のようである。

『昔、君に何があつたかは聞かないけど、今は君には仲間がいる。

君が抱えているものを知らなくても君を心配してくれる。支えたいと言ってくれる。そんな人達がそんな人達と一緒に過ごせば、君が抱えているものも少しは軽くなるかな？ ってね』

『私達もその中の1人だと思つてよ』

『俺達だつて、律とこう話すようになる前に少なからず、お前に助けられた事もあるしな。杉並も言つてたけど、お前はお人好しかからな。同じクラスになつてから、小さい事でもお前に手伝つて貰つたりしてる奴は多いんだ』

クラスメート達は律を仲間だと言うが、

「……………記憶に無い」

律は損得で動いていなかったため、恩を売つたつもりはないと言い、

『それがお前だ』

『だからね。あの日、君がことり達を助けた時、私達は君と友達に

なりたいたと思った。無愛想だけど、人の事を思いやれる優しい君と
律の言葉にクラスメートは苦笑いを浮かべて言う。

「……俺はそんな立派な人間じゃない」

『律、お前は考えすぎるんだよ。もっと自分に素直になれば良い。
やりたい事があればやる。言いたい事があれば言えば良い。って感
じだ。これからも仲良くやろうぜ。律』

クラスメートの1人がそう良いながら、律の頭を無造作に撫でる。

「……ああ。だけど。嵌められた側が面白いと思うか？」

『それは、今日は忘れて』

律はクラスメート達の言葉が嬉しかったようだが、照れくさいよう
で不機嫌そうに言う。とクラスメートは笑って誤魔化そうとし、

「……納得が出来ないな」

律はため息を吐く。

『ほら、そろそろ仕事に戻るぞ』

『響君も戻ってきたし、売上アップでトップ賞を狙うよ』

「トップ賞？」

律の反応を見て、クラスメート達はため息を吐き、

『君は付属に3年間いて、その反応なの？』

「どう言う意味だ？」

『うちの学園は学園祭とかのイベント上位になると豪華景品だったり、次のイベントの予算アップだったりがあるんだ』

『その年の生徒会長次第だけどね。今年はあるのよ』

「……全然知らなかった」

律はわいわいと騒ぐクラスメート達を見て、自分は何も知らなかったため息を吐く。

『それだけ、君はイベントに参加してなかったって事だよ』

『今回はクリパの予算アップだからな。何としても上位に食い込まないとな』

「次に繋がるって事か？」

『そう言う事だから、響君も全力を尽くしてね』

「ああ。それに負けるのは性に合わない」

『負けず嫌いだよ』

『また、私達の知らない君が見れたね』

「……………つるせえ」

律の新しい一面を見たとき笑うクラスメートの様子に律は不機嫌そうに言つと喫茶店の仕事に戻る。

……………

……………

……………

…

『律、これからどうする?』

「これから?」

『学園祭1日目の反省会みたいな事をやろうと思つただけ』

学園祭1日目の終了のチャイムが鳴り、クラスメートに反省会に誘われるが、

「……………悪い。今日は帰る」

律は少し考えるとまだなれないようで断る。

『仕方ない。今日は帰してやるが、明日の打ち上げは強制参加だからな』

「……………ああ」

律は明日の打上の誘いに頷くと教室を後にする。

律はクラスメートと別れた後、1人で桜並木を歩く。

(……ったく、何なんだよ)

律はクラスメート達の反応にどう対処して良いかわからなかった。

(……別に、今まであいつらの事を思っただけで行動した事なんてなかったはずだ)

それなのに、クラスメート達からの反応は律に対して良い反応を示すものであった。

(……白河達を助けた時も、別にどうでも良かった。野次馬が邪魔だと思ったから行動しただけだ。白河達を助けたのはその延長上にあっただけで、どうでも良かったはずだ……それなのにどうして?)

あいつらのためにピアノを弾いた?

(今日だって、あんなくだらないケンカどうでも良かったはずだ。それなのに何故、俺は……あいつらの前で弾いたんだ?)

人前では弾かないと決めていた『自分の音』を、見ず知らずの奴のために、才能が無い奴がやるより才能がある奴が練習した方がマシ?

(……『自分がどれだけ自分の音と向き合ったか……他人の奏でる音をどれだけ感じ取れるか』か。あれは本当に俺の言葉か? 俺だ

って、あの時は自分に才能があると思っていたはずだ。才能が無い人間がいる訳の無い世界にいたのだから)

昔、自分が住んでいた世界の事を思い浮かべる。

(……俺はあの時、他人の音を感じ取れていたのか?)

律は左手の傷に視線を移す。

(俺は、とうさんやかあさんが奏でる音を聴く事が出来ていたのか? 自分の音が変わってしまうのが嫌で、『ただ、目を逸らしたかっただけ』じゃないのか?)

それはただの言い訳ではなかったか?

(……こう思うのは、何かにすがりつきたいだけなのか?)

捨ててしまった夢に対する未練。

新たに手に入れた音に描いた未来。

(やっぱり、俺はあそこに戻りたいのか?)

その場所にあったものは大切で、今でも掛け替えのないはずのもの。

(……)

それでも、もう1度あそこに行く勇氣は今の律には無い。

(……頭の中がぐちゃぐちゃだ……そう言えば、森川と佐伯が『俺

のせいで白河が傷ついている』『ような事を言ってたな。それこそ、
どろろという意味だよ？ 訳わかんねえし、まあ、良いか。考えもまと
まんねえし、今日は飯食って寝る（

律はため息を吐くと考えがまとまらないため、頭を大きく掻いた後、
夕食の材料を買いに商店街へ向かい歩き出す。

(……………今日はどうするかな?)

「響君」

律が夕飯のメニューを考えながら買い物をしていると律の姿を見つけた音夢が声をかけてくる。

「……………今日は何で純一を毒殺するつもりだ?」

「……………会って最初に言う言葉がそれですか?」

律は商店街での音夢との遭遇に眉間にシワを寄せて言うと音夢は額に青筋を浮かべるが、

「お前の料理を見てると純一に保険金がかかってるんじゃないかと思っただ」

「確かに、成分的には普通の食品ですからね」

「完全犯罪だよな」

「ですよね」

律は音夢の料理の腕を完全にバカにすると少女の声で同意する声が聞こえ、

「響君、美春、どう言う意味?」

音夢はその言葉で背後に黒いオーラが漂い始める。

「はわわわ。怒らないで下さい。音夢先輩」

「そのままだ」

音夢の様子に少女は慌てるが律は表情を変える事なく言い切り、

「それで、何のようだ？ それとこれは何だ？」

音夢と一緒にいる少女を指差す。

「別に用はありませんけど」

「美春は音夢先輩の後輩です」

「…音夢、こいつに質問の意味を教えてやれ」

「この子は天枷美春。1学年下で私と同じ風紀委員です」

美春と名乗る少女の答えに律はため息を吐くと、音夢は苦笑いを浮かべながら、『天枷 美春』を律に紹介する。

「……天枷？ ……純一や杉並から名前は聞いた事があるな」

「なんて言っていました？」

美春の名を聞き、律は少し考えると何かを思い出す。

「鬱陶しいわんこ。バナナを追いかけてどこまででも走り抜ける子犬」

「……」

律は思い出した言葉をそのまま言つと律その言葉に音夢は苦笑いを浮かべ、美春はプルプルと震えている。

「違ったか？」

「な、な、何なんですか！？ それは！！」

「違うのか？」

「違うに決まってるじゃないですか！！」

律の言葉が納得できないと美春は叫ぶが、

「そうか」

律にはどうでも良いようで、買い物続けようとする。

「その反応はなんですか！？」

「別に、わんこだらうが、俺には関係ないからな」

律は美春の事など、心底どうでも良いと言つて、

「……」

「響君、流石にそれは」

音夢は苦笑いを浮かべたまま、律にもう少し言葉を選べど言いたげである。

「俺には関係ないだろ。こいつとは初めて会ったんだから、俺に言われても困る。文句があるなら、純一や杉並に言え」

「……確かに正論なのかも知れませんが、それでは美春は納得がいきません!!」

「納得がいこうがいかなろうが関係ない」

美春は律に突つかかるが律は気にも留めずに買い物続けて行き、

「やっぱり、響先輩は噂通りの冷血人間です。人の気持ちも考えないような人です。白河先輩の事もそうやって傷つけたんです!!」

美春は律の態度の悪さだけを見て、律がこたりを傷つけたと非難する。

「美春、止めなさい!!」

「でも、音夢先輩」

音夢は美春に言って悪い事があると言つと美春は音夢に怒られてしゅんとすると、

(……わんこじゃないか)

律は純一と杉並の美春への評価は正しいと思いつつも、

「おい。俺が白河を傷つけたってのはどう言う意味だ？」

さつきから、言われることりに何があったかわからないため、2人に聞く。

「今日、響先輩が白河先輩を傷つけたって噂が」

「そんな記憶はない」

「本当ですか？」

「嘘を言っただけです」

律はキツパリとことりを傷つけた噂を否定するが、

「本当に心当たりは無いんですか？」

「しつこいぞ。だいたい、俺が白河を傷つける意味が無いだろ？」

「響君は、少し他人の気持ちを考えてらどうか？」

音夢は律に原因があると言いたげに律に聞き返し、律は身に覚えがないと言い切ると音夢はため息を吐く。

「どう言う意味だ？」

「そこは、響君が自分で考えないとダメだよ」

律は音夢の言葉の意味が律にはわからずに音夢はそんな律を見て苦笑いを浮かべる。

「音夢まで同じ事を言うわけか？」

「私も？」

「森川と佐伯にも自分で考えろと言われた」

「それで、何かわかった？」

「わかったら、聞かねえよ」

律が知子や加奈子にも同じ事を聞かれたが自分には意味がわからないと言うと、

「それでは、1つヒントをあげます。響君にとって、『ことりはどういう存在』ですか？」

「友人になるんだと思う」

「そうですね。だけど、ことりは自分でも気づいて無いかも知れませんが、響君とは友達でいたくないと思ってます」

音夢はことりの気持ちを考えて欲しいと律に言うが、

「………それであの嫌がらせか」

律にはことりと杉並が組んでいたため、嫌がらせとしか思えない。

「どうして、そこに行き着くんですか？」

「杉並と組んで、俺を見せ物にしたんだぞ。嫌がらせ以外の何だ？」

「……もう良いです。ことりは響君に嫌がらせをしたかったわけでは無いです。ただ、響君と一緒に学園祭を見て回りたかっただけです。ここから先の意味は自分で考えて下さい。美春、行きましょう」

「はい。音夢先輩」

音夢は後は自分で考えろと言うと美春と一緒に律を置いて行ってしまふ。

「……だから、何なんだよ……ちっ、訳がわかんねえよ」

律は訳がわからないため、舌打ちをした後、

(……一先ず、ここに居ても仕方ないか)

買い物済ませ家に帰る。

(……あいつは何がやりたいんだ?)

律が買い物が終わらせ家の前まで行くと、ことりが家の前に立ちインターホンを鳴らすか悩んでいるおり、何かを決意したようで、インターホンを押そうとした時、

「人の家の前で何をやってる？」

「!?!?」

律はことりの背後から声をかける。

「響君!?!?」

「何だ？」

「いきなり、後ろから声をかけないで下さい(……また、聞こえなかった)」

ことりは律の心の声が聞こえず、律が近づいてきた事に気づかなかったようで不安そうな表情をするが、

「なら、家の前に不審人物がいると通報すれば良かったか？」

「……それは止めて欲しいです」

律はことりの様子に気づく事はない。

「それで、何かよっか?」

「よっつと言っか……」

律はことりが家にきた理由を聞くが、ことりは言い出せないよっつで、

(……何なんだよ)

(声が聞こえ始めた? ……でも、まだ、怒ってるのかな? どうしよっ?)

ことりは律の機嫌が治っているかわからずに話を切り出そうか悩んでいるよ、

「……よっつがあるのか? ないのか?」

「……」

律はもう1度、ことりに聞くが彼女は何も言わないため、

(……わけがわかんねえ)

「響くん」

律はため息を吐き、家に入ろうとすると、ことりが律を呼ぶ。

「何だ?」

「……あの、怒ってますよね?」

「あれだけ見世物にされればな」

「えっ!？」

律の言葉がことりは自分が考えていた答えと違い驚きの声を上げる。

「何だよ？」

「お、怒ってるのはそこですか？」

ことりは慌てて、律に聞き返すと、

「当たり前だ。見世物になる事が楽しいヤツはそっちの方向に進めば良い。俺は2度とゴメンだ。ようはそれだけか？」

律は不機嫌そうに言う。

「それじゃあ、怒ってないんですか？」

「だから、頭にきてると言ってるだろ」

「それじゃなくて」

ことりは律と話が少しずれてる事に苦笑いを浮かべると、

「……音楽室での事です」

不安そうな表情で律に聞く。

(……あれか？ あれはこいつは悪く無いだろ。佐伯や森川、音夢と……あのなんて言ったかな？ ……わんこ？ が言っただのはこれの事か？)

(わんこ？ って天枷さん？……むう、何でみんな女の子ですかね？)

律はことりの質問に少し考え始めるとことりは律の周りに女の子が多かったため、少しムツとする。

「あれは俺の問題だ。お前は関係ない」

「関係ない？」

ことりは律の『関係ない』の一言に表情を曇らせる。

「……もう良いか？」

「待って下さい！！」

律は用は終わったと家の中に入ろうとするとことりが律を呼び止める。

「……まだ、何かようか？」

「あの時、何があったのかを教えてください」

律の言葉にことりは一瞬怯むが決意を決めたようで、律に音楽室で何があったのかを聞くが、

「……そんなもん聞いてどうする？」

律の言葉は先ほどとは異なり冷たくなると同時に、

(また、聞こえなくなっただ?)

ことりには律の心の声が聞こえなくなる。

「……どうして、そんな事を聞きたがる？」

「それは……」

律の問いかけにことりは答える事が出来ずに律から視線を逸らす。

「……どうしてだと聞いている？」

律の声は一見怒っているようにも聞こえるが、律は声を荒げるわけでもなくその声は冷たく抑圧されたような感情も何も無いような声である。

「……どうしてだ？」

律がもう1度、ことりに聞いた時、

『あらあら、ケンカみたいね』

『青春よね』

近所から律とことりの姿を見て通行人が2人が痴話ゲンカしていると話ながら通り過ぎて行く。

「……入れ」

その言葉を聞き、律は変な噂を立てられるのを嫌がったようで、ドアを開け、家に入るとことりは律の後を追いかけて響家へ入る。

「……あの」

「居間にでも居てくれ。俺は着替える」

律はことりの返事も聞かずに自分の部屋の中に入って行く。

(……一先ず、居間に行きましようか)

ことりは居間にあるソファーに座ると、居間を見渡して、

(どうして、響くんはこの広い家に一人で住んでるんだろう?)

ことりは律と初めて会った日に言っていた『俺は1人暮らしだから』と言っ言葉を思い出す。

(家族の仲が悪いのかな? それと『音楽』の事)

ことりは律と出会ってから、律に感じた違和感を思い浮かべる。

(ピアノの時もギターの時も演奏してる時は凄く楽しそうだった……
……だけど、どうして、演奏した後はいつも辛そう何だろう?)

今日の音楽室の後での事を思い浮かべると、

(……あの時、聞こえた。『俺は人前ではもう弾かないと決めだし、人の音には関わらないって決めたんだ』と言うのは？ やっぱり、昔は音楽をしていたのかな？)

律にバンドの練習を見て欲しいと言った日の事を思い出し始めた時、

「……人の過去に首を突っ込もうとする理由を聞かせて貰おうか？」

着替えを終えた律が居間に現れる。

「……心配なんです」

「心配？ ……悪いが、白河に心配される理由はないな」

ことりは律の事を心配だと言うと律は不機嫌そうな表情をする。

「響くんは家族や音楽の話になると機嫌が悪くなるように見えます」

「だから、どうした？ お前には関係ないだろ」

ことりは今までの律を見てきて感じた事を言うと律は冷たくことりには関係ないと言い切り、

（……やっぱり、聞こえない）

ことりは今の律の心の声が聞こえないようで不安そうな表情をしている。

「……どうした？ 何も言えないのか？」

（……聞こえない。怖いよ）

律の言葉は淡々としており、その言葉と心の声が聞こえないためか、ことりは追い詰められていく。

「……何か言えよ」

「……………響くんは友達だから」

律の言葉にことりが自分の勇気を絞り出すように言うが、

「……………友達だから？」

その言葉で律の声には怒気が含まれる。

「ふざけるなよ。友達だからが理由になるって言うなら、何をやっても良いと思ってるのか？」

「……………響くん？」

「知った顔で友達だと言って、その人間の傷口に指を突っ込み傷口を広げて塩をぬるのはお前の考えでは友達になるのか？」

「それは……………」

律の怒気の混じった言葉にことりは顔を伏せると、

「なら、俺も言わせて貰うか。お前は俺達に何を隠している？」

「!？」

「いつも笑っているが、それは本当のお前か？ 学園のアイドル？ そんなもんに祭り上げられて嬉しいのか？ 見世物にされて嬉しいのか!?!」

律はことりが人の心の声を聞いている事で体調を崩している事までは気づいて無いようだが、見世物にされている事がことりにとって

負担になっている事に気づいているようにで隠し事をしていることには何も言われる筋合いはないと言う。

「なんで？」

「んなもん見てればわかるだろ」

ことりは律の言葉に疑問の声を上げるが律はことりを睨みつけ、

「お前は自分の友達だと言う奴に隠し事してるのに人には全てを話せと言つのか？」

「それは…」

「答える！！」

律はいつもの彼からは想像できないような勢いでことりを怒鳴りつける。

(……私はどうして? どうして何だろう?)

律の言葉にことりは何故、律の事が聞きたいのか考えるが、彼女自身、どうしても、律の過去を聞きたがるかがわからない。

(……でも、知りたい)

ことりは自分の心に正直に言う。

「私が響くんに隠し事をしてた事は謝ります。これは自分の問題だから、響くんに迷惑をかけないようにしてました」

「……なら」

ことりは真っ直ぐに律を見て言うが、律は自分の話をしたくないため終わらせようとする。

「それを踏まえて教えて下さい。響くんが音楽や家族の事になると辛そうにしてるのはわかります。私じゃ力になれないですか?」

「……話す気はない」

しかし、ことりは諦める気はなく、視線を逸らす事なく言いうと、律は少し冷静になったのか、いつも通りの話し方に戻り、

「だいたい。お前だって自分の事を話して無いのに俺だけに話せと言うのか? 俺だってお前のように周りの迷惑になるかも知れない

事は言いたくない」

「わかりました。それなら、私も話します」

ため息を吐きながらも拒絶すると、ことりは何かを決意したよう
で頷き、

「私が人前でいつも笑っていたのは、人に嫌われるのが怖いから
です」

「おい」

「私は小さい時に両親を家族を亡くしました。そして、親戚である
今の両親に引き取られました」

自分が隠していた事を話し始め、律はことりの話を止めようとする
が、ことりは話を止める気はなく、

「小さい頃の私は新しい環境に戸惑いました……たぶん、その時に
覚えた自衛手段なんです」

ことりは自分の能力の事を隠すが自分が律に隠していた事を話す。

「……そうか。佐伯や森川は」

「2人は知ってます。昔からの友達ですから」

「そうか……」

律は聞いてしまった手前、何を言って良いのかわからずに知子と加

奈子がこの話を知っているか確認するとことりは苦笑いを浮かべながら頷くが、律は次の言葉が出てこない。

「次は、響くんの番ですよ」

「……ここで、俺が言わないと卑怯もんか？」

「そうつすね」

「……つたく、逃げようがないじゃないかよ」

ことりは律の番だと言うと律はため息を1つ吐き、

「俺が1人で住んでいるのは、家族を捨てたからだ」

「家族を捨てた？」

自分は家族を捨てたと言うとことりは律の言葉の意味がわからずに聞き返す。

「……ああ」

「捨てたって言うなら、この家や生活費は？」

「……昔、音楽の世界で金を稼いでいた」

律が頷くのを見て、ことりは当然疑問に持った事を口にするると律は自分が昔、音楽の世界にいたと言う。

「……音楽の世界でって……プロですか？」

「……ああ、プロのピアニストだった。これでも、神童とか天才って呼ばれていたんだ」

律はことりの質問に少し自虐的な笑みを浮かべて笑う。

「どうして止めてしまったんですか？」

「……嫌になったんだ。プロの世界に居たと言っても、俺の話題性だけで俺の音を聞こうともしない奴らの前で弾くのが」

「だけど、それなら……」

ことりは律の様子に表情を曇らせながらも律の家族の事を聞こうとすると、

「……その頃には、俺の両親は俺の事より金の事の方が大切になっていた」

「そんな事!？」

「事実だ。俺がこの傷を付けた時にあいつらは俺を見下した瞳で見ていた」

律はその時の両親の顔を思い出しているのか冷たく何も感じていないような表情でことりに左手の傷を見せる。

「い、これは?」

「音楽を……全てを捨てると決めた時に自分で付けた傷だ」

ことりは律の左手の傷跡を見てどれだけの怪我が理解出来たようで表情は青ざめている。

「そんな顔するな。もう治っている」

「でも、今日、音楽室の時に」

「たまに痛むがたいした事じゃない。傷自体はとっくに治ってるし、リハビリも終わっている」

律はことりの表情を見て優しい声で言うがことりは今日の音楽室で律が左手を押さえていた事を思い出して律に詰め寄るが、律は大丈夫だと言い、

(……後は俺の心の問題だからな)

律は口に出す事なく、自分の問題だと言い聞かせると、

「だから、そんな顔をするな」

(これは反則かも知れません)

律はことりに向かい優しい笑みを浮かべ、ことりはその顔を見て顔を真っ赤にして律から視線を逸らす。

「どうかしたか？」

「な、な、何でもないです」

「そうか……白河、時間は良いのか？」

律はことりの様子に聞き返すとことりは慌てて何も無いと言い、律はそれ以上の追及をする事なく、話しこんだせいか時間を確認すると、

「えっ！？うわ。もうこんな時間、帰らないと」

「ほら、行くぞ」

「送って貰えるんですか？」

「……流石に一人で帰らせる訳にはいかないだろ」

ことりが慌てる姿を見て、律はため息を吐くと立ち上がり、ことりを送って行く準備を始める。

(……どうして、こんな事になった?)

律は何故か白河家で夕飯をご馳走になっており、

(……少し状況を確認しよう)

律がことりを白河家まで送ると、家の前には仁王立ちをした暦が立っていた。

「お姉ちゃん、ただいま」

「白河先生、こんばんは」

律は特に何も気にする事なく暦に挨拶をすると、暦は律の肩に手を回し、

「なあ、響、あんたに少し聞きたい事があるんだけど」

「俺には答える事はないですよ」

逆らう事は許さないと言う感じで律にそう言うが、律は暦の相手をする気はなく彼女の手を払いのけ、

「それじゃあな。白河」

律は自分の家に帰ろうとするが、暦が凄いい形相で律の肩を掴む。

「何ですか？」

「話があるって言わなかったかい？」

「俺も答える事はないと言いましたけど」

律は面倒だと言いたげに言うが暦は額に青筋を浮かべており、2人
の間ではにらみ合いが始まり、

「2人とも落ち着いて下さい」

「暦、ことり、帰って来たの？」

ことりが2人を止めるが2人は睨みあつたまま動かないでいると、
ことりと暦の母親らしき女性が玄関まで現れる。

「ことり、この人は？」

「えーと、この人は響律くんです」

「あら、ことりを送ってくれたの。はじめまして、ことりがいつも
お世話になっています。ことりと暦の母の詠子です。暦もそんな所
で話すならうちが上がって貰いなさい」

ことりの母親は律の名前を聞くと自分も名乗り、家にかかるように
言うので、

「すみません。俺はもう帰りますんで……すみません」

「あは」

律が断り頭を下げた時にタイミングよく、律の腹の虫が鳴り、詠子は母親は浮かべると、

「響くん、今日の夕飯は？」

「……今から作る気にもならないからな。コンビニにでもよって帰る」

ことりは律の腹の虫に苦笑いを浮かべながら、律に夕食をどうするか聞くと律はコンビニによると言う。

「それなら、うちで食べて言ってください。ことり、暦、上がって貰いなさい」

「了解つす」

「ほら、入んな」

詠子はことりを送ってきた事で時間がかかった事もあるためか、律を夕食に誘うとことりと暦は律の意見など聞かずに律の腕を掴むと律を家の中に引きずって行く。

(……そして、こんな状況か?)

律は状況を確認してため息を吐くと、

「それで、響」

「何ですか？」

「こつりに手を出してないだろうね？」

暦が律を睨みつけながら、こつりとの関係を聞く。

「お姉ちゃん、何を言ってるの!？」

「出してないです。と言うか、白河先生まで非公式新聞部の情報に踊らされないで下さい」

こつりは慌てているが、律は下らないと言いたげに出された夕食に箸を伸ばし、

「……美味しい」

「お口に合うみたいですね」

予想以上に詠子の料理は上手く、小さく声が漏れると詠子は律を見て微笑む。

(……何かいづらい。それはそうか。俺にはもう捨てたものだからな)

律は詠子の表情に家族を捨てた自分がこの場所には相応しくないと考えたようで、律は急いで夕食を食べると、

「ごちそうさまでした。すみません。失礼します」

食器をキッチンまで運ぶと急いで自分の家に帰ろうとするが、

「あら。もう少しゆっくりして行ってください」

「いえ」

詠子が律の前にお茶を出して律を引き留め、律は断ろうとするが詠子はやっぱりと律に座るように言う。

(……白河もそうだが、……この家族、何か苦手だ)

律は結局、断りきれずに席に戻ると、

「ねえねえ、2人はお付き合いしてるの?」

「……付き合ってないです」

詠子から、先ほどの暦と同様の質問が出て、律は、また、この質問かのため息を吐く。

「あら、残念。最近、響君の話ばかりだから、てっきり」

「お母さん、何を言ってるの!?!」

詠子は律の様子に苦笑いを浮かべるところよりは慌てて詠子を止める。

(……こいつ、人の事を何て言ってるんだ?)

律は慌てることりを見てため息を吐いていると、

「本当に、付き合っていないんだよね？」

「……しつこいですよ。だいたい、どうして、そんな話になるんですか？」

暦が律を睨みつけたまま、ことりと律の関係を確認するように聞き、律はため息を吐きながら暦が勘違いしている理由を聞く。

「今日の学園祭でベストカップルコンテストとかに出て無かったかい？」

「……また、あれのせいだよ。あれは、白河と杉並に嵌められただけです。俺は出るつもりなんて微塵もありませんでしたよ」

暦は律とことりが出場したベストカップルコンテストが引っかかっているようだが、律はそれをめんどくさそうに完全否定すると、律の言葉に「ことりは、少しムツとした表情をすると、

(あらあら、ことりはやっぱり、この子の事好きなのね)

(！？ わ、私が響くんの事が、す、す、好き？ お母さんは何を考えてるの？ だいたい、私は朝倉くんの事が好きで、響くんとはそんな関係じゃないし、確かに、メガネかけてた時はあの目つきも

和らいで結構カッコよかったりするけど、無愛想だし、それでも優しい所もあるけど、それに、それに)

詠子はことりの律への想いを感じ取り優しい笑みを浮かべ、ことりは詠子の考えを覗き見て、顔を真っ赤にしながら、1人でパニック तरी始める。

「ん？ 白河、どうかしたのか？ 顔が赤いぞ。風邪でもひいたか？」

「な、何でもないです!!」

律はことりの異変に気づくと彼女の額に手を置くと、ことりは律の突然の行動に顔を一層赤くし、律と距離を取る。

「……………そうか」

そんなことりの様子に律は特に反応もしないで頷くと、曆は凄惨い形相で律を睨みつけ、詠子は見守るような瞳で見つめていると、

(この件に関しては触れてはいけないようだな……………ん、そろそろ、本気で帰らないとな)

律は時計で時間を確認すると時間も遅くなってきており、

「すみません。そろそろ帰ります」

律は立ち上がり家に帰ると言う。

「そうね。そろそろ帰らないといけない時間ね」

「夕飯、ごちそうさまでした」

「待ちな」

詠子は律の言葉に時間を確認して頷くと律は頭を下げて玄關に向かおうとするが、曆が律を呼び止める。

「何か用ですか？」

「煙草が切れたんでね。買い物に付き合いな」

「お断りします」

「待てと言ってるだろ」

曆は自分の買い物に律をつき合わせようとするが律はすぐに断り、玄關へと向かうと曆は律を追いかけて行き、

「待てと言つのが聞こえなかったのかい？」

律が白河家から出ると曆は律の肩を掴む。

「俺は断りました」

「あなたはこんな時間に女性を1人で買い物に行かせるような冷たい人間なのかい？」

「それなら、こんな時間に煙草1つ買いに歩かないで下さい。一晩くらい我慢して下さい」

律は面倒だと言いたげにため息を吐くと暦は自分が女と言う事を強調して買物に吐き合わせようとしますが、律は正論で返すが、

「それ以外に話したい事があるって考えにはあんたは気付かないのかい」

暦は他に話があるとため息を吐きながら言う。

「ありそうな気はしますが、俺は首を突っ込む気はないから帰りま
す」

「……お前は、ことりの事をどう思ってるんだい？」

「どんな答えを期待しているんですか？」

律は暦の話を書く気はないと歩き出そうとするが暦は律の肩をがっ
ちりと掴むと律はため息を吐く。

「……それは」

「流石に、あそこまでの反応をされれば、気づきますが、結局は白
河の問題のほうですよ。白河先生がそこまで首を突っ込むのはお
かしいじゃないですか？」

「私はあの子が好きなんだ」

律の言葉に暦は少し考えて答えるとその言葉に律は一步引くと、

「変な意味じゃ無いからね」

「シスコンもほどほどにしといた方が良いでしょう」

暦はおかしな事を言うなとため息を吐き、律は冷やかな目で言う。

「うるさい。それくらい大切なんだよ……」

「……そんなに心配しなくても白河先生と白河は家族ですよ」

「お前、どこまで知ってるんだ？」

暦は何かを噛みしめるように言うのを見て、律が言うと暦は驚いたような表情をする。

「どこまでと言われても困りますが、白河が養女と言う事は白河本人から聞きました」

「……そうか」

「少なくとも、俺は血とかじゃなく、2人は家族だと思えましたよ」
頷く暦を見て律は暦とことりは間違いなく家族だと言うと、

（そう。家族の絆ってのは、『血』じゃない。その証拠に俺には『絆』なんて無かったんだから）

自分が捨てた家族の事を思い浮かべたようで表情を歪ませる。

「響、どうかしたかい？」

「いえ、何でもありません」

暦は律の表情に何かを感じたようで律を呼ぶと律は表情を元に戻すと、

「そうか。それで、お前はことりの事をどう思ってるんだい？」

「白河先生から、白河に『俺はあいつに相応しくない』と言って貰えませんか？」

「どう言う意味だい？　ことりはあなたの相手にはなれないって言うのかい？」

暦は真剣な表情をして改め律に聞くと、律はことりとは付き合う気はないと言い、その言葉に暦は律を睨みつける。

「……あいつは良い奴ですよ。だからこそ。俺の隣に居ようとしてはいけません。俺には何もありませんから」

「何も無い？」

「そのままです。あいつは暦先生や大切な家族がいる。血なんか関係なくあいつを大切に思ってくれる人達がいる。俺にはそんな家族ものはないですから、もし、あいつがそばにいてくれたとしてもどう接して良いかわかりません。それで、あいつを傷つけるなら俺はそばにいた方がいいじゃない」

律の言葉に暦は律の中にある危うさを感じ取ったようで眉間にしわを寄せて聞き返すと律は悲しげに笑う。

「……あなたはそれで良いのかい？　私はあなたの純粋な気持ちを聞きたいんだ。ことりをどう思ってるんだい？」

「何度、聞かれても俺の答えは変わりません。俺には資格がない。それ以上もそれ以下も無い」

暦は律の答えが納得いかないようで、再度、律にことりの事を聞く

が律の答えが変わるわけはなく、

「それは逃げてるだけじゃないのかい？」

「そうですね。俺は全てから逃げ出した情けない奴ですから、白河先生だって、そんな奴に大切な妹を渡したくはないでしょ」

「……………」

暦は律に逃げるなど言おうとするが、律は自分の中になる部分には触れて欲しくないと暦を拒絶するように言い、暦は律の様子に黙り込んでしまう。

「そう言う事です。俺には本気で人と向き合う勇気がありません。たぶん、傷つくのが怖いんです。あの日、失ったものと向かい合う事になるから、捨てたと言っているものに自分が捨てられたと言われるのが」

「……………捨てたと思うものに？」

「血が繋がっていようと、家族じゃない家族もいるって事ですよ」

暦の言葉に律は自虐的な笑みを浮かべると暦に背を向け歩き出す。

「……………響、あんたはことりの事をバカにするんじゃないよ。あの娘は子なんか関係なく私達の家族になった子だ。ちゃんとあんたとも向き合っよ」

背を向け歩いている律に向かい言うが、律は振り返る事もなく自分の家に歩いて行き、

(……ことりも大変な人間に惚れたみたいだね)

曆は律の背中を見送るため息を吐く。

「はあ」

学園祭2日目ことりは屋上で1人でため息を吐いている。

(……昨日、お母さんがあんな事を考えるから)

ことりは昨日の母親が考えていた『ことりが律の事を好き』と思っていた事を思い出し、頭を抱えている。

(……確かに、響君はカッコいいですけど、そんなんじゃない……)

ことりは律の顔を思い浮かべると、自分の顔が真っ赤になって行くのを感じる。

(……私は、朝倉君や響君が鈍いと思ってましたけど、自分も鈍かったんでしょうか?)

そう思いため息を吐いた時、屋上のドアが開き、

「ことり」

「こんな所にいた」

知子と加奈子がことりを探していたようで駆け寄って来る。

「みっくん、ともちゃん、どうしたの?」

「どうしたの？じゃないよ。探したんだからね」

ことりは2人が駆け寄ってきた事に首を傾げると2人はため息を吐く。

「私をですか？」

「バンドの練習時間になるよ」

「あっ!？」

ことりは練習時間の事をすっかり忘れていたようで驚きの声をあげると、2人はもう1度ため息を吐くと、

「ほら、早く練習時間なくなるよ」

「そうですね」

3人は音楽室に向かい歩きだす。

「ことり、さっき何を考えてたの？」

「な、な、何もおかしな事は考えて無かったっすよ」

加奈子は屋上でことりが何を考えていたか聞くとことりは律の事を考えていたなどとは言えずに声を裏返して言うが、

「ふーん。まあ、そう言う事にしよう」

知子は悪戯な笑みを浮かべると、

「あつ！？ 響君」

律の名を呼び、ことりは律の名前に身体を一瞬、硬直させた後、律の姿を探すが、

(あれ？ いない)

律の姿はどこにもなく、そんなことりの姿を見て、知子と加奈子はニヤニヤと笑っており、

「みっくん、ともちゃん、どう言う事ですか？」

ことりは頬を膨らませて2人に聞く。

「杉並君から、2人が仲直りした事と」

「ことりがようやく自分の気持ちに気づいたって聞いたから」

2人はニヤニヤと笑ったまま、ことりの考えている事などお見通しだと言うと、ことりの顔は真っ赤に染まって行き、

「2人とも意地悪ですよ」

ことりは顔を真っ赤にしたまま頬を尖らせて言うと、

「あつ！？ 響君」

加奈子が律の名を呼ぶ。

「みつくん、流石に続けては騙されませんよ」

「何かようか？」

ことりはため息を吐きながら同じ手は通用しないと云うが今度は律がきたのは本当で、ことりの後ろから律と純一が歩いて来る。

「ひ、ひ、響君！？ どうしてここに？」

ことりは声を裏返し律がいる意味を訪ねると、

「休憩時間になって屋上で寝ようと思ってたら、純一に捕まった」

「どうせ屋上に行くなら、一緒に行くか？ って言ったただけだろ」

律は屋上に寝に行くと言い、純一は律の隣で苦笑いを浮かべ、

「2人とも、学園祭を楽しむって気はないの？」

知子は2人の言葉にため息を吐くが、

「どうせ、静かに学園祭を回っても杉並に邪魔されるからな。少しゆっくりしてたいんだ」

「騒がしいのは好きじゃないからな」

2人はあまり学園祭ではしゃぐ気はなく、

「それで、何かようか？」

律は加奈子が自分を呼んだ意味を再度、訊ねる。

「見かけたから挨拶と響君も朝倉君も演奏見にきてね」

「……悪いな。俺はいかない」

加奈子は2人に自分達の演奏を見に来てと言うと純一は頷くが律は断ると、

(……やっぱり、ダメですよね)

ことりは律に来て欲しい気持ちもあるが、律が持つ音楽との確執の事を考えると何も言う事は出来ずにいる。

「ことりも響君に来て欲しいよね？」

「……来て欲しいですけど」

知子はことりの意見を聞くとことりは律の事を考えて遠慮がちに言う。

「ほら、ことりもこう言ってるし」

「……律、たぶんただお前がここで行くって言わなくても行くことになると思うぞ」

律は行く気はないようで何も答えないが、純一は何か気になる事があつたようのため息を吐くと、

「どう言う意味ですか？」

「たぶんと言うか、間違いなく杉並が何かを企んでるからな」

ことが純一にため息の意味を聞くと純一は杉並が何かすると言った時、

「マイクテスト、マイクテスト」

「……あいつは何をするつもりだ？」

校内放送から杉並の音が響き、律はため息を吐く。

「何、たいした事じゃない」

律の言葉に杉並は何故か返事をし、その場にいる全員が杉並の行動にため息を吐くと、

「そんな反応するなよ。照れるじゃないか」

「……良いから、何をするつもりだ？」

校内放送から杉並の笑い声が聞こえ、律は色々と諦めたようで杉並に何の用だと聞く。

「ふむ。賞品が諦めてくれたようなのでな。今回、我々、非公式新聞部が提供する企画は」

杉並の後ろからドラムロールが流れ、

「手が込んでるな」

「今、音夢とわんこは杉並を探してるんだろっな」

「そっつすね」

律と純一がため息を吐き、ことりは苦笑いを浮かべるとドラムロールが止まり、

「我らが、同志響律に賞金を賭けた。賞金を受け取る条件は『同志

響律をグラウンドにある特設ステージに連れて来ること』だ。これを行えたものには非公式新聞部から、さくらパークフリーパスペアチケットを進呈しよう」

「……何で、俺がそんな事に巻き込まれなければいけない？」

杉並の発表に律は当然、ため息を吐くが、

「せつかくの祭りだ。良いではないか？」

「巻き込まれるこっちの身も考えるよ」

「はっ、はっ、はっ、断る」

杉並が律の意見を聞くわけがなく、

「……めんどくさいから、ふける」

律は巻き込まれるのはゴメンだと家に帰ると言い、歩きだす。

「ねえ、杉並君、これって、参加自由なの？」

「そつだな」

「そつ。朝倉君、響君を捕まえて」

知子は杉並の話に何かを考え付いたようでニヤリと笑うと純一に律を捕まえるように言い、その指示に律と純一はわけがわからない表情をする。

「この中の誰かが、響君を連れてけば、終わる訳だよね？」

「そうだね」

「そう言えば、そうっすね」

知子はこのメンバーで律を連れて行くことと言つことりと加奈子は頷き、

「……それは考えて無かった」

「……俺は行くつもりはない」

「まあ、待て」

杉並はその考えはなかったようで呟くが律は聞く気はないと言い再び、歩き始めると純一が律の腕をつかむ。

「放せ」

「ステージに行くだけだろ？　それで終わりなら」

「……それで終わりじゃない。俺は弾く気はない」

律は杉並が何を企んでるのか理解したようで苦虫を噛み潰したような表情を言う。

「流石は、同志響、俺の考えを読み切るとは……そろそろ、前に進んでも良いのではないか？」

「杉並くん!？」

ことりは律の過去を聞いたせいか、杉並が何をしようとしてるか気づいたようで、杉並の名を呼ぶが、

「白河、少し黙っていてくれないか。俺は同志響と話をしてるのだから」

「こんなの酷すぎます。杉並くんは知ってるんですね」

「もちろん、知っている。知っているうえで言っている」

「何の権利があつて、そんな事」

「ほう。白河、お前がそんな事を言うなんて意外だな。お前も同志響の傷をえぐった人間であろう？ 自分1人だけ、いい子ぶる気か？」

「それは……」

杉並の言葉にことりは黙り込んでしまう。

「さてと……どうするつもりだ？ 過去と決着をつけるなどとは言わないが、顔をあげるくらいなら出来るのではないか？」

「……俺にはまだ出来ない」

杉並は律を挑発するように言うが律はその言葉を否定する。

「まだ？ なら、いつまで、そうやっているつもりだ？」

「…………さあな」

「お前がいつまでもそうやっていっているつもりなら、俺が教えてやろう。お前にはあの場所しかないんだ。目を逸らしても結局はあそこしかないんだ。お前だって、それはわかっているのだろう？ わかっているから、悩んでいるふりをしているのだろう？ 成長するのに傷つくのは必要な事では無いのか？」

「…………お前に何がわかる」

律は何かを絞り出すように言うが、

「わからんな。下を向いて前を向こうともしない腐った奴の事など、わかる必要もない」

杉並は律の言葉を鼻で笑うと、

「…………少し、時間をくれ」

「律」

律はそれ以上は何を言わずに歩きだし、純一は律の名を呼ぶが律は振り返る事はない。

「杉並くん、どうしてですか？ 何であんなひどい事」

「今は止めておけ、あいつは時間をくれと言った。必ず、来る。俺はあいつを信じている」

ことりは杉並を非難し、律を追いかけてようとしますが杉並がことりを静止した時、

「……杉並君、校内放送を私用で使った事についてお聞きしたいのですが？」

杉並の後ろに音夢が現れたようである。

「しまった。俺とした事が!？」

「な、なに!？」

杉並がわざとらしく言う。校内放送から音夢と風紀委員の驚きの声が響く。

「非公式新聞部からの特別企画は風紀委員の邪魔により、一先ず中止だ。後、朝倉、白河、森川、佐伯、同志の話は他には流して無いから安心しろ」

その言葉の後、校内放送は切れ、

「……あいつは何がしたいんだ？」

「わかんないけど」

「杉並君なりに響君の事を心配してるんじゃないの？」

「そうだな」

3人が納得してる中、ことりは1人浮かない表情をする。

(……杉並の野郎。ずいぶん好き勝手言ってくれたよな)

律は1人、屋上で杉並に言われた事を考えている。

(……あいつに言われなくてもなく、そんな事、知ってたさ)

律は左手の傷を見つめる。

(俺は前に進めるのか? ……また、あの場所に戻れるのか?)

あの場所を捨てた俺に、

あそこに戻る『資格』があるのか?

(また、あの場所で俺は……傷つくのが怖い)

律の頭の中で、昔の記憶が甦る。

(誰も、俺の音を聞いていないのに、あの場所に戻る必要があるのか?俺は俺のために俺の音を奏でたい。それはここじゃダメなのか?)

律がそう思った瞬間、「ズキッ」と左手の傷が疼く。

(……わかってるよ。前を向けて言うんだ。わかってるよ。でも。怖いんだ。あの場所が、そして、また、大切なものを失うのが)

律はこの島で初めて手に入れた友人たちの顔を思い浮かべる。

(ここから、離れると俺はあいつらを失ってしまうんじゃないか？
少なくとも、あの世界の中で俺はまた変わって行くかも知れない。
それは本当に些細なことかも知れないけど……)

また、ここに戻って来た時、あいつらは、

(あいつらをだましていた俺を……)

許してくれるのか？

(……なあ、俺はどうしたら良い？)

律は左手の傷を見つめるが、それは答えを教えてくれるわけではない。

(……でも)

ここを離れる事で失うものの他に、取り戻せるものもある。

(……結局、俺はガキ何だな)

失ったものを取り戻したい。

新しく手に入れたものを手放したくない。

(……多分、ずっと前から、答えなんて出てたんだ)

律は自分の考えに苦笑いを浮かべると、

(……あいつの思い通りになるのは癪だよな)

そう思いながらも立ち上がり、屋上を後にする律の表情は迷いがきえたようで晴々としている。

(さてと、一先ずは……杉並を見つける事かな？ あいつ、こなく
て良い時は出てくるけど、用事がある時は出てこないんだよな)

律は神出鬼没の杉並の事を考えてため息を吐くと、

「響くん」

ことりが律の姿を見つけて駆け寄ってくる。

「……白河か？ 練習はどうした？」

「公式の練習時間は終わりました。今は一応、自由時間です」

「そうか」

「あの……」

ことりは律に何かを聞きたいようであるが、

「杉並を見なかったか？」

「何だ？ 同志響よ。俺を探しているのか？」

律はことりの事を気にする事なくことりに聞くと、再度、校内放送
から杉並の声が聞こえる。

「……どこから、返事をしてくるんだよ」

「細かい事を気にすると禿げるぞ」

律はため息を吐くが、杉並は笑った後、

「……答えは出たようだな」

先ほどとは違い真面目な声で律に聞く。

「……お前の期待通りになるのは癪だけだな。あそこに行く前に、やっておきたい事があるんだけど、頼めるか？」

「愚問だな。場所は音楽室で良いか？」

「ああ。そこしかないと思う」

「……ふっ」

律は杉並の言葉に苦笑いを浮かべると杉並は律の出した答えを聞いて満足そうに笑うと、

「一先ずは先に行ってってくれ。俺は俺でやるべき事が……」

「杉並君、どうして、校内放送を私用で使うんですか!?!」

杉並の言葉の途中で音夢が再度、杉並を止めに入るが、

「朝倉妹、同志響が話したい事があるそうだ。音楽室に行くぞ」

「えっ!?! ちょ、ちょっと、杉並君?」

どつちやら、音夢は杉並に首を捕まれ音楽室に向かい引きずられて行ったように思える。

「……音夢の奴、完全に遊ばれてるな」

「そつっすね」

律は校内放送から聞こえる音夢の声にため息を吐くところりは隣で苦笑いを浮かべる。

「ちよつと、音楽室まで付き合ってくれるか？」

「……大丈夫なんですか？」

ことりは律が何を話そうとしているか予想がついてるようで、心配そうな表情をするが、

「ああ、大丈夫だ」

「わかりました。行きましよう」

律は心配するなど優しげな笑みを浮かべるとことりは頷き、2人は音楽室に向かう。

律とことりが音楽室に着くと、純一、杉並、音夢、知子、加奈子と律と仲の良いクラスメートと何故か美春が待っている。

「悪い、遅れた……何で、こいつがここにいる？」

律はそう言つと頭を下げるが、美春に気づき、美春を指差す。

「美春がいたらいけないんですか？」

「関係ない奴は出て行け」

「何ですか!？」

美春は律の言葉が不満のようだが、律はあっさり和美春の言葉を却下すると美春は律の対応が不満だと声をあげる。

「なあ、音夢、あの2人は知り合いなのか？」

「私を知る限り、昨日、知りあっただけで、特に繋がりはないと思いますけど」

純一は音夢に律と美春の関係を聞くと音夢は苦笑いを浮かべて、あまり関係ないと言つと、

「同志響よ。わんこ嬢などほっておいて本題に入らないか？」

「こいつは関係ないだろ。何で、こいつに話さないといけない」

「それもそうだな」

杉並は早く始めようと言うが律は美春は関係ないと言うと杉並は頷き、

「朝倉妹、わんこ嬢はお前の管轄じゃないか。追い出してくれないか？」

「美春、大事な話みたいだから、ちょっと、出ててくれる」

杉並は口調は普通だが美春が邪魔だとはつきり言い、音夢はため息を吐きながら美春に席を外して欲しいと言う。

「どうしてですか！？ 美春だけ仲間はずれですか？」

「少なくとも俺とお前は友人でも何でもない」

しかし、美春は納得がいかないと叫ぶが、律は美春の相手をするのが嫌になってきたようで疲れたようなため息を吐くと、

「酷いですよ。やっぱり、冷血人間です」

「冷血人間で良いから、さっさと出て行け」

「ねえ。響君、別に1人くらい増えても」

美春は律を非難するが、律は本当に美春が邪魔なようで彼女を追い払うように手を払うと加奈子は美春が哀れに見えたようで律に向かい言うが、

「ここまで、言われて話すほど俺は大人じゃない」

律は美春に聴かせる気はない。

「美春、何で、そこまで話を聞きたいんだ？」

話が進まないと思ったのか純一が美春に聞くと、

「美春1人だけ、聞けないのは嫌じゃないですか」

「お前はそんなくだらない理由で人のプライベートの話に首を突っ込む気か？」

美春のここにいたいと言う理由はくだらなく、純一はため息を吐くが、

「でも」

「律がここまで人を集めて話すつてくらの話しなんだ。律にとって重要な話なんだろ。それなのに、昨日会ったばかりのお前が首突っ込む権利があるのか？」

「朝倉の言うとおりだな」

美春は納得がいかない顔をし、純一と杉並は美春に出て行くように言う。

「音夢先輩、朝倉先輩と杉並先輩が美春の事をいじめます」

「ちよつと、美春!？」

美春は味方を作ろうと首夢に抱き付き、

「……………話が進まない」

その様子を見て、律はため息を吐く。

「……もう良い。好きにしろ」

いつまでも出て行かない美春を見て、律は諦めたように言うと、

「良いんですか？」

「その代わりに、今日聞いた話を他に軽々しく話してみる。一生バナナが食べないようにしてやるからな」

美春は嬉しそうに律に聞き返すが律はバナナを人質？に取り、美春はその言葉に震えあがり、

「絶対に他言しません!？」

「どうして、響君がそんな事知ってるんですか？」

美春の弱点を律が上手く突いたのを見た音夢は苦笑いを浮かべながら律に聞く。

「ああ。前に杉並から聞いた」

「そ、そうなんですか」

律は以前に杉並に聞いたと言うと杉並は悪戯な笑みを浮かべており、音夢はため息を吐く。

「それで、律。どうして俺達を呼び出したんだ？」

「ああ……」

純一はようやく話が進むと思ったようで律にこのメンバーを集めた理由を聞くと律は真剣な表情をして、自分が昔、音楽の世界にいた事、自分の左手の傷を含めた音楽の世界を捨てた事を話す。

「それが前に話していた『逃げ出してしまったもの』ですか？」

「ああ」

「……そうですか」

音夢は律の言葉に以前、律が話していた事を覚えていたようで聞き返すと律は頷き、そんな律の様子に周りは静かになっている。

「……どうして、俺達に言う気になったんだ？」

「いつまでも、目を逸らしてはいけなと思った。この島に来て、純一や杉並、音夢、白河、森川、佐伯……みんなに出会って、自分の中に生まれた新しい音、とうさんやかあさん、あの世界で生まれていた音。やっぱり、俺は音楽が好きなんだと」

純一は沈黙のなか誰もが聞きたいであろう律が自分達に律の過去を話した理由を聞くと律は恥ずかしそうに笑う。

「それは……」

「あつちに戻るって事？」

律の言葉に知子と加奈子は律が初音島を出て行くと思ったようで、目を伏せながら聞くと、

「まだ、そこまでは考えてない。1度、逃げだした人間を簡単に認めてくれるほど甘い世界でもないからな」

律は苦笑いを浮かべる。

「なら、どうして？」

「意味を聞かれても困るけどな。ただ、俺が前に進むためにここに
いるメンバーには聞いてもらいたかった」

「……前に進むために？」

「そう言う事だ」

律の表情に純一が聞き返すと律は前に進むための決意を聞いて欲しかったと言い、

「それで、こんな事を言うのも悪いんだけど、俺が前に進むために
もう少し時間をくれないか？」

改めて、まだ話したい事があるようで頭を下げる。

「何をするつもり？」

「今、お前らの前でピアノを弾かせて欲しい」

知子は律の様子に聞き返すと律は真っ直ぐとここにいるメンバーを

見据えて言う。

「それだけですか？」

「ああ……昔、俺の音を聞こうともしなかった奴らのためじゃなく、こんな無愛想で、何を考えているかわからない奴を仲間だと言ってくれたみんなのために」

律は視線を逸らす事なく言うと純一は律に近づき律の頭に手を当てると無造作に律の頭を撫で、

「何をする？」

「そんな事、改まって言うんじゃないよ。お前は俺達の仲間なんだ」

「……ふっ」

律は純一のいきなりの行動に聞き返すと純一は自分の行動が少し恥ずかしかったようで律から目を逸らして言い、そんな2人の様子を見て杉並は笑う。

「それじゃあ、遠慮なく聴かせて貰おうかな」

「そうだね」

知子と加奈子は頷きあい、律の思うようにして欲しいと言うと、

「ああ」

律は頷き、ピアノの前に座ると演奏を始めていく。

……

……

……

…

「すげえ」

「やっぱり上手いよね」

「ブランクはあってもプロだからな」

律の演奏が終わり、周りが感心しているのを見て、

「どうだ？」

「えーと、なんて言ったらわからないくらい感動しました。ってこんなんじゃない感想にならないですよね」

律は満足できる演奏ができたようで笑みを見せて聞くことよりは律の演奏に対する感想が上手く伝えられないようである。

「前に言っただろ。音楽つてのは『音を楽しむ』って書くんだ。ただ、この音を楽しんでもらえたか。感想なんてそんなもんで良い」

「それなら、最高に楽しかったです」

律はことりの様子に柔らかい笑みを浮かべて言うと、ことりはビシッと親指を立て、

「それじゃあ、俺の演奏はこれで終わりだから、次はお前らに最高の音楽を聴かせて貰おうかな？」

律はことり、知子、加奈子の3人を見て、少し意地悪な笑みを浮かべて言うと、

「これってプレッシャーだよな」

「うん」

「あはは」

3人は律の演奏を聴いた後に、この後、自分達のバンドを律に聴かれる事を考え苦笑いを浮かべるが、

「大丈夫ですよ。先輩達も、響先輩に負けなくらい自分達の音楽を楽しめば良いんですから」

「そう言う事だ。よく出来たな」

美春は律の言葉を借りて3人を応援すると律は美春の頭を無造作に撫でる。

「な、何をするんですか!？」

「関係ないお前が、俺の演奏をただ聞きしたんだ。本来なら金を取っても良いものだぞ。これくらいはさせる」

「因みに、同志響の以前の生演奏の値段は……こんなものだな」

律のいきなりの行動に美春は律に文句を言うが、律は当然の権利だと言い、杉並は何かを企んだように笑い電卓を叩き、美春に見せると、

「い、いくらでも撫でまわして下さい!？」

予想以上の金額だったようで美春は叫ぶ。

「さてと…点集まってもらって悪かったな。俺の用事は終わりだ」

「悪いな。次は俺の用事に付き合って貰おう」

律は自分の用事は終わったと音楽室から出ようとするが、杉並は笑顔で律の肩を掴む。

「……何だ？」

「もうすぐ、昨日のベストカップルコンテストの結果発表だろ？」

「……断る」

「白河嬢」

「はいっす」

杉並とことりは2人で律をつかみ、律を引きずって行き、

「律も大変だな」

「そうですね」

3人の姿を見送ったメンバーは苦笑いを浮かべる。

「……ったく」

「そんな顔をしなくても良いじゃないですか。せつかく特別賞も貰えたんですから」

「んなもんいらねえよ。だいたい、表彰だけなら俺が出る必要ないだろ」

律が不機嫌そうな表情で舌打ちをしている隣でことりはベストカットブルコンテストの特別賞の賞品を手にして嬉しそうな表情をしている。

「人前に入る事を嫌がったら、人前で演奏なんかできませんよ」

「……別に、人前で弾く事になるかは決めてないし、今はそんな気分でもない」

「どう言う事ですか？」

ことりは律が居なくなってしまう時の事を考えてしまったようで少し表情を曇らせて言うが律はまだ元の場所に戻る気はないのかため息を吐くと律の言葉の意味がことりには理解できなかったようで聞き返すと、

「別にプロに戻るとは決めたわけでもないしな。このまま趣味で続けるのも楽しいし、プロを目指す人間やピアノを弾きたいって奴らに教えるのも悪くない」

「そうですねか」

律は吹っ切れているのかこの先の事はゆっくりと考えて行くと言い、律の言葉にことりは嬉しそうな表情をすると、

「それじゃあ、行きましょう」

「……………どうして、俺がお前と一緒に歩かないといけない？」

律の腕を掴み歩きだそうとするが律はことりの行動に疑問の声をあげる。

「まあ、良いじゃないですか」

「よくねえよ。じゃあな」

律はことりを引き離すと1人で歩いて行き、

「ちょっと、響くん!？」

「少しゆっくりさせる。色々あって疲れたんだよ」

「……………わかりました」

ことりは律の名を呼ぶが律は振り返る事なく歩いて行き、ことりはしびしびながらも頷く。

(……………さてと、どうするかな? 飯も食ってないしな。どこかで…)

…)

「響先輩、チヨコバナナ奢って下さい」

(……俺が奢る理由はないな。だいたい、俺にはこいつの相手をする理由がない)

「無視しないで下さいよ!!」

律はことりと別れて暫く歩いていると律に向かい美春が何かを言っているが律は美春を無視して通り過ぎようとするが美春は律の腕を掴む。

「……どうして、俺がお前に奢らないといけない？」

「そこにチヨコバナナがあるからです!!」

律の当然の美春の様子に頭を押さえながら当然の疑問を口に出すと美春は拳を握り答えるがその答えは答えになっておらず、

(……こう言う変なものには関わらない方がいいな)

「どうして、置いて行くんですか!？」

律は美春を置いて歩き出そうとするが美春は不満そうに声を上げる。

「……さっきも言ったが、どうして、俺がお前に奢らないといけない?」

「先ほども言いましたけど、そこにチヨコバナナがあるからです!

「！」

律はため息を吐くと改めて美春に奢る理由はないと言うが美春は律に奢らせる事しか考えていないようで拳を握りしめて答え、

「…………お前の管轄は音夢だろ。俺にたからずに音夢のところに行け」

「音夢先輩にご迷惑がかかるじゃないですか？」

「知りあつたばかりの人間に奢らせる方が迷惑だろ」

「お金持ちなんですから、チョコバナナの1本や2本、3本や4本、5本や6本…………」

「いくつ奢らせる気だよ」

律は眉間にしわを寄せて音夢の元に行けと言うが美春は聞きいれる様子はなく、律は何か色々諦めたようにため息を吐くと、

「…………チョコバナナじゃないとダメなのか？」

「それなら、バナナパフェが良いです」

律は諦めたようで美春に他のものにいると言うと美春は遠慮する事はなくもっと高いものを奢らせようとする。

「それは喫茶店にでもあるのか？」

「そうです。本校の方で目玉のメニューになってると噂が」

「……俺も昼食ってないからそこに連れてけ」

「ラジャーです」

美春は興奮気味に答えると律は諦めたように言い、美春は律を引っ張り、喫茶店に連れて行くこととするが、

「響先輩、目つき悪いからメガネかけて下さい」

「……また、これがよ」

美春は律にメガネをかけ、律は美春に引きずられながらため息を吐く。

喫茶店

「バナナパフェを2……」

「バナナパフェ1つと、サンドイッチ、ホットコーヒー、オレンジジュース」

喫茶店に入るなり、美春はずうずうしくも直ぐに注文をしようとし、律は彼女の口を塞ぐとメニューを選び、店員が離れるのを見て律は彼女の口から手を放す。

「何をするんですか!？」

「……それは俺のセリフだ」

美春は律の行動に声を上げるが律はいきなり人の金でバナナパフェを食い散らかそうとした美春を睨みつけるが、

「何で、睨むんですか？」

「普通の反応だろ」

美春は律が睨みつけた理由がわからないようで首を傾げ、律はそんな彼女の様子にため息を吐く。

「それで、何かようか？」

「よっ?」

美春は本当に律にチョコバナナを奢らせるためだけに来たようで、律は美春の行動に呆れたようで頭を押さえため息を吐く。

「何ですか? そのため息は、美春をバカにしてるんですか?」

「……呆れてるんだよ」

美春は律の様子に頬を膨らませるが律は疲れたのか肩を落とす。

(やれやれ)

「何かおかしいですか?」

しばらくして料理が運ばれてくると美春は嬉しそうにバナナパフェを食べ始め、その姿を見て律は苦笑いを浮かべていると美春はパフェを口に運びながら首を傾げると、

「いやな。白河や音夢もそうだが、よくそんな無駄に甘いものが食えるな」

「美味しいですよ」

「……そうか」

「……響先輩もそう言う顔できるんですね」

嬉しそうな美春の表情に律は少しだけ優しげな笑みを浮かべると美春は律の表情を見て驚いたような表情をするが律はその言葉に意味

がわからないように首を傾げる。

「いつも仏頂面をしてるって印象ですから」

「……悪かったな」

「そんな表情を白河先輩にも見せてあげればいいんですよ」

美春は律がいつも不機嫌そうな表情をしているのは良くないと言うと律はいつもの不機嫌そうな表情に戻るが、美春はことりの前でもう少し笑顔を見せてやれと言うと、

「……何で、お前にそんな事を言われなはいけない？」

「だって、白河先輩が響先輩の事を好きなんて誰が見たってわかる事じゃないですか」

「本人が自覚したのは昨日か今日だろうけどな」

律は美春に言われる事ではないと言うが美春は恋愛話に興味があるように食い付くように言うと言律はことりが自覚したのも気づいているように表情を変える事なく答える。

「そうなんですか？」

「たぶんな」

「白河先輩も朝倉先輩の同類何ですね」

「純一は鈍い訳じゃないと思うけどな」

美春が何かを悟ったようにことりは純一と同じで鈍いと言うが律は純一を美春とは違う評価をしているため苦笑いを浮かべるが、

「どう言う事ですか？」

「お前が首を突っ込む事じゃねえよ。俺は行くからな」

律の言葉の意味がわからない美春は首を傾げ律に聞き返すが律は伝票を手に持ち席を立つ。

「ちょっと、待って下さいよ」

「人の奢りなんだから味わって食え」

その姿を見て美春は声をあげるが律は会計を済ませて喫茶店を出て行く。

屋上

律は美春と別れた後、時間を確認するがまだことり達の演奏の時間には早く、1人になりたいと思い屋上で空を眺めている。

(……あいつらにはまだ考えてないと言ったが……前に進んで決めたんだよな)

律はポケットから携帯電話を取り出すとアドレスから両親の電話番号を選び、

(……戻るとしても、このままでも、1度、連絡は入れるべきだよな)

疎遠なままの両親の電話番号を表示するが踏ん切りがつかないのか携帯電話を睨みつけていると、

(……どうするかな?)

「響君、何をしてるんですか?」

「……お前こそ、こんな所で何してるんだよ」

音夢が律を見つけて声をかけてくるが律は音夢を見てため息を吐き、携帯電話をポケットの中に戻す。

「どうして、人の顔を見てため息を吐くんですか?」

「……お前のせいで、わんこに捕まったからだ」

「美春がどうかしたんですか？」

「ああ……」

音夢は律の言葉が気に障ったようで口を尖らせながら言うが律は先ほどの美春とのやり取りを思い出したようでもう一度ため息を吐くと音夢は首を傾げるため律は美春とのやり取りを話すと音夢は苦笑いを浮かべる。

「と言う事だから、俺に用事がないならどこか行ってくれ」

「せっかくなので、少しお聞きしたい事があります」

律は考え事があるため、音夢を追い返そうとするが音夢は律話があるようで律の隣に座る。

「……何の用だよ」

「響君の性格上、遠まわしに聞いても答えてくれないと思いますから単刀直入に聞きます。響君はどうするつもりですか？」

「……何がだ？」

話があると言う音夢に律が聞き返すと音夢は真っ直ぐと律の瞳を見て、律のこれからの事を聞くと律は音夢に何を聞かれているか予想は付いているがあまりこの事には関わって欲しくないため首を傾げて知らないふりを決め込もうとするが、

「プロの世界に戻るかはまだ考えていないと言ってましたけど、本当はどうしたいんですか？」

音夢は視線を逸らす事なく、律に真意を聞こうとする。

「……………保留じゃダメなのか？」

「ダメです。保留で良いと言うと、響君の場合は自分一人で決めて勝手に初音島からいなくなりそうですから」

律は一先ず保留にして逃げようとするが音夢は律の考えなどお見通しと言いたげに言い、

「……………たく……………正直、迷ってる。ここにいたいと思う自分とあの場所に戻りたいと思う自分がある」

律はもう1度ため息を吐くと少し間を開け、本当に悩んでいるようでその言葉には重みがあり、音夢は律の言葉を聞き逃さないようにしている。

「ここにいれば、今の自分が好きな音を奏でる事は出来ると思う。でも、それは……………」

「……………逃げたままだから？」

「……………あ。前に進むと決めたからには、去の自分と向き合わないといけない。それが出来ない俺は本当に前に進めないと思うから」

「迷ってるって言うって答えは出てるんじゃないですか」

「まあ、そつだな」

律の言葉に音夢は苦笑いを浮かべながら答えは出ていると言つと律は苦笑いを浮かべながら頷く。

「響君の事だから、何も言わずにいなくなりそうなので先に言っておきます。さよならは言いませんよ。また会えると信じてますから」

「……ああ。俺も戻つて来るつもりだから何か言つてくつもりはないが、人の背中を押しに来たおせっかいな兄妹に言っておこうか。きちんと自分の気持ちに向き合え、逃げるな。1度、逃げて遠回りした男からの忠告だ」

律はくすりと笑つと音夢以外に屋上のドアのところに隠れているであろう人間に聞こえるように言つと、

「そろそろ、白河達の演奏の時間だから行くぞ」

「はい」

律は立ち上がりことり達の演奏を聴きに行くと言い、音夢は頷くと律の隣に並び、2人で屋上を後にする。

(……終わったな。良い演奏だ。あいつらには悪いけど、今日はそんな気分じゃないしな)

「どこに行く気だ？ MY同志響よ」

はことり達の演奏を聴き終え、会場から離れて学園祭が終わる前に帰路につこうとすると杉杉並がどこからか現れて律に声をかける。

「……見りゃわかるだろ。帰るんだよ」

「白河嬢やクラスの奴らに何も言わずにか？」

律は杉並の登場にため息を吐くと杉並は真面目な表情をして律を真っ直ぐに見ると、

「悪い。何か適当に誤魔化しといてくれ」

「誤魔化しても何をしてるかバレバレだろうがな」

「だろうな。それでも、先にやるべき事は終わらせないといけないからな」

律は杉並は何も言わなくても自分が何をするつもりかわかっていると思っっているため、適当にやっておいてくれと言つと杉並はニヤリと笑い、律は杉並の表情に肩を落としてため息を吐く。

「前に進むと決めた割にずいぶんとしんどそうだな」

「当たり前だ。立ち止まってるより、前に進む方が体力を使うんだよ。後は……こいつと向き合うのみな」

律は苦笑いを浮かべると左手の傷を杉並に見せると杉並はそれ以上は何も聞かずに頷き、

「お前のクラスの奴らと白河嬢には伝えておくが、クラスの奴らはまだしも白河嬢がどう動くかは俺にはわからんぞ」

「それをどうにかするのがお前だろ？」

杉並はことりはどう動くかはわからないと言いたため息を吐くが律は杉並の顔を見て苦笑いを浮かべ、

「頼むぞ。親友」

「ふっ、こんな時によくそんな冗談が言える」

「俺は素直じゃないからこんな時くらいしか言えないんだ」

杉並の肩を叩くと杉並はため息を吐くが律は苦笑いを浮かべたまま言った後、真剣な表情をすると、

「……本当にここにきて良かったと思う。お前や純一、音夢がそばに居てくれてどれだけ救われたか。だから、お前らが納得する答え出して来ようと思う」

「そこには白河嬢は入らないのか？」

「どうかな？俺にもよくわからない。あいつが背中を押してくれた事は確かだけだな」

杉並は律の言葉に優しげな笑みを浮かべてことりの事を言つと律は困つたように笑う。

「少しそのことも考えて見ると」

「その時には白河嬢の隣には誰かがいるかも知れないぞ」

「その時はその時だろ……まあ、その時は、な」

「まあ、お前が何を考えているかは気付かないふりをしておこう」

律の言葉には何か他意があるように言つのを見て杉並はニヤリと笑い頷き、

「それじゃあ、後を頼むぞ」

「ああ」

律は後を杉並に任せて学園を後にする。

(響くん、聴いてくれたよね)

ことりは演奏を終えると、急いで舞台裏に下りて律を探しに行こうとすると、

「ことり、響君を探しに行くの?」

「そ、そんな事はないですよ」

「ともちゃんもことりで遊ぶのやめなよ」

知子はことりの様子を見てニヤリと笑い、ことりは否定するがその声は裏返っており、2人の様子を見て加奈子は苦笑いを浮かべる。

「ことり、ここは良いから響君のところに行って来なよ」

「良いの?」

「良いから、良いから」

「その代わりに、1つ貸しだからね」

「了解っす」

加奈子と知子はことりに律を探しに行けと言い、ことりは2人の気づかずに笑顔を見せて律を探しに行く。

(響くんはどこにいるかな? ……いない? 響くん、聴いてくれなかったのかな? 教室に戻ったのかな?)

ことりは会場から出ると律を探して歩くが学園を出て行った律が見つかるわけもなく、教室を見に行こうとした時、

「白河、響なら帰ったぞ」

杉並がことりに向かい声をかけてくる。

「杉並君、響くんが帰ったって、どういう事ですか?」

「そのままだ。白河達の演奏を聴いて直ぐにな」

「そうですか」

「杉並君、教えてくれてありがとうございます」

「白河、どこに行くつもりだ?」

ことりは杉並に律が帰った事を聞いて残念そうな表情をした後、杉並に頭を下げて律を追いかけようとするが杉並はことりを呼び止め、

「どこにっつて……響くんの家に」

「今、響の家に行くのは止めてくれ」

「どっしっつてですか?」

杉並は彼にしては珍しく真剣な表情でことりに律の元に行くのは待ってくれと言うと杉並の真剣な表情にことりは一瞬怯むが杉並に聞き返す。

「簡単な事だ。あいつは今、真剣に自分と向き合おうとしている。自分の過去と両親と」

「……でも」

「もし、あいつが元の道に戻る決心をした時、白河はどうするつもりだ？ 引き留める気か？ それとも見送る事が出来るか？」

「それは……」

「どうするか決めかねているのなら、お前は響の元に行くべきではない」

杉並は今のことりは律の元に行くべきではないときっぱりと言い切るが、

「でも、会いたいんです!!」

「……失敗か。まあ、頑張るんだぞ」

ことりは彼女にしては珍しく声を荒げると、杉並に背を向け走り出し、杉並はことりの背中を見送ると何かを考えているのかニヤリと笑う。

(……やっぱり、会って話すべきなんだよな？ ……ってなると、バイトのシフトいじって貰わないといけないよな)

律は家に向かう途中に両親には会って話をしてこないといけないと
考え、花より団子に足を向ける。

『あれ、響君？ どうしたんだい。今日は学園祭だろ』

「すみません。少し相談したい事が有りまして」

『相談？ 響君が？ 珍しいね。お茶を用意するから座って』

「いえ、そこまでは」

『良いから、良いから』

律が花より団子に着くと店長が律を見つけて声をかけると律は店長にバイトのシフトを調節して貰う事を頼もうとすると店長は滅多にない律からの相談に話が長くなると思ったように律に座るように言う
と律と自分の分のお茶を取りに奥に入って行く。

「ありがとうございます」

『それで、相談したい事って？』

「それなんですけど、暫く、休みを頂きたいんです」

律は店長からお茶を受け取ると店長は律の向かいに座り、律の相談の内容を聞き、律は真剣な表情をしてバイトを休ませて欲しいと頭を下げると、

『どづいづ事？』

「えーと、音夢は知ってるんで隠しても仕方ないと思いますから」

店長は毎日のようにバイトに入ってくれていた律の言葉に首を傾げ、律は店長に『自分が初音島に来た理由』、『自分の両親の事』。そして、『両親と会って話をしてきたい』と言う事を話す。

『……そうかい。内容が内容だけに、私にそれを止める事はできないね。君には前に大変だった時に無理して貰ったしね。それ位の頼みごとなら、私は構わないよ。むしろ、しっかりと話をして、『自分の進むべき道』を決めなさい』

律の話に店長は頷き少し考えるような素振りを見せるが律の事を真剣に考えてくれているようで優しい笑みを浮かべて真っ直ぐと律を見つめると、

『その時、ここを辞める事になった時は、私は君を応援する……違うね。ここで働いている人間は全員君を応援する』

「……ありがとうございます」

店長は律の事を応援すると言い、その言葉に律は頭を下げる。

『私は音楽の世界の事は良くわからないけど、君がこの島に来て体験した事は君がどの道を進むとしても、きっと君にとってプラスに

なる』

「そつだと思ひます」

『ご両親に会いに行く日程が決まったら、教えてくれるかい？ それから、シフトの調整するから、バイトで1番、働いてくれる響君が抜けるならばはらはは忙しくなるな』

「すみません。ご迷惑をかけます」

店長はもう1度、律を応援すると言つと律に詳しい予定が決まったから教えて欲しいと言つと言ひ、律は改めて店長に頭を下げる。

(……杉並の野郎、しくじりやがったな)

律は花より団子で話を終え、家の前まで歩くと、昨日と同様にことりが家のインターホンを押そうか悩んでいる。

「……お前は2日続けて人の家の前で何をやってやがる？」

「響くん！？ どうして、後ろから？」

「俺にだってよるところはあるんだよ」

律はため息を吐きながらこどりの背後から話しかけるとこどりは律はすでに家の中にいるものと考えていたようで後ろから来た律に驚きの声をあげるが、律はこどりの反応を気にする事なく家の鍵を開けると、

「用がないなら帰ってくれるか、俺はこれからやる事があるんだ」

「響くんはやっぱり、初音島から出て行っちゃうんですか？」

「さあな。まだ、俺にもわからん」

「へ？」

時間はないと言い、こどりに帰るように言うがこどりは1番気になっている事を少し言葉を濁しながらも聞くと律はまだ答えを出していないためわからないと答えることどりは律の心の声を聞くが、律

の言葉通りまだ決まっていないうであり、彼女の表情は予想外の事にきよとんとしている。

「何だ？」

「杉並君の話だと、もう戻ることを決めているように思ったから」

律はことりの表情に眉間にしわを寄せて聞くところりは慌てて聞か、

「決めたのは両親と話をするって事だ。そつから先はまだ考えてもない。よく考えてみる。ガキの頃に稼いだ金はしつかり俺名義になつてるし、この家を買うのだから特に面倒な手続きとかはなかつたんだ。冷静になつてみれば、しつかりとうちの両親はやることやつてるんだよ」

「そう言えば、そうですね」

律の頭は両親と話すと決めてからは冷静に動きだしているようであるが、息交じりで答えるとその言葉にことりは頷き、

「そこら辺をしつかり聞いてこようと思つてな。ガキな自分を受け入れるために、それを終わらせないと前に進めないだろ？ 用はそれだけか？」

「は、はい。そ、それなら、私、帰りますね」

律は苦笑いを浮かべるがその瞳は凄く穏やかで彼の中にあつた両親へのわだかまりが薄れている事がわかり、ことりは律の顔に何も言えなくなつてしまつたようで頷き、律に背を向け逃げ出すように帰

ろうつとするが、

「あっ！？ ちょっと待て」

律はことりを呼び止める。

(……まさか？ いや、そんな事は、でも、もしもって事が)

ことりは律に呼び止められた事で少し何かを期待しながらが振り返り、

「何ですか？」

「飯食ってけ」

律に自分を呼び止めた理由を聞くが律の答えはことりが期待しているものとは異なるものである。

「……………はあ」

「何だ？」

「いえ、響くんに期待した。私がバカでした」

「……………意味がわからん」

ことりは律の言葉にため息を吐くと律は眉間にしわを寄せながら首を傾げるとことりは残念そうに言い、律は納得がいかなさそうに頷くと、

「それで、どうするっ？」

「ごちそうになりますけど……」

「けど、何だ？」

「どうして、私を夕ご飯に誘ってくれたんですか？」

もう1度、ことりに夕飯を食っていくかと聞き、ことりはまだ何かを期待しているようで律に自分を夕飯に誘った理由を聞くが、

「昨日、お前んちで飯を食ったせいで、いくつか賞味期限が切れそうなものがあるんだ。無駄にするのはもったいない」

律は本心から言っているようで、心の声も変わらずにそう答え、ことりは律の心の声を覗いて残念そうに肩を落とす。

「別に嫌なら無理しなくて良いぞ。純一と音夢でも呼ぶから」

「ちょっと、待ってくださいよ!？ ごちそうになりますよ」

律はことりの態度に、ことりは一緒に夕飯を食べる事に気乗りがしてないと感じたようで律は家の中に入ろうとするとことりは慌てて律の後を追いかけて律の家に入り、

「お邪魔します」

「わざわざ、そんな事を言わなくても良い。俺は着替えてくるから……ほら、家に電話でもかけておけ。お前が帰らないと白河先生がうるさいからな」

「あっ！？ はい」

ことりは律の家に入ったため、改めて、律に頭を下げるが律は気にする必要はないと言い、ことりに自分の携帯電話を渡すと、

「勝手に部屋にあるもんを弄るなよ」

「そんな事しませんよ」

「まあ、お前はそんな事はしないか」

着替えるために自分の寝室に入って行く。

「そろそろ帰りますね」

「ちょっと待て」

「送ってくれるんですか？」

律の作った夕飯を食べた後、しばらくするとことりが家に帰ると言う。律はことりを呼び止め、ことりは律が自分を家まで送ってくれ、と思うたように律に向かい聞き、

「ああ、送ってやるが、その前に1曲弾きたい気分なんだが、聴かないか？」

「良いんですか？」

律はピアノを弾きたい気分だと言う。ことりは嬉しそうな表情をして聞き返すと、

「誰かに聴いて貰いたい気分なんだ……どうする？」

「聴きたいです」

律は柔らかい笑みを浮かべて言う。ことりはすぐに演奏を聴きたいと答え、

「それじゃあ、こっちに來い」

「凄いですね」

律はことりをピアノのある部屋まで連れて行くと、ことりはその部屋に入るなり、驚きの声をあげる。

「そうか？」

「凄いですよ。ピアノだけじゃなくて他にもこんなに楽器が」
律はことりが何に驚いているかわからないのか首を傾げると、ことりは律がもっている楽器の数を見て驚いているおり、

「響くんはこれ全部を弾けるんですか？」

「まあ、最近は弾いてないものも多いから、どれだけ腕が落ちてるかはわからないけど……それで、良いか？」

「はい」

律は苦笑いを浮かべながらピアノの前に座り、ことりに演奏を始めて良いかを聞き、ことりが頷くのを見て律はピアノの演奏を始める。

……

……

……

……

「どつだ？」

律は演奏を終えることりに感想を聞くが、ことりは感動しているのか上手く感想を伝えられないようである。

「今日も言っただろ。変にかっこつけたような感想はいらない」

「凄く良かったです。聴いた事ない曲でしたけど、なんて曲ですか？」

律はことりの様子に苦笑いを浮かべて言うことりは律の演奏した曲が気になるのか律に向かい聞くが、

「ん？名前なんか決めてねえよ」

「名前がない……こ、これ、響くんが作ったんですか！？」

律は自分で作曲した曲のために名前はないと言いことりは律の言葉に驚きの声をあげると、

「悪いか」

「悪くなんてないですよ。凄いです。感動しました」

ことりは本当に本当に驚いているようで律の先ほどの演奏を思い出しているようである。

「そうか……ほら、そろそろ、行くぞ。あんまり遅くなると俺がまた白河先生に睨まれる」

「あっ！？ は、はい。お願いします」

律はことりの反応の大きさに苦笑いを浮かべながら頷くとことりに送ると言うことりは頷き2人でことりの家に向かい歩き出す。

「どうして、あの曲に名前を付けないんですか？」

「別に遊びで作ったような曲だしな……ん？」

ことりを送る途中にことりは先ほど律の弾いた曲について聞くと律はそこまで名前を付けるようなものでもないと思っっているように首を傾げるがことりの顔を見ると、

(……そう言えば、あの曲の原案って、こいつと会った日に出来たような。まあ、あの曲と合っていると見えなくてもないか?)

ことりに聴かせた曲がことりと初めて会った日にできた事を思い出すとことりはなぜか顔を赤らめ黙ってしまう。

「どうした？」

「な、何でもないです!？」

「そうか」

律はことりの様子に首を傾げるとことりは慌てた様子で答え、律はことりの様子を見てそれ以上は何も聞く事なく頷くと、

「そ、そう言えば、響くん、ベストカップルの特別賞ってどうしま
す」

「結局は何が当たったんだ？」

ことりは話を変えようと律の名を呼ぶと2人が受賞したベストカットプルコンテストの特別賞について律に聞くが、律は特別賞の賞品を見てないためことりに聞き返す。

「さくらパークの無料ペアチケットです。いつ行きます？」

「俺は行かないから、誰か友達でも誘え」

ことりは律と一緒に行くこと前提で律に向かい聞くが律は興味がないううであっさりと言い切り、ことりは不満そうな表情をすると、

「何だ？」

「2人で貰ったんですよ。2人で行きましょうよ」

ことりは不満そうな表情で律と一緒にさくらパークに行きたいと言
うが、

「俺は行きたくない」

「……響くん、私とお出かけるのは嫌ですか？」

律にはまったく行く気はないと言い、ことりは残念そうな表情で律
に向かい聞く。

「人ゴミが嫌いなんだ。だいたい、休みの日にどうして疲れに行か
ないといけないんだよ」

「若くないですよ。それに、明日は学園祭の振り替えで休みじゃないですか。明日なら、お客さんも少ないんじゃないですかね？」

律はため息を吐きながら人ごみは嫌いだと言うとことりは不満げな声をあげて言うが、

「明日はバイトを入れてる」

「そうなんですか……」

律はあっさりと言い切り、ことりは律が嘘を吐いてないと思ったように残念そうに言う。

「諦める。ほら、さっさと行くぞ」

「……はい」

律は自分の考えを変える事はなく、ことりは納得がいかないような表情をしているが律はことりを気にする事はなく先を進むと、

「待ってくださいよ!?!?」

ことりは慌てて律の後をついて歩く。

(……どうするかな?)

律は両親に会いに行った時に演奏会の手違いによりピアニストが足りず、コンサートに出てしまい『神童復活』と言う話題が世間では噂され始めており、律は屋上で空を眺めており、

(やっぱり、とうさんとかあさんには悪いけど、弾くべきじゃなかった……授業って気分でもないし、サボるか?)

気分がならないようでサボる事を決めると屋上に寝転ぶ。

「周りに騒がれるのはうざったいが……やっぱり、楽しかったんだよな」

「響、お前はこんなところで何をしているんだい？」

律は左手のキズを眺めると演奏の時に奏でた音、両親や多くの演奏家の人々と作りあげた演奏が楽しかったようでつぶやくと、屋上に煙草を吸いに来たのか暦が煙草に火を点けながら律の名を呼び、

「……白河先生、少し考えたい事があったんで」

律は暦を見るが見つかった事に慌てるような事はせずに答える。

「そうかい。だからと言って、授業をサボるのは感心しないね」

「授業を受けるよりも大切な事もあるんですよ」

暦は律の様子に何か思ふ事があるようで頭ごなしに怒るような事はせず、ため息を吐くが律は興味無さそうに言つと、

「それを教師の前で言うかい？」

「言います。少なくとも、この問題は授業をいくら受けても答えは出る事はないですから」

暦は律の態度に呆れたように言つが律は授業に戻る気はないと言ひ、

「あんたねえ」

暦は律の言葉に頭を押さえた後、

「それで、何を悩んでるんだい？」

律に向かい悩み事を話せと言つ。

「白河先生に話す義理はありませんよ」

「これでも教師なんだ。話せば何か言えるかも知れないし、何も言えなくても人に話せば考えがまとまる場合もある」

律は自分の問題のため、暦に話す事ではないと言つが暦は引くことなく律に言い返すと、

「……聞いても面白くもないですよ」

「それを聞くのも教師の仕事なんだよ」

暦は視線をそらすこと無く律に向かい言い、

「……仕方ないですね」

律は1度、ため息を吐くと両親と和解してきた事とコンサートで成功を収めてきた事を話す。

「……あんたつて、本当に凄い人間だったんだね」

「別に凄くはないですよ。ただ、ガキの頃から音楽に触れている時間が多かっただけです。その分、先を行ってただけです」

暦は律の過去について、ことりからは聞かされてなかったように驚きの表情を隠せないようだが、律は本心からそう思っているように表情を変える事なく言うと、

「それで、あんたはそこに戻りたいのかい？」

「そうですね……戻りたいんだと思います。両親に会うまでは『いつか戻れたら良いな』くらいで考えていました。でも、とうさんとかあさんと話をして、あの場所に戻ってみて思いました。やっぱり、あの場所が俺の居場所なんだと、あの場所が好きなんだと」

「悩む必要なってなかったんじゃないか。答えは決まっていたんだろ？」

暦は律にこれからどうしたいのかと聞くと律は少しだけ照れくさそうだが決意を秘めた視線で言うとその答えに暦は呆れたようにため息を吐いて律に向かい言う。

「そうですね。相談に乗っていただきありがとうございます」

「あんたらしくないね。気持ち悪いよ」

「そうかも知れませんね」

律は曆に頭を下げると曆は苦笑いを浮かべ、律は曆の言葉を肯定すると、

「帰ります」

「……帰るな」

律は迷いも晴れたようであらゆることに帰ると言うがまだ午前中であり曆はため息を吐くと律を止め、

「何か用ですか？」

「……教師の前で堂々とサボって帰ると言っつな」

律は曆が呼び止めた理由がわからないようであらゆる首を傾げ、曆は律の様子に呆れたようなため息をついた後、

「一つ、聞いて良いかい？」

「それが、白河の事でなければどうぞ」

曆は律に向かい聞きたい事があると言うと律は曆の聞きたい事をこたりの事だと判断したようであらゆる事以外なら答える返事をする

が、

「ことりの事だよ」

「……はあ」

暦は引くわけがなく、律はため息を吐く。

「白河先生は俺に何を望むんですか？」

「何が言いたいんだい？」

律は暦に自分に何を望んでいるのかと聞くと暦は律の質問の意味がわからずに聞き返すと、

「俺はガキです。今までの事を振り返って理解しました。そんな人間が他人の人生に責任なんて持てませんよ」

「それはどういう事だい？」

律はことりの人生など自分には責任は持てないと言い、暦はその言葉に律を睨みつけると、

「そのままです。白河先生は俺がここを離れるとして、あいつを連れて行くことを望みますか？俺にはあいつを守るほどの自信も力もありませんよ。今は自分のことだけで精一杯です。だいたい、俺とあいつはそんな関係じゃない」

律はもう1度、ため息をつくことりと付き合ってる訳じゃないと言っ。

「だからと言って」

「あんまり、重たいものを持たせないようにとしないで下さい。また逃げ出したくなります」

暦はことりの気持ちを大切にして貰いたいように律を睨みつけたまま律に向かい言々と律は困ったように笑い、

「もう良いですね」

律は暦の答えも聞かずに話を終わらせ屋上から出て行く。

(そう言えば、シフトってどうなってるんだ？ 音夢に聞いてから帰るか)

律は屋上を後にして家に帰ろうとするが、両親に会いに行っている間に変更されたバイトのシフトの事を思い出したようで音夢にバイトのシフトを聞くために音夢のクラスに向かう。

(音夢はいるか?)

律が教室をのぞいた時、

「音夢、朝倉、あんた達、あの響律と友達だつてホントなの？」

(……何か、面倒な事になりそうな気がするな。帰る途中でよって帰れば良いか)

1人の女生徒が純一と音夢に律の事を聞いており、律はその様子面倒な事になると考えて逃げだそうとすると、

「何をやってるんだ？ 同志響よ」

「……普通に出来」

「それで、朝倉兄妹に何かようか？」

律の背後から音もなく近寄っていた杉並がわざとらしく声をかけ、律は杉並の登場にため息を吐くが杉並は律の言葉など関係なさそう

に言う。

「……音夢にバイトのシフトの事を聞こうと思ったんだよ」

「そうか。そこで立ち止まってないで中に入れば良い」

律は人の話を聞こうともしない杉並の様子にもう1度、ため息を吐くと特に隠す必要性がないと判断したようで自分が訪れた理由を正直に話し、杉並は律の言葉につまりなさそうな口調で頷くと律を教室内に押し込み、

「杉並!?!」

律は杉並の行動に驚きの声を上げて杉並の名を呼ぶが、

(……あの野郎)

杉並はその場にはすでに居ない。

「響律!?!」

教室に入って来た律を見て、先ほど純一と音夢に話しかけていた女生徒が律の名を呼ぶが、

「音夢、俺がいなかった間に決まったバイトのシフトを教えてください」

「響君、いつ戻ったんですか?」

「昨日だ。それでシフトを教えてください」

律は関わり合いたくないと思ったようでその女生徒を無視して音夢に話しかけ、音夢は律が初音島に戻ってきた事を知らなかったようで聞き返すと律は女生徒の事を無視したまま音夢に自分がここを訪ねた理由を話す。

「もう、バイトに出るつもりなんですか？ 少し休んでも」

「俺の都合で迷惑をかけたんだ。その恩を早めに返したい」

音夢は律の言葉に呆れたような口調でもう少し休むように言うが律は自分の都合で店に迷惑をかけた事を気にしているようで早めにシフトに戻りたいと言うと

「あんだ、どうして、あたしを無視してるのよ？」

「かったるいからだろ」

律と音夢の様子を見て女生徒は自分を無視して話をしている律に文句を言うが純一は律の考えを理解しているようで面倒そうに欠伸びしながら言い、

「朝倉！！」

「真子！？ 止める！？」

純一の言葉に女生徒は純一を怒鳴りつけ拳を握りしめ、純一は女生徒の怒りを静めようと女生徒を呼び、

「音夢、あれに関わると面倒な事になりそうだから、早く教えてくれ」

「響、あんた、あたしをバカにしてるの？」

律はこの場から早く離れたいように音夢に早くしろと言つと眞子と呼ばれた女生徒の怒りは律に向かうが、

「バカにするも何も俺とお前は無関係だ。怒鳴られる言われはない」

律は眞子と言つ女生徒と関係ないから怒鳴られる理由はないと答える。

「……響君、眞子が響君に聞きたい事があるんだって」

「……」

律の言葉に音夢は呆れたようにため息を吐くと女生徒が律に聞いた
い事があると言うが律は嫌そうな表情をする。

「……何か色々と言いたいんだけど」

「眞子も押さえて」

女生徒は律を睨みつけたまま言うと音夢は苦笑いを浮かべて困った
ように笑うと、

「……響律だ。俺はお前をなんと呼んだら良いんだ？」

「水越眞子よ」

律は諦めたようで不機嫌そうな表情で一応、自己紹介をすると女生
徒も律に向かい『水越眞子』と名乗るが、

「……それで、何の用だ？」

「これ、あなたよね？」

律は関わりたくないとは思っているため、早く話を終わらせると言
うと眞子は先日、律が出演した演奏会で律が受けた取材の記事がの

った新聞記事を律に向かい突き出す。

「だからどうした？」

「律、お前、弾いてきたのかよ？」

律はその記事を興味なさそうに言うと新聞など読むわけのない純一が驚きの声をあげ、

「……仕方ないだろ。昔、世話になった人の顔をつぶすわけにもいかなかったんだよ」

「あんなのね」

律は純一の様子にため息を吐くと眞子は確認するように律に聞き返すと、

「ああ。これで、お前の用事は終わりだな」

「終わりなわけがないでしょ」

律は眞子との話を強制的に終わらせようとするが眞子はため息を吐いた後、

「あなたの演奏を聴かせて」

「断る」

律の演奏を聴きたいと言うが律は間髪も入れずに眞子の頼みを断る。

「なんでよ？」

「お前に聴かせる義理はない」

眞子は律の答えが不服だったようで聞き返すが眞子に聴かせるつもりはないと答え、

「それはあたしなんかにあんたの演奏は理解できないって事？」

「眞子は吹奏楽部でフルートを吹いているから、響君の演奏を聴きたいんだって」

眞子は律の言葉に睨みつけるように言うと音夢が律に眞子が律の演奏を聴きたい理由を説明するが、

「だからと言って、俺がこいつのために弾く義理はない」

「あんた、プロだからって、あたしの事をバカにしてるの！！」

律が考えを変える理由にはならず、眞子は律を殴りかかる勢いで律に向かい言うと、

「プロだからお前をバカにしてるって言うなら、報酬はあるのか？
ただ、聴かせるって言うなら俺にだって、プロとしての意地がある。友人に頼まれたり、俺の気分で弾くなら良いが会ったばかりのお前に強制されるゆえんはねえよ」

「律の言い分が正しいな」

「何だよ！？」

律は自分の正当性を主張し、純一は律の意見に納得すると眞子は純一を怒鳴りつける。

「律の言ったとおりだろ」

「それで、音夢」

「ちょっと、待って、店長からシフト表を預かってるから」

純一はかったるそうに言い、律は眞子の事など気にせず音夢に言う。音夢は苦笑いを浮かべながら自分の鞆からシフト表を取り出し、律に渡し、

「ん。さんきゅ。それじゃあ、目的も達したし、帰るかな」

「それを風紀委員の私が許すと思いますか？」

「……仕方ないな。教室で時間まで寝るか」

律は音夢からシフト表を受け取ると音夢に礼を言って家に帰ると言う。律の言葉を聞き音夢ががちりと律の肩を掴むと律は観念したように授業を受けて行くと言う。

「響」

「……いい加減にしてくれ」

律は廊下を歩いていると眞子が律を呼び止め、眞子はあれから休み時間の度に律の元に来ており、『演奏を聴かせる』と言ったため律は嫌気がさしてきているようであらうため息を吐くと、

「あんたが観念すれば良いのよ。それとも、そんなに弾きたくない理由があるの？」

「……何度も言わせるな。お前のために弾いてやる義理はない」

眞子は律に観念して演奏を聴かせろと言うと律が弾かない理由を聞くが律は大きなため息を吐き、

「だいたい、俺の迷惑を考えろ。お前が騒ぐせいで、音楽に興味のない人間にまで『演奏を聴かせる』だ『プロだから頭にのってる』とか言われてるんだぞ」

「あんたが弾けば何も問題なかったんでしょ」

律は眞子に向かい俺の都合を考えろと言うが眞子も律の態度に頭にきているようであらう都合などどうでも良いと言い切り、

「……聴きたいなら、CDでも聴けよ」

「それじゃあ、ダメなのよ」

律は言うだけ無駄と言いたいよう疲れたように言つと眞子には彼女にも何かあるようで思いつめたように言う。

「……………何がだよ？」

「あたし、12月のクリパで吹奏楽部の演奏でソロをやることになったのよ」

「……………プレッシャーに押しつぶされそうになつてるわけか？」

律は眞子の様子にそれなりに何かを感じたようで聞き返すと眞子は自分がクリスマスパーティーでの大役で緊張してしているようであり、律は眞子の言葉に少し考えるようなそぶりで見せると眞子の状況を確認すると、

「そうよ。だから、あんな舞台上で弾けるあなたの演奏を聴きたかったのよ」

「……………プレッシャーとは無縁そうなのにな」

「それはどう言う意味よ？」

眞子は少し悔しそうな表情をすると律は眞子を小馬鹿にし、眞子は律を言葉が気に入らないようで律を睨みつけるが、

「そのままだ」

律は悪びれる事なく言い切り、

「水越、お前はフルートが好きか？」

「好きよ。当たり前でしょ」

眞子に質問を投げかけると眞子は律の質問に迷うことなく答える。

「なら、俺の演奏なんて聴く必要ないだろ。俺はお前のように好きなものを好きと言え無かった。言う勇気がなかった。そんな人間の演奏なんて聴いてもお前の背中を押せねえよ」

「どう言う事よ？」

律は眞子の言葉に自分の演奏など必要ないと言うが眞子は律の言葉の意味がわからないように聞き返すと、

「好きなものなんだろ？　なら、それを楽しめば良いんだろ？　それだけだ」

「それが出来れば苦労なんてしないわよ」

律は微妙に照れくさいように頭をかきながら言うと眞子は呆れたようにため息を吐くが、

「好きなものを好きだって言えるのはそれだけで才能だって事だ。その想いと向き合えれば、プレッシャーなんて感じる暇はねえよ」

律はそう言うと眞子から逃げるように歩きだす。

「ちょっと、待ちなさいよ」

「……お前はどこまでついて来る気だ？」

「……!？」

律は自分の後を追いかけてくる眞子を見てため息を吐くと眞子は「の場所が男子トイレの前だと気づき逃げるように歩きだし、

『何だ？ 白河じゃ飽き足らず、水越にまで手を出したか？』

「……そんなわけがないだろ」

律と眞子の様子を見ていたクラスメートが律をからかうように言うと律は肩を落とす。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6370m/>

Eternal Songs

2011年9月5日19時41分発行